

GLAFS

博士課程教育リーディングプログラム
「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」

Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

2016 活動報告書

目次

CONTENTS

はじめに……002

第1章 プログラムについて……003

- 1 プログラムの概要……004
- 2 カリキュラムと修了要件……005
- 3 プログラム担当教員……008
- 4 履修生に対する経済的支援……011
- 5 応募状況と合格者数……012

第2章 2016年度教育活動……013

- 1 講義群……014
- 2 演習……020
- 3 合宿……042
- 4 国際・産学活動……044
- 5 シンポジウム……046
- 6 研究会・セミナー……048

第3章 若手研究者による研究成果……051

- 1 論文等……052
- 2 受賞歴……072
- 3 コース生による研究成果……073

4 コース生受賞歴……090

第4章 広報活動……091

- 1 バンフレット・ホームページ……092
- 2 シンポジウム・ポスター等……093

[添付資料] 2016年度学生募集要項……095

はじめに

この報告書は GLAFS の平成 28 年度（2016 年度）の活動報告です。

「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」（GLAFS）には、平成 28 年度末現在、73 人のコース生が在籍しています。

活力ある超高齢社会を実現するためには、分野横断的専門家のチームと地域住民、行政、企業等による協働的活動を主導し、様々な現場の様々な課題を解決する力を備えた多様な人材が必要になります。

GLAFS では、いわゆる座学としての高齢社会問題に関する俯瞰的講義や先端的テーマについてのセミナーの他、様々な専門の学生や教員がチームを組んで、地域住民や行政等と現実的な課題解決に取り組むフィールド演習（グループ共同演習）や、様々な現場の第一線で活躍されている実践家をお招きして深い議論をしていただくコアセミナーなどを通して、自らの専門分野に関する研究能力だけでなく、俯瞰力・実践力を身に着けたリーダーの養成に注力してきました。2016 年度末には、初めての修了生（4 名）を送り出すなど、その成果が表れ始めてきたところです。

また、2016 年度に受けた中間評価では A の評価をいただきました。本プロジェクトの終了する 2019 年度末に向けて、また、その次の段階における本プログラムの飛躍的な展開を視野に入れつつ、2017 年度も着実にプログラムを推進する所存です。

平成 29 年 4 月

プログラムコーディネーター

東京大学高齢社会総合研究機構・機構長

工学系研究科教授

大方潤一郎

1. プログラムについて

1. プログラムの概要

本プログラムの目的

日本は、2030年には人口の1/3が高齢者、1/5が後期高齢者という超高齢社会になることが予想されている。また、韓国やシンガポールも2040年には高齢者人口が1/3を超え、中国も2060年には高齢者人口が1/3に達することが予測される。こうした超高齢社会は世界の歴史に先例のない未知の領域である。高齢化最先進国としての日本には、世界に先駆け、活力ある超高齢社会の姿を構想し実現する責務がある。本プログラムは、高齢者が活力を持って地域社会の中で生活できる期間をより長く、要介護期間や施設収容期間を最小化することを通じて、高齢者自身の生活の質を高め、家族と社会の負担を軽減し、社会全体の活力を維持向上するため、東京大学の高齢社会総合研究機構（IOG）を中核に9研究科29専攻の総力を結集し、修士博士一貫の大学院教育により、活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダーを養成しようとするものである。

活力ある超高齢化社会を実現するためには、都市や地域での市民生活を支える生活環境基盤の3領域、すなわち、

1. 【い（医）】ケア・サポート・システム：医療・看護・介護・みまもり・保育・子育て・福祉等の統合的システム
2. 【しょく（食・職）】社会的サポート・システム：社会的包摂・社会参加・ムコミュニティ活動等の促進体制
3. 【じゅう（住）】物的空間的生活環境システム：居住環境・歩行環境・交通環境・街並環境・商業環境・コミュニティ交流施設・オープンスペースや生活支援システム

をリデザインし組み替えていく必要がある。こうした新しい超高齢社会のための社会システムを構想し実現する取り組みを世界各地の現場で主導する、高度な人材を養成することが本プログラムの目的である。



本プログラムの組織
※ IOG：高齢社会総合研究機構

本プログラムの特色

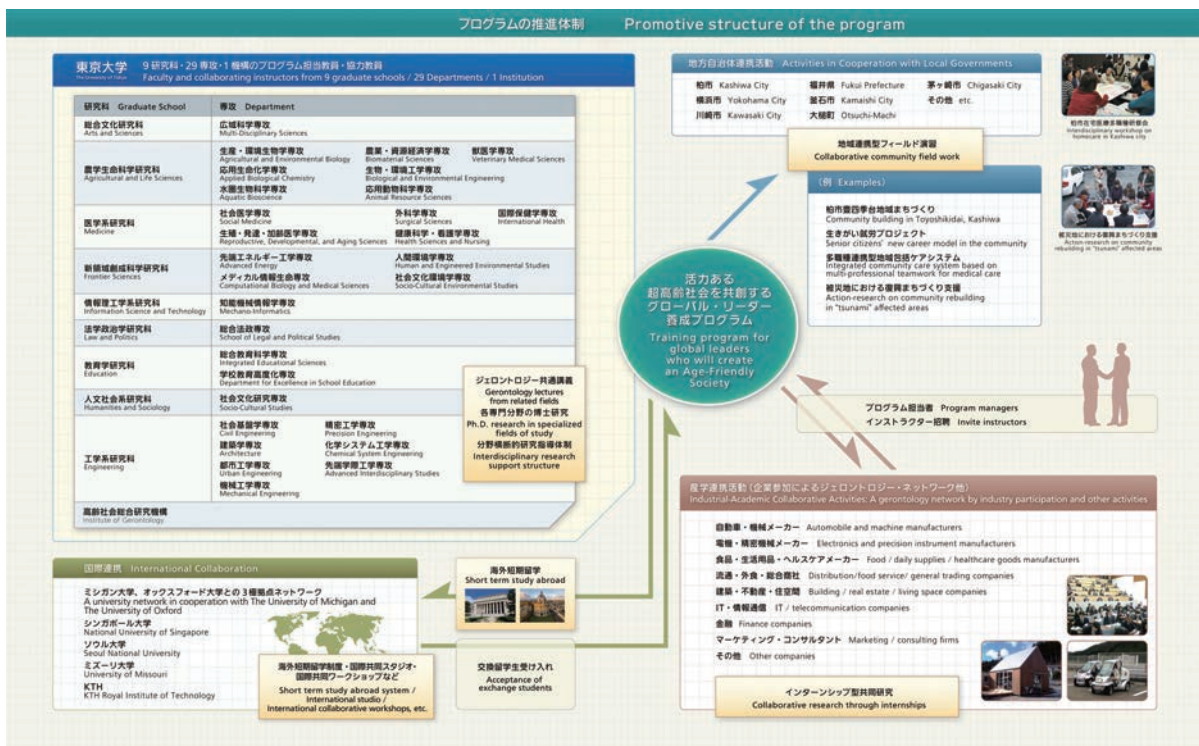
本プログラムでは、本学の1機構9研究科29専攻の教員や連携企業・自治体および海外の大学等のサポートの下で、選り抜かれた大学院生が、

1. 高齢社会問題に関する講義を通じ、高齢社会問題に関する俯瞰的総合的な知識を獲得し
2. 多様な分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組むフィールド・アクション・スタディ演習や、国際的チームワーク力を育成するグローバル演習によって、現実社会における課題解決能力を養い
3. 高齢社会の実態や真のニーズを反映した独創的で質の高い博士研究を成し遂げることを通じ、活力ある超高齢社会を共創するための能力

すなわち、

1. 自身の専門分野に関する専門的学術研究能力
2. 高齢社会問題に関する幅広い俯瞰力
3. 多分野の専門家チームを主導して問題解決に取り組む実践的課題解決能力

の3つの能力を兼ね備えた、グローバルなリーダーシップを発揮できる人材を養成する。



プログラムの特色

2. カリキュラムと修了要件

カリキュラム

本プログラムでは次のような「講義」と「演習」による独自のカリキュラムを組んで、超高齢社

会を共創していくリーダーを育成する。

【俯瞰力を養う高齢社会総合研究学・講義群】

9 研究科・29 専攻・1 機構の教員が連携し、様々な角度から超高齢社会の課題を講義。

■ 高齢社会総合研究学概論 I および II

■ 高齢社会総合研究学特論

高齢社会の社会制度

高齢社会の住まい・まちづくり

高齢社会のケア・サポート・システム

高齢者法

高齢社会の人文学・社会科学

高齢者の食と健康

ジェロンテクノロジー

【分野横断的にアプローチする演習】

■ 実践的課題解決能力を養うフィールド演習

演習指導には企業・行政等の現場の実務家をインストラクターとして招請。

F 演習 1：分野横断的チームを組んで地域社会の現実の課題に取り組むコミュニティ・アクション型（地域連携）

F 演習 2：多様な高齢者や市民に寄り添い心を通わせるケア・システム実習型（対人ケア実習）

F 演習 3：企業・行政等の現場で先端的課題に取り組むインターンシップ型（産学連携）

■ グローバルなリーダーシップを養うグローバル演習

高齢社会総合研究に関する世界トップの教育拠点であるミシガン大学とオックスフォード大学、そして東京大学が連携。

G 演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

G 演習 2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

G 演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー（希望者のみ）

■ 分野横断的研究指導を行うコアセミナー

他分野の教員やインストラクター、学生等による分野横断的なディスカッションの場を通じて学際的な研究指導の体制を確保。

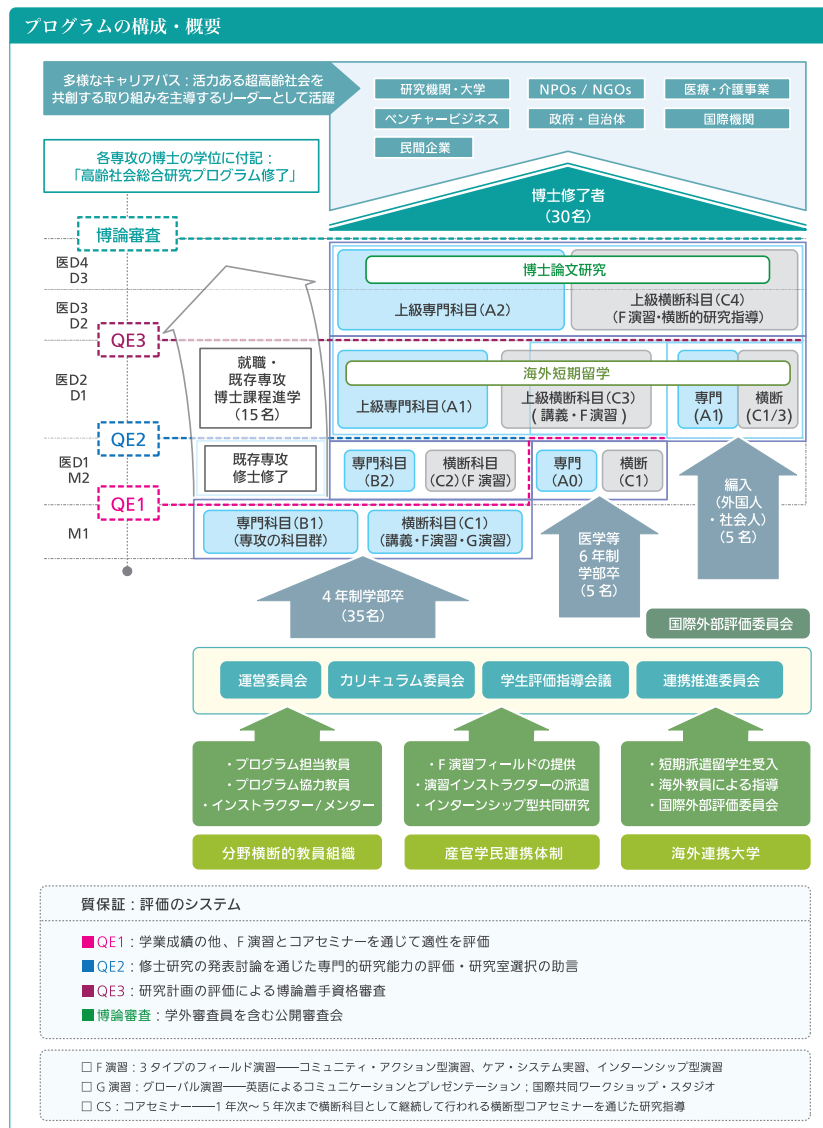
CS1：専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導

CS2：様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きし、お話を伺い、ディスカッションするケーススタディ

履修要件

本プログラムのコース生は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する科目について20単位（講義10単位・演習10単位）以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位（講義10単位・演習8単位）以上を、博士後期課程入学時から本プログラムに編入したコース生は16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授ける博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が付記される。

なお、博士前期課程（修士課程）において（4年制博士課程においては2年次年度末までに）12単位（講義8単位・演習4単位）以上を取得すること。ただし、博士後期課程入学時から本プログラムに参加したコース生は博士後期課程修了時までまでに16単位（講義10単位・演習6単位）以上を取得するものとする。（2016年度シラバスより）



プログラムの枠組み

3. プログラム担当教員

プログラム担当教員

* 職名は 2016 年度 4 月 1 日現在

氏名	所属 (研究科・専攻等)・職名	専門	役割分担
(プログラム責任者)			
光石 衛	大学院工学系研究科長・教授	医用工学、生産工学	事業総括、プログラムの企画推進調整
(プログラムコーディネーター)			
大方 潤一郎	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・機構長	都市計画	プログラムの企画推進調整、運営委員会委員長、居住環境分野担当
(プログラム担当教員)			
秋山 弘子	高齢社会総合研究機構・特任教授	老年学	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当、国際連携推進担当
辻 哲夫	高齢社会総合研究機構・特任教授	在宅医療、ケア政策、社会保障政策	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当、産官学民連携推進担当
田中 敏明	高齢社会総合研究機構・特任教授	リハビリテーション科学、理学療法、福祉工学	生活サポートシステム分野担当
飯島 勝矢	高齢社会総合研究機構・准教授	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
武川 正吾	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・教授	福祉社会学	社会システム分野担当
白波瀬 佐和子	大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻・教授	社会学	社会システム分野担当
牧野 篤	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	社会教育学、生涯学習論	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
東郷 史治	大学院教育学研究科総合教育科学専攻・准教授	教育生理学	ケアシステム分野担当、プログラム評価担当
北村 友人	大学院教育学研究科学校教育高度化専攻・准教授	教育政策、国際教育開発論	社会システム分野担当、国際連携推進担当
加藤 淳子	大学院法学政治学研究科総合法政専攻・教授	政治学	社会システム分野担当、国際連携推進担当
樋口 範雄	大学院法学政治学研究科法曹養成専攻・教授	英米法、医事法、信託法	社会システム分野担当、国際連携推進担当
岩村 正彦	大学院法学政治学研究科法曹養成専攻・教授	社会保障法	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
岩本 康志	大学院経済学研究科現代経済専攻・教授	公共経済学	社会システム分野担当、カリキュラム編成担当
荒井 良雄	大学院総合文化研究科広域科学専攻・教授	人文地理学	社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
原田 昇	大学院工学系研究科都市工学専攻・教授	都市交通計画	居住環境分野担当
羽藤 英二	大学院工学系研究科社会基盤学専攻・教授	都市計画・交通計画	居住環境分野担当
大月 敏雄	大学院工学系研究科建築学専攻・教授	建築計画	居住環境分野担当、カリキュラム編成担当
中尾 政之	大学院工学系研究科機械工学専攻・教授	生産技術、ナノ転写、失敗学	生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当

浅間 一	大学院工学系研究科精密工学専攻・教授	ロボット工学	生活サポートシステム分野担当
大久保 達也	大学院工学系研究科化学システム工学専攻・教授／総括プロジェクト機構プラチナ社会総括寄付講座・教授（兼務）	プラチナ社会、化学工学、ナノ材料	生活サポートシステム分野担当
巖淵 守	先端科学技術研究センター・准教授	支援工学	生活サポートシステム分野担当
安永 円理子	大学院農学生命科学研究科附属生態調和農学機構・准教授（同研究科生物・環境工学専攻兼任／生産・環境生物学専攻兼任）	ポストハーベスト工学	食分野担当
阿部 啓子	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・特任教授	食品科学、味覚科学、遺伝子科学	食分野担当、産官学民連携推進担当
佐藤 隆一郎	大学院農学生命科学研究科応用生命化学専攻・教授	食品生化学	食分野担当、プログラム自己評価・外部評価担当
潮 秀樹	大学院農学生命科学研究科水圏生物学専攻・教授	水産化学・食品科学	食分野担当
中嶋 康博	大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻・教授	農業経済学、フードシステム論	食分野担当
関崎 勉	大学院農学生命科学研究科食の安全研究センター長・教授（同研究科応用動物科学専攻兼任、獣医学専攻兼任）	獣医細菌学、食品病原微生物学	食分野担当
橋本 英樹	大学院医学系研究科社会医学専攻・教授	医療経済学、社会学	ケアシステム分野担当、社会システム分野担当、フィールド演習企画担当
秋下 雅弘	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・教授／高齢社会総合研究機構・副機構長	老年医学	ケアシステム分野担当、カリキュラム編成担当
小川 純人	大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学専攻・准教授	老年医学	ケアシステム分野担当
本間 之夫	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	泌尿器外科学	ケアシステム分野担当
芳賀 信彦	大学院医学系研究科外科学専攻・教授	リハビリテーション医学	ケアシステム分野担当
神馬 征峰	大学院医学系研究科国際保健学専攻・教授	国際保健・ヘルスプロモーション	ケアシステム分野担当
永田 智子	大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻・准教授	地域看護学	ケアシステム分野担当
森 武俊	大学院医学系研究科ライフサポート技術開発学（モルテン）寄附講座・特任教授	看護工学	ケアシステム分野担当、生活サポートシステム分野担当
堀 洋一	大学院新領域創成科学研究科先端エネルギー工学専攻・教授	電気工学、制御工学	生活サポートシステム分野担当
菅野 純夫	大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・教授	ゲノム医学	ケアシステム分野担当
加藤 直也	医科学研究所先端ゲノム医学分野・准教授／大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻・兼任	消化器内科学	ケアシステム分野担当、フィールド演習企画運営担当
鎌田 実	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	生活支援工学	プログラムコーディネーター補佐、生活サポートシステム分野担当、産官学民連携推進担当
飛原 英治	大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻・教授	熱工学、冷凍空調工学	生活サポートシステム分野担当
岡部 明子	大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・教授	建築環境教育	居住環境分野担当
檜山 敦	大学院情報理工学系研究科知能機械情報学専攻・特任講師	ヒューマンインタフェース	生活サポートシステム担当

学外プログラム担当者

Toni Claudette Antonucci	ミシガン大学・副学長 (Associate Vice President for Research, Social Sciences and the Humanities)	ジェロントロジー	国際連携アドバイザー
David English	ミズーリ大学法科大学院・教授	高齢者法	国際連携アドバイザー
Sarah Harper	Director, Oxford Institute of Population Ageing / Professor of Gerontology and Senior Research Fellow, Nuffield College, Oxford University	ソーシャルジェロントロジー	国際連携推進担当
Gyounghae Han	Professor, Division of Consumer Studies and Child and Family Studies, College of Human Ecology, Seoul National University	Family Study	国際連携推進担当
Angelique Chan	Associate Professor, Department of Sociology, National University of Singapore and Duke-NUS Graduate Medical School	社会学	国際連携推進担当
大内 尉義	国家公務員共済組合連合会・虎の門病院長／東京大学・名誉教授	老年医学、老年学	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
永田 久美子	社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修東京センター・研究部部长	認知症ケア、当事者ネットワーク	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
太田 秀樹	医療法人アスミス・理事長	高齢者・障害者医療	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
秋山 正子	(株)ケアーズ白十字訪問看護ステーション・統括所長	地域看護、在宅医療連携	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
木村 昌平	セコム株式会社 取締役会長一般社団法人日本家庭教育協会・会長／益子昌平塾・塾長／セコム株式会社・前会長	社会の安全安心の確保	産官学民連携アドバイザー
野呂 順一	(株)ニッセイ基礎研究所・代表取締役社長	保険数理、年金数理、経済統計	産官学民連携アドバイザー
濱 隆	大和ハウス工業(株)・取締役常務執行役員／環境エネルギー事業担当	高齢者住宅開発、スマートコミュニティ開発	産官学民連携アドバイザー
滝山 真也	(株)ベネッセホールディングス・執行役員／株式会社ベネッセスタイルケア・代表取締役社長	介護事業等のグループ経営	産官学民連携アドバイザー
関根 千佳	(株)ユーディット・会長兼シニアフェロー／同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科・教授	ユニバーサルデザイン	産官学民連携アドバイザー
大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院・教授	医療福祉ジャーナリズム	産官学民連携アドバイザー
南 砂	読売新聞東京本社・取締役調査研究本部長	医療・医学、科学技術政策、メディア論	ケアシステム分野担当、産官学民連携アドバイザー
河出 卓郎	(株)毎日新聞東京本社・企画編集室／東京都健康長寿医療センター・非常勤研究員	社会保障論	産官学民連携アドバイザー
John Creighton Campbell	ミシガン大学・名誉教授／高齢社会総合研究機構・客員研究員	ジェロントロジー	国際連携推進アドバイザー
宮島 俊彦	内閣官房社会保障改革担当室・室長／岡山大学・客員教授／日本介護経営学会・理事	高齢者ケアシステム	産官学民連携アドバイザー

特任講師・特任助教

菅原育子	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会心理学、社会老年学
村山洋史	高齢社会総合研究機構・特任講師	社会疫学、公衆衛生学、老年学
後藤純	高齢社会総合研究機構・特任講師	都市計画、まちづくり、地域包括ケアシステム、総合老年学
木全真理	高齢社会総合研究機構・特任助教	在宅看護

三浦貴大	高齢社会総合研究機構・特任助教	福祉工学、ヒューマンインタフェース、アクセシビリティ、音響工学
荻野亮吾	高齢社会総合研究機構・特任助教	社会教育、生涯学習
孫輔卿	高齢社会総合研究機構・特任助教	老年医学
室山良介	高齢社会総合研究機構・特任助教	消化器内科学
福井康貴	高齢社会総合研究機構・特任助教	社会学
朴孝淑	高齢社会総合研究機構・特任助教	労働法
西野亜希子	高齢社会総合研究機構・特任助教	建築計画、住宅改修
橋詰力	高齢社会総合研究機構・特任助教	分子生物学、栄養学
藤崎万裕	高齢社会総合研究機構・特任助教	地域看護学

4. 履修生に対する経済的支援

奨学金制度

優秀な学生が経済的な理由から博士課程への進学を断念することのないよう、学生の希望と能力に応じ奨励金を支給する制度が用意されている。2016年度は、博士前期課程（修士課程）2年次のコース生には、概ね授業料に相当する額、博士後期課程のコース生には、学業成績等に応じ月額20万円を上限とした額と定めた。

留学制度

原則として全学生を第3年次（医学系等4年生博士課程にあっては第2年次）の夏休み（8月）から冬学期の間、6ヶ月以内の海外短期留学で派遣し、その旅費を支給することとした。以下がその概略である。

■ミシガン大学：修士課程レベル以上のISR（Institute for Social Research）、SPH（School of Public Health）などのサマースクールや短期コースの受講。

■ミズーリ大学：主に高齢社会問題について法学分野の研究を遂行する学生を想定。

■オックスフォード大学：修士課程レベル以上のサマースクールや短期コースの受講。

■アジア地域における高齢社会問題を研究したい学生のためにはシンガポール大学、ソウル大学等と連携。

■その他：上記に限らず学生は、博士研究のテーマに適した留学先への留学が可能。

*海外短期留学には、大学への留学だけではなく、海外の企業等におけるインターンシップ型留学を含む。

5. 応募状況と合格者

2016年 応募状況と合格者

プログラム募集定員数（実数）		35人
① 応募学生数		30人
	うち留学生数	9人
	うち自大学出身者数	8人（0人）
	うち他大学出身者数	22人（9人）
	うち社会人学生数	12人（4人）
	うち女性数	13人（5人）
② 合格者数		27人
	うち留学生数	8人
	うち自大学出身者数	8人（0人）
	うち他大学出身者数	19人（8人）
	うち社会人学生数	11人（4人）
	うち女性数	10人（4人）
③ ②のうち受講学生数		26人
	うち留学生数	7人
	うち自大学出身者数	8人（0人）
	うち他大学出身者数	18人（7人）
	うち社会人学生数	11人（4人）
	うち女性数	9人（3人）
プログラム合格倍率（①応募学生数／②合格者数） （小数点第三位を四捨五入）		1.11倍
充足率（合格者数／募集定員）		77.00%
【備考】 ※編入学生： 平成28年度：修士課程2年次に編入学 1名、博士後期課程1年次に編入学 13名 ※（ ）は留学生の人数 ※2017年3月31日現在		

2. 2016 年度教育活動

1. 講義群

2016年度には以下のように必修・選択必修をさらに充実させ、このほかにも昨年同様、20の選択講義を設けた。

■ 高齢社会総合研究学概論 I (高齢者の体と心：老いとつきあう)

本授業では高齢社会におけるさまざまな課題に対して、主として高齢者の体と心について、国内のトップ講師からの講義を受け、老いとつき合うとはどういうことであるのか、その基礎を分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて、高齢者の健康寿命を延ばし、経済活動・地域活動への参加を促すことによって高齢者が快活に暮らし、社会の支え手となって活躍する活力ある超高齢社会について考えていく。

【授業日程】

- 4/13 第1回 ジェロントロジー：長寿社会を支える学際科学（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 4/20 第2回 なぜ老いる？ならば上手に老いるには？（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構准教授）
- 4/27 第3回 疾病・障害とヘルスプロモーション（秋下雅弘：医学系研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 5/11 第4回 ケアの当事者学（上野千鶴子：東京大学名誉教授・NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク（WAN）理事長）
- 5/18 第5回 高齢期の社会関係（菅原育子：高齢社会総合研究機構特任講師）
- 5/25 第6回 老化と生物学（橋詰力：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 6/1 第7回 高齢者と看護学（山本則子：医学系研究科教授）
- 6/8 第8回 身体機能を補う福祉工学機器（伊福部達：北海道大学、東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構客員研究員）
- 6/15 第9回 栄養とエイジング（阿部啓子：東京大学名誉教授・農学生命科学研究科特任教授）
- 6/22 第10回 知的機能の変化と適応（高山緑：慶応義塾大学教授）
- 6/29 第11回 シニアの学ぶ、働く、遊ぶ（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 7/6 第12回 死をめぐる諸問題（清水哲郎：人文社会系研究科特任教授）
- 7/13 第13回 次世代高齢者の価値観とライフスタイル（上田啓介：(株)木楽舎）

■ 高齢社会総合研究学概論Ⅱ（高齢社会のリ・デザイン）

本授業では主として社会システムおよび、それを支える居住環境システムについて、国内のトップ講師からの講義を受け、高齢社会のリ・デザインについて分野横断的に学ぶことが狙いである。本講義を通じて活動レベルが低下して介助が必要になった後も、施設収容により対応するのではなく、住み慣れた地域社会の中で、できるだけ自立的に活力を維持しながら暮らせる社会システム及び居住環境システムについて考える。

【授業日程】

- 9/28 第1回 生涯現役社会をめざして（横石知二：(株)いろどり代表取締役社長）
- 10/5 第2回 高齢化の人口学（白波瀬佐和子：人文社会系研究科教授）
- 10/12 第3回 人口減少社会における年金と社会保障財政（岩本康志：経済学研究科教授）
- 10/19 第4回 年齢に基づく雇用システムと高齢者雇用（濱口桂一郎：独立行政法人労働政策研究・研修機構統括研究員）
- 10/26 第5回 超高齢社会の都市計画・まちづくり（大方潤一郎：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）
- 11/2 第6回 高齢期の住まい方（大月敏雄：工学系研究科教授）
- 11/9 第7回 高齢者の移動を支える（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 11/16 第8回 シニア×ICT（廣瀬通孝：情報理工学系研究科教授）
- 11/30 第9回 社会福祉とコミュニティケア—歴史と理論—（武川正吾：人文社会系研究科教授）
- 12/7 第10回 身体・認知機能を活かしたコミュニティビジネス（戸枝陽基：社会福祉法人むそう代表）
- 12/14 第11回 自己決定と本人保護（樋口範雄：法学政治学研究科教授）
- 1/11 第12回 21世紀の医療・介護・福祉のかたちを考える（辻哲夫：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 1/18 第13回 超高齢社会を支えるコミュニティ（後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅱ（超高齢社会の住まい・まちづくり）

超高齢社会の諸課題に対応した地域社会の物的・社会的な生活環境について、多面的に講義を行う。

【授業日程】

- 4/5 総論 都市と計画
 - 第1回 高齢社会対応のまちづくり（大方潤一郎：工学系研究科教授・高齢社会総合研究機構機構長）
 - 第2回 住区構成論（西野辰哉：金沢大学准教授）
- 4/19 交通とまちづくり
 - 第3回 高齢社会と交通（原田昇：工学系研究科教授）

- 第4回 高齢者の移動とまちづくり (大森宣暁：宇都宮大学教授)
- 4/26 バリアフリー環境とまちづくり
- 第5回 バリアフリーのまちづくり (高橋儀平：東洋大学教授)
- 第6回 弱視者にとってのバリアフリー (松田雄二：工学系研究科准教授)
- 5/10 地域に住む
- 第7回 高齢社会の住まい—近居— (大月敏雄：工学系研究科教授)
- 第8回 高齢社会と地域循環居住 (大月敏雄：工学系研究科教授)
- 5/17 高齢者の住まい
- 第9回 シルバーステージの住まい (番場美恵子：昭和女子大学講師)
- 第10回 高齢者の集合住宅 (石東直子：石東・都市環境研究室主宰)
- 5/24 高齢者の転倒実態
- 第11・12回 転倒の実態解明 (小林吉之：国立研究開発法人産業技術総合研究所研究員)
- 屋内外の階段の転倒 (古瀬敏：静岡文化芸術大学名誉教授)
- 日常災害 (直井英雄：東京理科大学名誉教授)
- 5/31 高齢者の転倒 (セミナー)
- 第13回 認知症高齢者の転倒と骨折 (三浦研：京都大学教授)
- 第14回 高齢者の転倒と予防 (田中敏明：高齢社会総合研究機構特任教授)
- 6/7 地域施設配置論 (セミナー)
- 第15回 住民主体の協働まちづくり (後藤純：高齢社会総合研究機構特任講師)
- 第16回 建築機能の配置 (西野亜希子：高齢社会総合研究機構特任助教)

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅳ (高齢社会のケア・サポート・システム)

高齢者の特性や生活を理解し、体系的に高齢社会における高齢者へのケア・サポート・システムを学ぶ。

【授業日程】

- 6/16 第1回 高齢社会に求められるケア・サポート・システム (飯島勝矢：高齢社会総合研究機構准教授)
- 6/16 第2回 医療制度改革と地域包括ケアシステム (宮島俊彦：内閣官房社会保障改革担当室室長)
- 6/23 第3回 老年症候群 (小川純人：医学系研究科准教授)
- 6/23 第4回 認知症の理解 (亀山祐美：医学系研究科助教)
- 6/30 第5回 高齢者に対する医療提供の考え方 (小島太郎：医学系研究科助教)
- 6/30 第6回 高齢者のエンド・オブ・ライフケア：状態別の経過の理解 (山本則子：医学系研究科教授)

- 7/7 第7回 高齢者を介護する家族への支援（山本則子：医学系研究科教授）
- 7/7 第8回 高齢者に必要なケアマネジメント（成瀬昂：医学系研究科助教）
- 7/14 第9回 高齢社会の地域連携と地域アセスメント（永田智子：医学系研究科准教授）
- 7/14 第10回 在宅医療からの地域包括ケアシステムの実際：訪問看護を中心に（秋山正子：白十字訪問看護ステーション統括所長）
- 7/21 第11回 地域包括ケアシステムの理論とチームアプローチ（堀田聡子：国際医療福祉大学大学院教授）
- 7/21 第12回 在宅医療からの地域包括ケアシステムの実際：訪問診療を中心に（太田秀樹：医療法人アスミス理事長）

■ 高齢社会総合研究学特論VI（高齢者法）

高齢者に関わる法制度や政策課題について、オムニバス形式での講義およびディスカッションを行う。

【授業日程】

- 9/26 第1回 イントロダクション 高齢者法の概要と意義
- 10/3 第2回 高齢者徘徊最高裁判決
- 10/17 第3回 高齢者と犯罪（辻貴則：警察庁警備局公安課）
- 10/24 第4回 高齢者と医療1
- 10/31 第5回 高齢者と医療2
- 11/7 第6回 成年後見制度と代理権の活用
- 11/14 第7回 高齢者の住まい1 さまざまな選択肢 入居契約 CCRCと日本版CCRC
- 11/21 第8回 高齢者の住まい2 在宅の現状 沖野論文（老人ホーム契約）
- 12/5 第9回 年金 高齢者の経済的基盤 リバース・モーゲッジ（松井孝太：杏林大学講師、中田裕子：東京大学博士課程）
- 12/12 第10回 相続・遺言・信託
- 12/19 第11回 介護（外岡潤：弁護士・法律事務所おかげさま）
- 12/26 第12回 その他の高齢者問題1 高齢者虐待
- 1/5 第13回 その他の高齢者問題2 ロボット医療・介護

* 講義はすべて樋口範雄：法学政治学研究科教授。（ ）内はゲストスピーカー。

■ 高齢社会総合研究学特論VIII（高齢社会の人文科学・社会科学）

高齢社会・超高齢社会における人口構造、社会構造、社会政策、ライフコース、生涯学習などについて、人文科学および社会科学的なアプローチにより、活力ある超高齢社会を研究するうえでの基本的な知識を得ることを目標とする。

【授業日程】

- 9/29 第1回 高齢化の国際比較：アジアを中心に（大泉啓一郎：(株)日本総合研究所上席主任
研究員）
- 10/06 第2回 長寿社会に生きる（秋山弘子：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 10/13 第3回 生涯学習が課題化される社会：少子高齢・人口減少社会におけるまちづくり
（牧野篤：教育学研究科教授・高齢社会総合研究機構副機構長）
- 10/20 第4回 人口高齢化の社会的意味：世帯／家族の変容に着目して（白波瀬佐和子：人
文社会系研究科教授）
- 10/27 第5回 高齢者に対する人生の最終段階のケア：臨床倫理の視点から（清水哲郎：人文
社会系研究科特任教授）
- 11/10 第6回 長寿時代のエンドオブライフ・ケア（会田薫子・人文社会系研究科特任教授）
- 11/17 第7回 臨床心理学の視点（高橋美保：教育学研究科准教授）
- 11/24 第8回 老いと病いの現象学（榊原哲也：人文社会系研究科教授）
- 12/01 第9回 グローバル化とケアの標準化（小川全夫：公益財団法人福岡アジア都市研究所
特別研究員）
- 12/08 第10回 ソーシャル・サポート再考（中田知生：北星学園大学准教授）
- 12/15 第11回 高齢期の就労・労働市場（福井康貴：高齢社会総合研究機構特任助教）
- 12/22 第12回 超高齢化と社会政策（武川正吾：人文社会系研究科教授）
- 1/12 第13回 新しい認知症ケア時代の社会的課題（井口高志：奈良女子大学准教授）

■ 高齢社会総合研究学特論Ⅸ（高齢者の食と健康〈維持〉）

超高齢化を目前にして、いつまでも自立して自分らしく生きる為に、より早期からの健康維持～
虚弱予防が重要な鍵となる。そこには本人自身の意識変容・行動変容と良好な社会環境の実現の両
面が必要であり、高齢者の様々なプロダクティビティの増進が期待される。そこで、本講義では虚
弱（フレイル：Frailty）の最たる要因である加齢性筋肉減少症（サルコペニア）を予防する為に、
『食』を中心に見据えた高齢期における早期からの健康維持を包括的な視点から、その予防対策に
関する最新知識を学ぶ。

【授業日程】

- 11/10 第1回 わが国におけるフレイル（虚弱）予防対策の課題と現状
（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授）
- 第2回 サルコペニア研究の最前線：世界の動向および包括的予防アプローチ
（飯島勝矢：高齢社会総合研究機構教授）
- 11/24 第3回 高齢期における歯科口腔機能の重要性
（平野浩彦：東京都健康長寿医療センター研究所専門副部長）
- 第4回 「食の楽しみ」という原点から介入する高齢者の食育

- (川口美喜子：大妻女子大学教授)
- 12/1 第5回 官民一体的な健康増進活動：～先進的取り組みから学ぶもの～
(野口緑：尼崎市市民協働局ヘルスアップ戦略担当)
- 第6回 高齢者の栄養と転倒・骨折
(小川純人：医学系研究科准教授)
- 12/8 第7回 栄養疫学研究から見た日本人の栄養摂取
(佐々木敏：医学系研究科教授)
- 第8回 高齢期における身体活動と運動習慣
(宮地元彦：独立行政法人国立健康・栄養研究所健康増進研究部部長)
- 12/15 第9回 食べることの意義と今後の食育のあり方
(田中弥生：駒沢女子大学教授)
- 第10回 民間企業が高齢者の「食」をどう守るのか
(トーアス(株)、(株)クリニコ、イーエヌ大塚製薬(株)、(株)ヤヨイサンフーズ)
- 12/22 第11回 超高齢になるまでの食習慣
(潮秀樹：農学生命科学研究科教授)
- 第12回 「食」の現状、「食」の将来
(潮秀樹：農学生命科学研究科教授)

■ 高齢社会総合研究学特論X (ジェロンテクノロジー)

ジェロンテクノロジー (Gerontechnology) とは、高齢者を支援するためのシステムを扱う研究分野である。本科目では、高齢者の生活や社会活動などを支援するための情報・機械システムについて、オムニバス形式で講義を行う。本講義の内容は次の通りである。

- ・衰えた運動器・感覚器の機能補助を行うための運動支援・認知機能支援システム
- ・日進月歩での発展が著しい情報機器を用いた支援手法と、それら機器の使用の支援手法
- ・高齢者就労など社会的課題に対応するための仕組みとシステム

【授業日程】

- 10/07 第1回 感覚・コミュニケーションを支援する福祉工学 (伊福部達：北海道大学、東京大学名誉教授・高齢社会総合研究機構客員研究員)
高齢者就労における ICT の役割 (廣瀬通孝：情報理工学研究科教授)
- 10/14 第2回 高齢者の遠隔就労・社会参加とテレプレゼンス技術 (檜山敦：先端科学技術研究センター講師)
元気高齢者のための新しい社会参画技術 (小林正朋：日本 IBM (株)東京基礎研究所アクセシビリティ・リサーチ担当)
- 10/21 第3回 アクティブシニアの ICT 活用とユニバーサルデザイン (関根千佳：同志社大学教授・(株)ユーディット会長兼シニアフェロー)

- 高齢者の農作業のための軽労化支援スーツ（田中孝之：北海道大学准教授）
- 10/28 第4回 高齢者支援機器と事業モデル—技術とニーズ、政策、社会をつなぐ—（後藤芳一：工学系研究科教授）
- 高齢者を取り巻く情報社会のあり方（山田肇：東洋大学教授）
- 11/04 第5回 高齢者のための福祉・リハビリテーション工学（田中敏明：高齢社会総合研究機構特任教授）
- 臨床現場におけるリハビリ工学の実際（吉田直樹：リハビリテーション科学総合研究所主任研究員・関西リハビリテーション病院リハビリテーション・エンジニア）
- 11/11 第6回 認知症高齢者の情報支援（二瓶美里：新領域創成科学研究科講師）
- 高齢社会のモビリティ構築に向けて（鎌田実：新領域創成科学研究科教授）
- 11/18 第7回 福祉機器実用化における課題 ～福祉ロボットなどの実例からわかること（手嶋教之：立命館大学教授）
- 人型セラピーロボット最前線（西尾修一：㈱国際電気通信基礎技術研究所主任研究員）
- 11/25 第8回 高齢者の行動計測・見守りモニタリング（森武俊：医学系研究科特任教授）
- 医療・介護・健康分野で期待されるサービスロボティクス（浅間一：工学系研究科教授）

2. 演習

フィールド演習

■ フィールド演習 1（コミュニティ・アクション型）

グループ共同研究

2016年度は、前年のグループ4と5が合流し、以下の6グループが活動した。

【共同研究1「高齢者の終末期に向けた意思決定支援方法の検討」グループ】

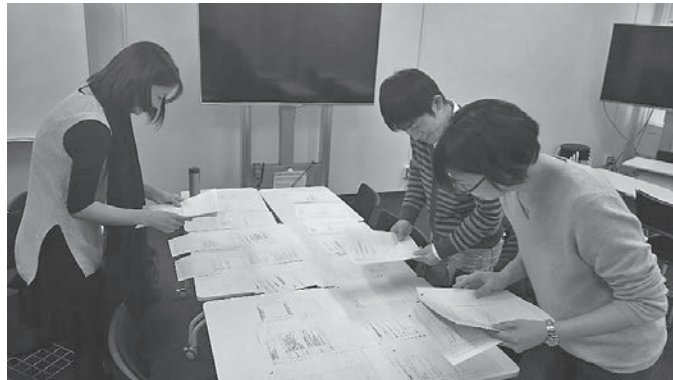
軽度認知症高齢者が日常生活上で必要とする支援に関する研究

近年、認知症を患う高齢者は増加しつつある。厚生労働省の2012年の調査によれば、65歳以上の高齢者のうち、462万人（15%）が認知症を患っており、認知症になる可能性がある軽度認知障害（MCI）の高齢者も約400万人（13%）であることが分かっている。このような中、JR東海認知症事故訴訟は、家族のみによる介護や支援を前提とした従来の社会システムの限界と、地域社会全体で認知症高齢者への支援体制を構

築していく必要があることを示唆している。

先行研究では、認知症当事者が家族だけでない社会とのつながりを求めていることや、周囲の人の支援によっては本人の意向が妨げられている可能性があることが指摘されている。そこで、共同研究グループ G1 では、軽度認知症当事者に焦点を当て、日常生活における経験を当事者と支援者の双方がどのように認識し、当事者の社会とのつながりにどのような影響を与えているかを明らかにすることを試みた。

研究の方法としては、地域で生活する認知症当事者と周囲の支援者を対象に、2016年12月から2017年2月にかけて、半構造化インタビューを行った。インタビューでは、当事者に対して、自身の一日の行動の流れ、その中での困りごと、感じていることを尋ね、介護者には、当事者の一日の行動の流れと、本人の行動に対する支援者としての対応、感じていること、当事者が感じていると考えることなどを尋ねた。



分析中の様子

各事例の分析を行い、当事者や日常生活に対する当事者・介護者それぞれの認識の共通点・相違点をまとめた。この結果、認知症高齢者への支援体制を地域社会で整備していくためには、他者との交流・社会とのつながりに対する当事者と介護者の意向のみならず、当事者と介護者の認識の実態や、当事者の ADL/IADL に応じた支援の必要性に関する介護者の認識にも目を向ける必要があることがわかった。なお、今回の研究では、これらの支援のあり方を十分に検討することができなかった。今後は追加的な事例分析を通して、認識のパターンを明らかにし、より具体的で新しい介入（支援）の視点を提案していきたい。

(特任助教・朴孝淑)

【共同研究2「在宅介護で暮らし続けられる条件の検討」グループ】

要介護高齢者の意思形成プロセス——人とのつながりに着目して

住まいと介護、医療を別々のものではなく包括的に捉え、本人の意思を基礎に置きつつ、地域包括ケアの枠組みに収まりきらないような希望を捉えて、要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けられるよう、地域包括ケアシステムの構築が推進されている。しかし、地域包括ケアシステムの基礎となるべき「本人・家族の選択と心構え」（厚生労働省 2013「地域包括ケア研究会報告書」）の形成プロセスに関する実証的・学術的な知見は乏しい。また、要介護期の居住場所・介護サービス選択の意思形成は、本人の身体的・精神的状態、家族関係、経済状況、地域の介護資源などが複雑に絡み合って現象しており、単一の学問領域によるアプローチでは解明は困難である。そこで、本研究では、学問領域横断的な研究体制により、要介護期の居住場所・介護サービスに関する意思形成プロセスを可視化し、このことを通じて、住民主体・ボトムアップ型の地域包括ケアシステムの構築に貢献することを目指した。

2016年度は、要介護高齢者における暮らしや介護の意思決定は、どのような諸要因に影響を受け、家族・ケアマネジャー等との関わりでいかになされているのかを明らかにして、居住場所・介護サービスの選択プロセスのモデル化を試みることにした。そこで、東京都と神奈川県にある4地域の要支援または要介護の被

介護者・主介護者・ケアマネジャーに対して、意思形成のきっかけになるイベント（例えば、大きな病気や怪我により生活が大きく変わる）における相談相手・意思の形成・変化の3点に関する半構造化質問紙を用いてインタビュー調査を実施した。調査から得たデータは、イベントと集団的な意思決定がされる場面に着目して、どのようなイベントや人との関わり・諸要因により、集団的意思が形成され、どう生活に反映されたか、ケースごとに検討を行った。そして、検討した9ケースから、在宅療養に関する本人・家族の意思形成と相談ネットワークの軌跡を明らかにした。具体的には、当事者の意思は当事者が一人で決め表明する静的な現象ではなく、介護・支援を必要とする当人の思いや価値観と、家族をはじめとする関与者の思いや価値観、入手可能な人的・社会的資源の間の絶え間ない「調整」の中で変化していく動的なものであることが示された。

次年度は、コミュニティでの観察研究・介入研究によって、本人・家族の意思を支えるインフォーマル・フォーマルな相談ネットワークや場を創出・活性化し、地域包括ケアシステムを再構築するという研究目的の精緻化、およびそれを可能にする方法論（調査票やグループワークによって結果を可視化する方法）を獲得することを目指したい。（特任助教・木全真理）

【共同研究3「弱らない・弱っても暮らし続けられる住まいとコミュニティの住環境研究」グループ】

2016年度は、柏市・文京区・青葉区を対象に実施した転倒に関するアンケート調査のクロス集計を行い、転倒による怪我の有無と住戸および居住形態との関連や、転び方と年齢および動作との関連を調べた。その結果、転倒によるひび・骨折において、住戸形態や転倒場所、独居、複数回転倒経験との関連は見られなかった。転び方については、よろめきによる転倒経験者は80歳以上の高齢者、要介護者に多い一方、滑りによる転倒経験者は40～65歳未満群に多く、複数疾患の高齢者には少なかった。つまずきによる転倒は男性に比べ、女性が多かった。転び方と動作との関連については、全体的に歩いている時の転倒が最も多かった。よろめき転倒は立とうとしている時に起きやすく、歩いている時には起きにくいことが分かった。つまずき転倒は歩いている時、階段を上る時に多く、降りている時には少なかった。滑り転倒は階段を降りている時に多かった。

また、柏市の転倒・骨折経験者（7名）を対象に自宅訪問し、詳細な転倒時の状況や場所、転倒後の生活の変化などについてインタビュー調査を行った。さらに、転倒による大腿骨頸部骨折の60歳以上の東大病院入院患者（10名）を対象にベッドサイド調査を行い、骨折につながる転倒の特徴や身体的および環境的要因を探索した。これらの研究結果をまとめて2016年10月の第3回日本転倒予防学会（名古屋）で2件、2016年11月のIARU国際会議（東京）で2件の発表を行った。また、転倒予防指導士（日本転倒予防学会認定資格）1名も育成することができた。今後は身体的および環境的要因による転倒の仕方が分類できるモデル構築および分類別の対策を示し、転倒予防およびリスク軽減策の提案を目指す。（特任助教・孫輔卿）

【共同研究4/5「高齢者のQOL向上のためのコミュニティ活動のファシリテーション」グループ】

2016年度は「高齢者のQoL向上のためのコミュニティ活動の調査とデザイン」をテーマとし、千葉県柏市豊四季台地区と、西多摩郡奥多摩町の花沢ふれあい農園の2つの地区を主たるフィールドにして、共同研究活動を進めた。

千葉県柏市豊四季台地区では、住民主体のコミュニティ活動の立ち上げをテーマにして、前年度の活動を継続した。7月からは、団地内の集会所で「まちの映画会」の活動を立ち上げを行った。最初の数回は、GLAFSの教員・院生が運営を行い、その後参加者の中から運営に関わる方を募り、自主的に広報・運営を行う体制へと移行した。現在では、月に2回、映画会と食事をセットにした3時間程度のプログラムを行っており、75歳以上の方を中心に30～40名程度が参加している。参加者へのインタビューから、映画会のポイントは、予約なしで気軽に参加できる気楽さにあり、役割分担を明確にすることで無理のない運営がなされている。



映画会の後は、毎回昼食会を開き、参加者同士が感想を話し合う

また、同地区では、コミュニティ活動に参加しにくい高齢者の方に向けて、外出しやすく、地域で行われる活動にアクセスしやすい地図作りも進めている。地域の趣味活動・ボランティア活動や、集会所・サロンの情報、そして歩きやすい道を可視化することが目標である。実際に街歩きを行い、掲示板やウェブ上での情報収集も進めている。今後は、地域に住む方にも参加して頂き、地図作り自体がコミュニティ活動につながる仕掛けを行う予定だ。

もう1つのフィールドである、西多摩郡奥多摩町の海沢ふれあい農園は、都内唯一の滞在型農園（クライナガルテン）である。奥多摩町のバックアップのもと地域で運営委員会が作られ、利用者の農園活動への支援や、各種イベントを開催している。共同研究グループでは、農園や地域のイベントに参加し、運営委員や利用者との交流を深めた上で、アンケート調査やインタビュー調査を行い、農園というコミュニティが成立するポイントを明らかにした。管理人のきめ細やかなファシリテーションと、農園の農業支援・地域活性化・料理という各部会の活動によって、運営委員と利用者の中で交流の機会が生み出されていることが明らかになった。



イベント参加を通じ、利用者や運営委員への聞き取りを行った

今後は、この2地区での活動を継続するだけでなく、これまでコミュニティ活動に参加してこなかった層（例：団塊世代の男性等）を対象にしたプログラム開発を行う予定だ。（特任助教・荻野亮吾）

【共同研究6「高齢者の食生活における問題点とその解決策の提案」グループ】

有料老人ホーム入居者の食形態とそれに至るプロセスに関する調査

高齢者の孤食は、家族形態や家族機能の変化により増加している。国内外の先行研究によると、現象としての孤食を高齢期の健康や自立度のリスクとして捉える研究は各学問領域から散見されるが、なぜ孤食に至

ったのかというプロセスは十分に解明されていない。

そこで2016年度は、医学・栄養学的アプローチだけでは解決できない心理的・認知的・経済的・社会的課題を包括的に、自立した施設入居高齢者が孤食に至るプロセスにおける孤食を決定する因子を探ることとした。そのため、1) 孤食になったプロセス、2) 満足する食事のための条件、3) 普段の食事、4) 普段の生活に関するインタビューガイドを作成して、神奈川県2施設（有料老人ホーム）に入居する自立した高齢者12名にインタビュー調査を実施した。その結果、調査協力を得た12名の概要は、12名全員が独居、年齢は平均84.7歳、性別は女性が9名、施設入居年数の平均は11.4年であった。また、孤食に至ったプロセスは、①食事へのこだわり、②健康度の低下、③社会的ネットワークの縮小、④自分のリズムの保持、⑤人間関係の煩わしさという5つの要因の関連がみえてきた。今後は、5つの要因に対する対策の検討、そして地域在住の高齢者への対象の拡大、他の地域や施設を扱う必要がある。（特任助教・木全真理）

【共同研究7「高齢者の生活支援をするロボティクスを考える」グループ】

現在、様々なロボットが登場しており、超高齢社会時代の高齢者やその支援者に向けたロボットを実現することが期待されている。このようなロボットは大きく自立支援、コミュニケーション支援、医療・介護支援を行うものに分けられる。しかし、高齢者において、これらロボットのニーズを包括的に検討した例はあまりない。そこで、2015年度に我々は高齢者におけるアシストスーツやコミュニケーションロボットのニーズに関する調査を実施した。さらに、各種コミュニケーションロボットの使用感評価を元気な高齢者に行ってもらった。これら結果より、自立した生活を送る高齢者におけるロボットのニーズとして、外観の好ましさ・直観的な操作性などの重要性を示した。

しかし、高齢者自身が日常生活の中でどのような状況に困っているのか、また、どのようにロボットなどのICTを使えば良いかについての詳細は依然として不明であった。これらが分かれば、高齢者における支援技術の導入指針の設定が行いやすくなるはずである。そこで、2016年度の調査目的を、特に高齢者における困りごとや、それらを解決する技術ニーズについて明らかにすることと設定した。このために、様々な認知・身体機能の低下を自覚する高齢者や、介護現場にて高齢者を支援する者において、既に存在する支援機器やロボット技術に関して、実態調査やニーズ調査を実施した。

まず、自立生活を送る高齢者に対して、日常生活行動を細分化したリストを用いて、困っているか否かを確認した。その結果、家事などの単純作業で困っており、これらを支援機器で解決できればしたいとの意見があると確認できた。次に、支援者（介護従事者）に対して、現状の困り事その他、支援技術に対する全般的なニーズについて聴取した。特筆すべき結果として、彼らは排泄や入浴の介助などで支援技術を使いたいと述べた。また、支援者間のやり取りを活性化させる要素として、こういった技術が使えれば使いたいとの意見があった。これら結果の信頼性を高めるにあたり、今後は調査対象者を増やすなどしたいと考えている。

（特任助教・三浦貴大）

岩手県大槌町フィールド演習

学習の狙いは、多様な分野の学生がチームになって地域に関与し、地域住民や地域団体等との交流を通じて高齢化した地域社会の実態を把握し、フィールドにおける具体的な課題を特定し、解決策を地元へ提案、そして実証を行うことにある。

2016年度も岩手県上閉伊郡大槌町に整備した東京大学大ケ口多世代交流会館（コミュニティ・サポートセンター）で合宿し、次のような全3回の演習を行った。

第1回 7/9～10 コミュニティ居住環境点検を通じたニーズ調査・現地踏査を行い、本年度取

り組むべき問題設定を行う。

第2回 9/2～4 初回を踏まえた現状把握（分析）および目標設定を行う。

第3回 11/14～22 目標設定に対して具体的な解決案を作成し、これを地元提案し、選択肢等を評価していただく。また、具体的にイベント等を実施し、効果測定を行い、さらに次なるアプローチを地元提案する。

〈参加人数〉

第1回演習：19名（GLAFS学生）、6名（GLAFS/IOGスタッフ他）

第2回演習：23名（GLAFS学生）、6名（GLAFS/IOGスタッフ他）

第3回演習：22名（GLAFS学生）、6名（GLAFS/IOGスタッフ他）

〈演習の様子（第1回）〉

7/9	60分	被災地視察
	90分	ゲスト講師との意見交換
	90分	健康チェックイベント
	60分	コミュニティ・アウトリーチ活動
	60分	グループワーク
7/10	40分	ゲスト講師との意見交換
	160分	グループワーク（課題整理）
	60分	成果発表会



語り部ガイドから震災時やその後の避難生活、復興に向けた動きなどのレクチャーを受けながら視察



各分野のゲスト講師から、高齢社会への対応や震災後のコミュニティ再生の課題等についてレクチャーを受ける



健康チェックイベント「移動！暮らし保健室」。普段の生活や困りごとなどに関するインタビューを実施



ゲスト講師のレクチャーや現地踏査などをもとに、グループごとに地域の課題を整理。その後、今後の合宿での方向性について発表

柏市豊四季台団地フィールド演習：一人暮らし高齢者対象「懇談と昼食会」

10月10日開催。柏市豊四季台団地の一人暮らし高齢者の交流促進の機会を提供するためにはじまったこのイベントにおいて、GLAFSの学生及び教員の他、総勢45名がスタッフとして運営を手伝った。演習の目的は以下の通り。

- ・高齢者との対話の中から暮らしの状況や課題・ニーズを把握する手法や、コミュニケーション方法について学ぶこと。
- ・地元住民や団体等と連携して、地域のイベントを運営する手法を学ぶこと。
- ・異なる領域の院生・教職員とともにイベントを運営することで、各専門分野からのアプローチを互いに学び、今後の研究のヒントを得ること。

今年の参加者は約 200 人。GLAFS 学生にとっては、多くの高齢者と接することで、彼らの考え方を学び、暮らしの実態や課題への認識を深めるための演習となった。

〈イベントスケジュール〉

【第 1 部】

〈ヒントカードゲーム〉 11：50～12：20

昼食前、コース生や IOG スタッフがそれぞれのテーブルに着席。高齢者との交流を深めるために「ヒントカードゲーム」を行い、対話のきっかけとした。



ヒントカードゲームの様子

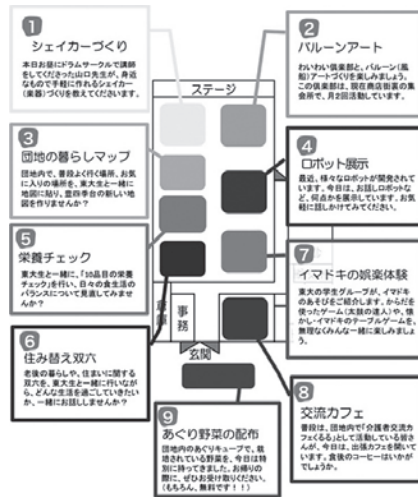
〈音楽ワークショップ〉 12：45～13：15

昼食後には全員にサウンドシェイプ（写真の円形の打楽器）が配布され、講師（NPO 法人鼓響理事長・山口江美先生）に導かれながら、参加者にワークショップを楽しんでもらった。



【第 2 部】 13：30～15：00

豊四季台団地商店街で活動してきた「わいわいクラブ」のバルーンアート作成ブース、同じく「介護者交流カフェくるる」の「交流カフェ」、音楽ワークショップの講師、山口先生によるシェイカーづくりコーナーのほか、GLAFS からはポスター展示と共同研究ごとに 6 ブースを企画。高齢者の日頃の生活の様子や、ニーズの把握に努めた。共同研究のブースとその目的は次頁の図参照。



会場図

(共同研究 G1) 「交流カフェ」

「介護者交流カフェくるる」と共に活動。コーヒーを飲みながら、介護や認知症に関する関心等を聞き取った。

(共同研究 G2) 「住み替え双六」

IOG の作成した住み替え双六を使いながら、今後の居住環境や住宅に求めるものを聞き取った。

(共同研究 G3) 団地の「暮らしマップ」づくり

団地内で集まる場所、よく行く場所について聞き取りながら、豊四季台のマップづくりを行った。

(共同研究 G4/5) 「イマドキの娯楽体験」

「太鼓の達人」やテーブルゲームを一緒に行いながら、日頃の趣味や楽しみについて聞き取りを行った。

(共同研究 G6) 「栄養チェック」

日々、どんなものを食べているのか、バランスはどうか、栄養チェックをした。



(共同研究 G7) 「ロボット展示」

ロボットを見せながら、ロボットに対するニーズや関心について聞き取りを行った。



■ フィールド演習 2 (ケア・システム実習型)

前年に引き続き、実践的課題解決能力を養うために、診療・介護・看護を受けながら地域で生活

する高齢者の実態や、高齢者の生活を支える診療・介護・看護の実際を把握するため、実習型のフィールド演習を行った。実習前に多専攻のコース生がグループとなって、各自目標を設定し、施設の見学や訪問診療・訪問看護に同行。スケジュールは下記の通りである（介護は全コース生参加。訪問診療と訪問看護は希望者のみ）。

〈実習先と日程〉

2016年11月	
小規模多機能型居宅介護など	
9:00~12:00	事業所の概要説明と見学
12:00~13:00	昼食
13:00~16:00	利用者宅に訪問（移動中に地域を散策）
16:00~17:00	目標達成の振り返りと質疑応答
地域密着型介護老人福祉施設、小規模多機能型居宅介護など	
10:00~11:00	法人の概要の説明
11:00~12:00	A施設の見学
12:00~13:00	昼食
13:00~15:00	B・C施設の見学
15:00~16:00	目標達成の振り返りと質疑応答
2017年1、2月	
訪問看護、看護小規模多機能型居宅介護	
9:00~10:30	事業所の概要と訪問利用者の説明
10:30~12:30	D利用者宅に訪問同行
12:30~13:30	昼休み
13:30~15:30	看護小規模多機能型居宅介護を見学
15:30~17:00	目標達成の振り返りと質疑応答
訪問診療	
13:00~16:00	患者宅に訪問同行（数件）
16:00~17:00	目標達成の振り返りと質問応答
地域密着型特別養護老人ホーム、小規模多機能型居宅介護など	
9:30~10:00	E施設の見学
10:00~11:30	法人の概要の説明
11:30~13:00	昼食と移動
13:00~15:00	F施設の見学
15:00~16:00	目標達成の振り返りと質疑応答

〈コース生の感想〉

高田遼介（工学系研究科建築学専攻 修士1年）

対人ケア実習に臨む前、建築的施設基準などについて少し勉強しましたが、学問として蓄積していかなければならないことはたくさんあるなと実感しました。廊下幅や居室面積といった「測れる」ルールばかりを

決めていくのではなく、そこに住む人にとってどのような環境であることがふさわしいのかという視点がどんどん盛り込まれていくべきだと思います。これは建築の専門家だけではおそらく作ることが出来ないと思うのでその他のバックグラウンドの方々との協力をしていける人間が必要だと感じました。

また、基準はその通りにすればいいというものではなく、場所、場面に応じて少しずつ変更していくことが重要であり、そういったことを現場を見ながらできる人間になりたいと強く感じました。

Unyaporn Suthutvoravut (医学系研究科老年医学専攻 博士1年)

I think working as a group service is incredibly useful if we would like to make the 24-hour service since only one doctor could not run this. I think in the future home visit care is going to be very important job for doctors but now it is still not the object of interest for young doctors since doctors always think of working at a hospital not in the home visit setting. Home visit care also requires a lot of skill such as physical examination, decision making and, in this case, technology is going to help evaluation of the patients at home more conveniently and precisely.

北村智美 (医学系研究科健康科学・看護学専攻 修士1年)

今回あえてグループ研究であるロボットによる支援のことも考えながら見学をすることで、訪問看護師はロボットのない今ある環境の中で様々な工夫をしていることが分かった。例えば、私の訪問した利用者さんは、下肢は痺れと疼痛により動かすことが困難であったが、上肢は自由に動かすことができる方であった。そのような環境の中、ベッド上で出来る限り自立して生活ができるように、ベッドの配置を変えたり、手の届く位置に薬や家具を置いたりして生活ニーズやその人の持つ力に応じた工夫をしていた。

色々な疾患を抱えた高齢者が自宅でなるべく安楽で過ごし続けるために必要なことを考えるためにも、まずは現状でどのような工夫を行なっているかを把握していく必要があると感じた。

■ フィールド演習3 (インターンシップ型)

2011年に設立された東京大学産学ネットワーク「ジェロントロジー」(自動車、電機、住宅、食品、生活用品関連等の企業が約30社参加)と連携。年2回の全体会(7/21、3/9)、及び合宿(12/7~8・近江八幡市)に学生も参加し、企業のスタッフとディスカッション・交流をした。

〈第1回全体会・講演内容〉

「超高齢化社会を前にして—迫られる価値観の変更—」 島田裕巳 (宗教学者)

〈第2回全体会・講演内容〉

「超高齢社会におけるセコムの高齢者向けサービス」 長野祐一 (セコム医療システム(株)常務取締役)

〈合宿〉

IOGと協働して「近江八幡市まち・ひと・しごと創生総合戦略」に基づき、「近江八幡市生涯活躍のまち(日本版CCRC)構想」をとりまとめた近江八幡市を訪れ、現地視察・交流を行った。市ではさまざまなエリアの魅力を生かした住区を分散的に開発し、各住区に「ちいさな拠点」となる多目的集会施設を設けたいとしている。各エリアは次の通り。

1. まちなかの古民家で暮らす——歴史のある風景がまちに溶け込んでいる
2. レイクサイドの暮らし——琵琶湖のほとりの素晴らしい生活

3. 静かな水辺で暮らす——琵琶湖はラムサール条約（湿地の保存に関する国際条約）に登録している。静かなビオトープを抱えている
4. 晴耕雨読の暮らし——農業も盛ん。自宅菜園の規模を超えて、きちんとした農作業もできる
5. 新世代アーバンビレッジで暮らす——駅に近い場所は、新世代郊外としての可能性を秘めている。アーバンビレッジ（英国で提唱されたサステナブルな都市づくり）のようなニュータウンを整備して、その場所で生活する

今回の合宿では、市役所の方から概要説明をしていただいたあと、現地を見学。夕刻からの懇親会では、近江八幡の自治体、地元企業との交流を図った。2日目には、「人類の健康・長寿への挑戦」をテーマとする大阪万博招致構想について、万博基本構想検討会議の委員に就任した秋山弘子特任教授による講演があった。

〈合宿プログラム〉

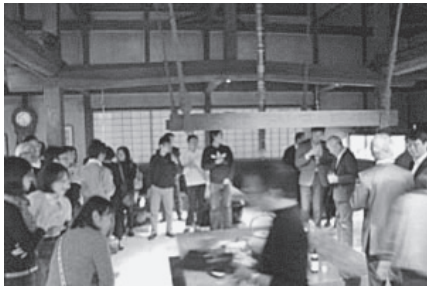
12月7日	
12:30	集合（JR 近江八幡駅）
13:20~14:00	合宿趣旨説明 後藤純（高齢社会総合研究機構特任講師）
14:00~14:30	概要説明「近江八幡市安寧のまちづくり構想について」 川端啓司（近江八幡市総合政策部政策推進課課長補佐）
14:30~17:30	近江八幡市安寧のまちづくり構想現地見学 （旧市街、八幡堀、西の湖、琵琶湖レイクサイド、「ラコリーナ近江八幡」等）
18:00~20:00	懇親会（地元自治体、地元企業との交流）
20:00~	宿泊先に移動：「休暇村近江八幡」
12月8日	
9:00~10:00	「2025年大阪万博誘致構想について」 秋山弘子（高齢社会総合研究機構特任教授）
10:00~11:15	チームに分かれてのグループ討議
11:15~12:00	チームごとの討議結果発表、後藤純特任講師による総括
12:00~13:00	昼食後解散



近江八幡市役所の会議室で市の総合政策部政策推進課・川端氏からレクチャーを受ける参加者たち



CCRCの候補を見学



懇親会には、自治体や地元経団連の方々も参加しコース生たちと交流を深めた



2日目は近江八幡市のCCRC構想について、産官学でグループ討議を行った

グローバル演習

■ グローバル演習 1：英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション

国際的なコミュニケーション能力と多文化・多分野の専門家とチームを組んで課題解決に取り組む「グローバル演習」を開講した。

開講時に英語運用能力測定試験を実施し、3段階の能力別クラス分けを行い、1クラス4～7名×4クラスの少人数クラスにて指導を行った。

プログラムの内容は、リスニング、スピーキング、プレゼンテーション、論理的会話力、ファシリテーションの能力を向上させる英語学習の研修プログラムと、語学を活用し、リーディングプログラムの趣旨に沿った高いコミュニケーションスキル、グローバルマインドを向上させる研修プログラムによって構成され、年間22回×3時間 合計66時間のコースで、英語によるコミュニケーションとプレゼンテーション能力の育成を図った。また、終了時にも英語運用能力測定試験を実施し、学生へのフィードバックを行った。

■ グローバル演習 2：海外短期留学制度（留学生は海外または国内インターンシップ）

〈短期留学〉 渡航期間3ヶ月以内

留学先①ハーバード大学（アメリカ）

参加学生：安藤絵美子 医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士3年

渡航目的：Ichiro Kawachi先生から研究指導を受けるため

実施期間：2016年4月3日～2016年6月2日

留学先②ブレシア大学（イタリア）

参加学生：金子和樹 工学系研究科精密工学専攻 博士2年

渡航目的：設計・生産技術に関するSpring Schoolに参加するため

実施期間：2016年6月12日～2016年6月19日

留学先③ハーバード大学（アメリカ）

参加学生：高瀬麻以 農学系研究科水圏生物科学専攻 博士2年

渡航目的：Harvard T.H. Chan School of Public Health の Summer Session に参加するため

実施期間：2016年7月1日～2016年7月30日

留学先④コペンハーゲン大学（デンマーク）

参加学生：高瀬麻以 農学系研究科水圏生物科学専攻 博士2年

渡航目的：IARU Alive and KICKing Summer School に参加するため

実施期間：2016年8月8日～2016年8月19日

留学先⑤コペンハーゲン大学（デンマーク）

参加学生：Chand Krishant 医学系研究科分子予防医学専攻 博士2年

渡航目的：IARU Alive and KICKing Summer School に参加するため

実施期間：2016年8月8日～2016年8月19日

〈長期留学〉 渡航期間3ヶ月以上

留学先①ストックホルム大学（スウェーデン）

参加学生：松田弥花 教育学研究科総合教育科学専攻 博士2年

渡航目的：スウェーデンにおける Social Pedagogy とその専門職に関する研究

実施期間：2016年9月19日～2017年3月30日

（GLAFSでの支援期間：2017年1月12日～2017年3月30日）

〈留学報告〉

海外留学報告

GLAFS 2期生

教育学研究科 博士課程2年

松田弥花

留学概要

GLAFSにご支援頂き、2016年9月19日～2017年3月30日の約半年間、スウェーデン・ストックホルム大学の教育学研究科／国際比較教育学研究科に「研究指導の委託」という形式で留学した。この間の現地における指導教官として、同研究科の Ulf Fredriksson 准教授にお世話になった。本稿では、留学前に準備したことや留学中の様子などについて報告する。

1. 留学先の概要

ストックホルム大学は、スウェーデンの首都ストックホルムに1878年に設立された、歴史深い国立大学である。学生数は世界中からの留学生を含め約7万人である。

筆者が所属した教育学研究科／国際比較教育学研究科には、約70名の研究者・教員が所属している。主に、教授学、高等教育学と教育哲学、国際比較教育学、キャリア発達・支援、組織教育学、教育学と健康、職業能力と学習、教育研究、成人学習といった9つの領域に分かれて研究が行われている。現在は教育学研究科に統合されたものの、ストックホルム大学の国際比較教育学研究科はかつて、国際比較教育学の権威だと言われており、この領域では世界的に名の知れた研究科である。現在でも、研究者をはじめ世界中から学部生・大学院生が学びに来ており、国際的な知見を得られる場となっている。

2. 留学準備

(1) 応募

応募の際は基本的に、Fredriksson 准教授と個別に連絡をとって手続きを進めた。東京大学教育学部・教育学研究科とストックホルム大学教育学部・教育学研究科／国際比較教育学研究科は部局間協定を結んでいるため、まずは東京大学教育学研究科の事務を通じて申し込みを行い、その後の、滞在期間や書類作成などの相談は筆者自身で Fredriksson 准教授と個別にコンタクトを取り、留学書類作成に必要な情報等のやりとりを行った。

(2) 渡航前の準備（研究面）

研究に関する渡航前の準備として、倫理審査申請書類の作成・提出と、調査先への調査依頼を中心的行った。

自身の研究は、質的な研究手法を用いており、スウェーデンにおける教育・福祉行政や教育・福祉関係の非営利組織等の職員にインタビューを行ったり、彼・彼女たちの職場において参与観察を行ったりしてデータを収集する。そのため、研究テーマに即した調査先を全国から見つけ出し、調査受け入れを事前をお願いする必要がある。

ただしその際、参与観察等の観察調査に関しては、スウェーデン現地における研究倫理に関する法律に則り、スウェーデン国内の倫理審査委員会に研究内容を申請し調査許可を得る必要がある。許可が下りるのに数ヶ月かかるため、渡航する半年ほど前から作成準備にとりかかった。また、倫理審査の申請は、スウェーデン国内の研究機関を通じて行う必要があるため、Fredriksson 准教授には言語チェックや送付などを含め、多大なご協力を頂いた。

(3) 渡航前の準備（生活面）

現地の生活に関する渡航前の準備として主に、長期滞在許可（就学ビザ）申請と滞在先の探索を行った。

ビザ申請に関しては、スウェーデン移民庁の規定により入国2～3ヶ月前に申請をする必要があったため、必要書類を揃え5月にはスウェーデン移民庁のホームページを通じオンラインで申請した。必要書類とは具体的に、ストックホルム大学教育学研究科／国際比較教育学研究科と東京大学教育学研究科の両研究科による同意書、ストックホルム大学教育学研究科による招待状、海外保険加入証明書、また、スウェーデン滞在中の財政を証明する書類（筆者の場合、日本学術振興会による研究奨励金の英語版証明書）である。

また滞在先に関して、大学が有する寮への入寮申請も行ったが、夏季休暇にならないと空き部屋が出るか



滞っていた友人宅

分からないという返事であった。有難いことに、丁度そのことを現地の友人に話したところ、その友人宅に空き部屋があるということだったため、大学から少し離れており通学には少し不便ではあるが、確実に滞在できる友人宅に間借りさせてもらうことにした。

3. 留学期間中

(1) 研究生活

留学期間中は主に、①自身の研究を進めるための調査活動、②研究の発展のため、セミナー等への参加及び研究発表、③自身の研究テーマに関する共同研究、④所属大学外の教育機関における講義などのアウトリーチ活動を行った。

①に関しては、主に観察調査を行ったが、他にも文献調査や歴史史料収集を行った。観察調査は、ストックホルム市内で成人障がい者支援を行っている非営利組織と、スウェーデン南部に位置する地方自治体における依存症成人支援課、同市成人・高齢障がい者グループホームにて、週1~2回のペースで実施した。観察対象は、ソスペッドと呼ばれる教育的・福祉の実践を担う専門職で、いかに彼・彼女たちの対象者が自らの人生に主体的となり自立した生活を送ることができるのか、その支援態勢を観察することが目的であった。人がいかに主体的に自らの人生を歩むことができるのか、またその際、専門職としてどのような支援を行うことができるのかを検討する点においては、超高齢社会における課題の一つである、高齢者の主体化に対する支援のあり方を検討することにも通ずる。例えば、以下のような事例が挙げられる。依存症成人支援の現場において、63歳から支援を受け始めた男性がいる。当時は日常生活も十分に送ることができない状態であったが、4年間にわたり支援を受け続け、現在は積極的に街へ出かけ、人びとと交流をしているという事例である。このことはすなわち、適切な支援があれば、どのような人でも成長し続けることができることを示している。それぞれの調査地において、以上のような対象者の「依存→自立」のプロセスに、ソスペッドが重要な役割を果たしているということが観察できた。他方、スウェーデン王立図書館に唯一所蔵される、20世紀初期の貴重な歴史史料の収集もできた。

②に関して、ストックホルム大学内で開催された、成人教育研究会、博士課程学生研究セミナー、質的分析ソフトウェア「Nvivo」セミナーに参加したり、また、個別研究指導も不定期で開催された。成人教育研究会では、ストックホルム大学の関係者で成人教育を研究する研究者や大学院生が集まり、自身の研究を発表したり、輪読が行われた。筆者も、自身の研究について発表する機会を設けて頂き、研究について貴重な質問やコメントを頂戴した。博士課程学生研究セミナーは、博士課程学生が自身の研究テーマや研究計画を報告し、コメントを出し合うものである。ここでも、筆者の研究計画について報告する機会を頂き、先輩方や同期生などから貴重な質問とコメントを頂戴した。個別研究指導では、Fredriksson 准教授をはじめ、自



Fredriksson 准教授たちとの研究打ち合わせにて：
Fredriksson 准教授は後列右から二番目

身の研究分野に長けている先生方（ウエスト大学 Lisbeth Eriksson 准教授やストックホルム大学 Anders Gustavsson 教授など）に、手厚いご指導を頂いた。特に、筆者はスウェーデン語で調査などを行っているため、理解し難い概念や言い回しなどについて、この機会に先生方に相談し理解を深めることができた。

③に関しては、ストックホルム大学とウエスト大学に所属する研究者の方々と共同研究を行う機会を頂いた。ストックホルム大学とウエスト大学の卒業生を対象としたインタビュー調査を実施し、その調査で得られたデータを基に Social Pedagogy という教育と福祉を横断するような概念について知見を深めることを目的としたものである。自身の研究テーマであるスウェーデンにおける Social Pedagogy について、現地で先駆的に研究を行っている研究者たちと交流を深めることができ、非常に有難く思っている。

④については、ストックホルム市内にあるスタッズミッション職業専門学校とウエスト大学において、日本の社会教育について講義を行う機会を設けて頂いた。両者とも、ソスペッド養成課程に通う学生たちを対象とした講義であり、スウェーデンにおける Social Pedagogy と日本の社会教育について、学生たちと議論を交わすことができ、貴重で有意義な経験をさせて頂いた。



Social Pedagogy に関する共同研究打ち合わせにて

(2) 現地での生活

生活面で多少苦勞した点は、滞在先から大学や調査先等への移動である。滞在先はストックホルムの郊外にあり、車を持っていない筆者にとっては交通アクセスの不便なところであった。中心部に行くバスが2種類あり、一方は大学まで直行するバスが定期的に出ているが家から停留所まで徒歩30分かかり、一方は停留所まで徒歩10分であるが中心部まで遠回りであり、しかも一日に数本しか出ていなかった。有難いことに、朝は友人が出勤する時間（7時頃）に合わせて一緒に家を出て、大学まで直行するバスの停留所まで車で送ってもらえたため、往路に関しては大きな苦勞はなかったが、日々、バスに合わせて計画を立てないといけなかったため、東京での生活とのギャップに少し戸惑った。ただし、中心部から離れているため、野生の鹿やウサギを見ることができるほど自然が豊かで、緑に囲まれた穏やかな生活を送ることができた。

他方、日々生活する中で、さすが福祉国家だと感心することが多々あった。社会制度は当然のことながら、人びとの生活の中に福祉的な考え方／姿勢が見受けられた。例えば、ベビーカーを押している人がバスから降りようとする時、すぐに周りから支援の手が伸びる。あるいは、混雑した地下鉄に杖をつく男性が乗ってくると、男性よりも年配の男性が手招きをして席を譲ろうとし、何よりも圧巻だったのは、その一瞬の行動を見ていた周囲の乗客がサッと動き、杖をつく男性のために道を開けたのである。そのような環境に身をおく中で、こういった人びとの思想によって、福祉国家という体制が支えられているのだろうと気づかされた。

(3) 余暇の過ごし方

基本的に研究活動に従事していたが、たまに、天気の良い休日は滞在先の友人と一緒に雪道の散歩に出かけたり、友人の親族を招き「和食の会」を開催したりした。特に思い出深いことは、大学の仲間たちと一緒に、ストックホルムから飛行機で1時間ほどのところにあるゴットランド島（Gotland）に行ったことである。この島は、映画「魔女の宅急便」のモデルとなった場所の一つであり、趣のある素敵な街であった。

また、スウェーデン語で「お茶をする」という単語を fika（フィーカ）と言うが、この fika の文化が根付いており、筆者も大学や調査先、友人宅で頻繁に行った。ほとんどの職場・学校に fika の時間が設けられており、その間に情報共有を行ったり、短い休憩を挟むことで集中力の向上を図ったり、同僚や友人と楽しく会話することで気持ちがりフレッシュされるなど、良い文化だと感じた。

4. アドバイス・その他特記事項

スウェーデンに渡航する際、長期夏季休暇に特に気をつける必要がある。スウェーデンは労働環境が整っており、夏季はどのような職種でも約1~2ヶ月間の長期休暇を取得する人が多い。特に6月半ば~8月半ばは、行政機関等の職員も順に休暇に入るため、ビザや倫理審査などの申請に関する対応に時間がかかる。そのため、上記期間内、あるいは上記期間を跨ぐ申請を行う場合は、以上のことを考慮して計画を立てる必要がある。また、訪問調査に行く場合も、上記期間は、公共機関などは外部からの訪問を受け入れない場合がある。そのため、どうしても上記期間に調査を実施したい場合は、時間的に十分な余裕を持って調査依頼を行う必要がある。ただし、事前に調査依頼をしたとしても、訪問を受け入れてもらえるかは定かではない。スウェーデンへの調査や留学を考えている方は、参考にして頂ければ幸いに思う。



ゴットランド島

■ グローバル演習 3：国際共同ワークショップ・スタジオ、外国人特別講義／セミナー

2016年度の実績は以下のとおりである。

7/28 国際交流特別セミナー「高齢期・超高齢期のウェルビーイングを考える」

米国ミシガン大学教授（兼 GLAFS プログラム教員）の Toni Antonucci 教授の来日に合わせ、国際交流特別セミナー「高齢期・超高齢期のウェルビーイングを考える：心理、社会、コミュニティからのアプローチ」（Well-being in the third and fourth age）を開催した。

前半のアントヌッチ先生の講演は“Convoys of Social Relations in Context: A focus on Japan, Lebanon, Mexico and U.S.”という演題で、先生が1980年から提唱してきた社会関係の生涯発達理論である「コンボイモデル」についてお話しいただいた。先生の研究チームが日本、アメリカ、レバノン、メキシコで行った調査データが紹介され、私たちの社会関係、そしてウェルビーイングに、文化や社会制度がいかに関わっているかが論じられた。

後半は、日本の若手研究者3名が、高齢者の、他者や地域との関わりとウェルビーイングとの関係について、また高齢者を支えるコミュニティづくりの実践について、最新の研究報告をした。

（特任講師・菅原育子）

〈参加したコース生のレポートから抜粋〉

長谷田真帆（医学系研究科社会医学専攻 博士3年）

Antonucci 先生のご講演では、高齢者の社会関係に関する Convoy model についての説明はとてもわかりやすく、勉強になりました。また年齢や地域によって高齢者の社会関係がどのように異なるのか、という問いを検証した、日本・アメリカ・メキシコ・レバノンの4国間の比較研究の方法や結果は大変興味深いものでした。

国内の研究者の方々からは、各地域でのパネル調査等についてのご発表を伺うことができました。川崎市での調査では、目に見えない社会的ネットワークが虚弱高齢者において精神的健康に保護的に作用していた、という結果をお示し頂きました。また神戸市の調査では、特に女性において、地域への愛着や強固な人間関係が、経済的・身体的に不利な状況が精神的健康に与える悪い影響を緩和している、というご発表がありました。被災地である岩手県大槌町では、仮設住宅の住環境点検がその後の地域活動へ繋がった事例や、地域によって自主的な活動が活発な仮設住宅とそうでない仮設住宅に経時的に分かれていく、といった調査結果についてご報告を頂きました。

いずれの方のご発表も非常に興味深く、多面的に高齢者の well-being を捉えていたワークショップだったと思います。自分の研究にもヒントを頂くことができました。

11/3～5 IARU Graduate Student Conference on Aging, Longevity, and Health

IARU Aging, Longevity, and Health Initiative（国際研究型大学連合 エイジング・長寿・健康に関する研究ユニット）が1年おきに開催する大学院生会議を、11/3～5の3日間、東京大学本郷キャンパスで開催した。

この会議に関連して、11/3には、公開シンポジウム「Society for 2050 : What Science and Technology Can Do to Build a Dynamic Aged Society」が福武ラーニングシアターであり、東京大学のほか、オーストラリア国立大学、シンガポール国立大学、北京大学、カリフォルニア大学バークレー校、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、コペンハーゲン大学の8大学に所属する大学院生および研究者が参加した。

IOG および GLAFS が主催者となった本会議では、GLAFS 生が会議参加、ポスター研究発表に加え、会議プログラムの企画や来日者の対応、サイトビジットの企画と当日引率など、多岐にわたり会議運営にたずさわった。

なお、2日目は研究発表とグループディスカッションを開催。3日目はサイトビジットを運営した。
(特任講師・菅原育子)

〈プログラム〉

November 3, 2016

Scientific Symposium

Venue: Fukutake Hall, Second basement floor, The University of Tokyo

13:30～17:30 Symposium

Moderator: Dr. Katsuya Iijima (The University of Tokyo)

■ Welcome Address

- President Makoto Gonokami's speech (read by Dr. Iijima)
- Dr. Mamoru Mitsuishi (The Program Director of Graduate Program in Gerontology/ GLAFS)

■ Keynote Speech

- Dr. Sarah Harper (University of Oxford)
"Longevity, life expectancy and healthy life expectancy"
- Dr. Michitaka Hirose (The University of Tokyo)
"Role of Advanced ICT for Hyper Aged Society"

■ Panel Discussion "What science and technology can do to build a dynamic aged society to 2050 and beyond"

Moderator : Dr. Hiroko Akiyama (The University of Tokyo)

- Panel 1 Dr. Lene Juel Rasmussen (University of Copenhagen)
"Perspectives of the Center for Healthy Aging Copenhagen - Our Past, the Present and the Future"
- Panel 2 Dr. Xiaoying Zheng (Peking University)
"The Challenge of Population and Development in Chinese Aging Society"
- Panel 3 Dr. Atsushi Hiyama (The University of Tokyo)
"Frailty Prevention Checkup and Training for Middle-aged and Aged Women using Virtual Reality Technique"
- Panel 4 Dr. David Lindeman (University of California, Berkeley)
"Aging & Technology - Innovation Ecosystem"

18:00~20:00 Welcoming Reception

November 4, 2016

GSC Workshop - Research Presentations and Group discussions

Venue: Ito international conference center



9:20 – Opening
 9:30 – 11:25 Oral presentations
 11:40 – 13:00 Lunch and Poster Presentations by GLAFS UTokyo students
 13:00 – 15:30 Group Discussions
 Discussion theme: Issues and Opportunities of Aged Society
 16:00 – 17:00 Group Presentations
 17:00 – 17:20 Closing
 18:00 – Dinner

November 5, 2016

GSC Workshop – Site Visit

Courses:

(1) Joining Science Event organized by Japan Science and Technology Agency (JST) ‘Science Agora’ at Odaiba, Tokyo

(2) Visiting a Health Care Facility (Yume-no-mizuumi-mura) in Urayasu, Chiba



(3) Experiencing daily life of Japanese seniors at Takashimadaira and Sugamo Jizo Dori, Tokyo



〈コース生の感想〉

麦山亮太 (人文社会系研究科社会文化研究専攻 博士1年)

Sarah Harper 先生の人口学・公衆衛生に関する講義、なかでもとくに、社会経済的不平等はたんに寿命のみでなく健康寿命の長さにも影響を及ぼすという点が印象的だった。たんに健康への影響といっても、複数の指標を取りながら研究することで政策的・理論的な含意もさまざまに異なりうる、ということに注意しながら今後研究を進めていきたい。

小松廉 (工学系研究科精密工学専攻 博士1年)

廣瀬先生の講義を聞いて、高齢化が進む中、テクノロジーというのは他のアプローチでは成しえない解決策を提供しうる素晴らしいものだと実感した。また、中国における年代別、身体障がいの割合についてのグラフが非常に興味深く感じた。

高瀬麻以（農学生命科学研究科水圏生物科学専攻 博士2年）

大学院生会議に参加させていただいて、最も刺激を受けたのは参加学生同士で行ったグループワークであった。グループのメンバーは医学、工学、生物における研究をそれぞれ主専攻として行い、更にそれをジェロントロジーと結びつけていた。例えば、自分のテーマの一部にジェロントロジーが含まれているのではなく、自らのテーマを確立した上でそれをジェロントロジーと組み合わせていこうと試みている学生が多かった。私自身も2分野の研究を両立させようとしているが、2足の草鞋はなかなか厳しい時もある。しかし、それを現に実現している学生と会い、「なかなか厳しい」と思う自分の悩みが当たり前であるという安心感と「今まで以上に頑張ろう」という刺激を受けた。将来、この会議で出会ったメンバーと共同研究することを目標として励んでいきたい。

堀抜文香（医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士1年）

GLAFS生によるポスター発表では、会場のあちこちで活発な意見交換が行われていた。私の個人研究に対しても、海外の大学院生や先生から鋭い質問や貴重なコメント・アドバイスをいただき、博士論文を進める上でも重要な気付きや視点を得ることができた。また、他研究科の院生の研究内容も知ることができ、多様な研究関心を持つGLAFSの学生が共創する意義を改めて感じる機会となった。

今枝秀二郎（工学系研究科建築学専攻 修士2年）

参加者と一緒に夢のみずうみ村浦安デイサービスセンターを見学した。この施設見学を通して、参加学生のそれぞれがどのようなことに関心を持っているかがよく分かった。見学前後の行き帰りや昼食時のコミュニケーションなどで意見交換をすることができ、私にとっても、彼らにとってもお互いに大変有意義な見学になったと感じている。

濱田貴之（工学系研究科都市工学専攻 修士1年）

日本の高齢者の日常生活を探るというコンセプトで、高島平団地と巢鴨地蔵通り商店街を訪問した。高島平団地では分散型サービス付き高齢者住宅の説明と空き部屋の見学ができた。もう少し事前準備や海外の方向けの資料を用意しておくとともにスムーズに案内できただろうとは思ったが、それでも「普通に日本を観光しようと思ったら絶対に訪れない場所を案内できた」という点では非常に有意義なサイトビジットであったと思う。

コアセミナー

専攻での専門的研究が、現実の高齢社会問題の解決に資するものとなるよう、視野を広げ、発想を深める研究指導（CS1）と様々な現場で活動されている第一人者の方をお招きしてお話を伺い、ディスカッションするケーススタディ（CS2）を行った。日程は、下表のとおり。

日程	CS1：共同研究・個別研究指導	CS2：ケーススタディ	
		講義	総合討議・グループワーク
4月	16日	新入生研究計画報告 共同研究発表1	
	23日		活力ある超高齢社会を考える
5月	28日	個別研究指導1	認知症の当事者支援の最前線：永田久美子（社会福祉法人浴風会認知症介護研究・研修東京センター研究部部长）

6月	4日	共同研究発表2	超高齢社会の医療福祉：大熊由紀子 (国際医療福祉大学大学院教授)	
	11日		在宅医療の実際と展望：太田秀樹 (医療法人アスミス理事長) 地域密着型サービスの実実際と展望： 柴田範子 (NPO 法人「楽」理事長)	医療や介護が必要となっても住み続けられる具体的な支援を考える
	18日		地域包括ケアシステムの展望と次世代への期待：宮島俊彦 (内閣官房社会保障改革担当室室長)	超高齢社会の地域包括ケアシステムの構築にどう貢献できるかを考える
	25日		超高齢社会で当事者は何を望むか： 南砂 (読売新聞東京本社取締役調査研究本部長)	高齢社会における当事者主権の医療福祉と地域包括ケアシステムについて、他分野の視点や考え方を整理して、統合する
7月	2日		自治体と総合計画：金井利之 (法学政治学研究科教授) 超高齢社会のコミュニティ生活空間整備論：大方潤一郎 (工学系研究科教授)	
	16日		秋田市の AFC の取り組みと行動指針の評価と策定：齊藤恵美子 (秋田市役所) ソーシャルキャピタルを如何に評価するか：村山洋史 (高齢社会総合研究機構特任講師)	理想とする AFC をどのように捉えればよいか、どのようにアプローチすれば (主体、手続、実体) AFC の実現に近づけるのかを整理する
	23日		高齢化社会と法—行政法・地方自治法の視点から：斎藤誠 (法学政治学研究科教授)	超高齢社会における自治体政策とプランニングについての具体的なアイデア (方策) を整理する
7月31日～ 8月1日	個別研究指導2 共同研究発表3			
10月	1日		高齢者の消費行動に関する調査：竹本秀高 (株ゆこゆこメディアプロデュース部部长) 多世代コミュニティを誘発する社会のデザイン：岡田誠 (株富士通研究所 R&D 戦略本部協創推進PJ プロジェクト・ディレクター)	アクティブシニアのインセンティブと次世代のマーケティング戦略を考える
	15日		高齢者におけるゲームの健康維持効果・河村吉章 (株いかや代表取締役社長) 博士のキャリア・マネジメント：古野庸一 (株リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所所長)	
	22日	共同研究発表4		
	29日	個別研究指導3-1		
11月	12日		サービスロボットの現状を課題：比留川博久 (国立研究開発法人産業技術総合研究所ロボットイノベーション研究センター センター長) 高齢者の技能アーカイブや伝達のための技術：檜山敦 (情報理工学系研究科特任講師)	高齢社会で有効かつ持続的なサービスを考える
	26日	個別研究指導3-2	郊外型住宅団地における大和ハウスグループの取り組み：濱隆 (大和ハウス工業株取締役常務執行役員) 多様な世代が生き生きと暮らし続けられる住まい・まちづくり：太田潤 (独立行政法人都市再生機構ウェルフェア総合戦略部部长)	

12月	3日	共同研究活動	社会保障と財政のあり方：岩本康志 (経済学研究科教授)	
	10日	共同研究活動		
	17日	共同研究発表5	超高齢社会におけるビジネスモデル ～生命保険事業の今後の展望から ～：野呂順一 (株)ニッセイ基礎研究 所代表取締役社長)	
1月	21日		変わる家族と介護：袖井孝子 (お茶 の水女子大学名誉教授) 認知症家族介護を生きる：井口高志 (奈良女子大学准教授) ひとり暮らし高齢者の貧困と社会的 孤立：河合克義 (明治学院大学教 授)	
	28日		家族に頼れない高齢者をケアする体 制：澤登久雄 (大田区地域包括支援 センター)	高齢者のケアと家族での学びを共有 し、介護の現場に対して研究者とし てできることを考える
2月	18日	個別研究指導4		
3月	4日	共同研究発表6		

3. 合宿

7月31日、8月1日に静岡県にあるニューウェルシティ湯河原で GLAFS 夏期合宿が行われ、101名が参加した。合宿の目的は、


- (1) 超高齢社会における自身の研究やキャリアについて考える
- (2) 共同研究プロジェクトの進捗状況を共有し、今後の方向性などについて教員から助言を行う
- (3) 院生の個人研究の進捗状況の報告を受け、プログラム担当教員による指導を実施する
- (4) GLAFS のプログラムに深くかかわるテーマで、セミナーやワークショップ等を実施する
- (5) プログラム担当教員と院生の間で懇親を図る

1日目は個別研究指導、共同研究発表に続き、ゲストによる講演。2日目も引き続き個別研究指導、共同研究発表が行われ、プログラム担当の先生方から各自、丁寧なアドバイスをいただいた。



〈合宿スケジュール〉

1 日目	
12：00～12：30	集合
12：30～12：40	開会の辞, 全体スケジュール説明
12：40～12：50	移動
12：50～14：30	個別研究指導 1 (分科会方式)
14：30～14：45	移動・休憩
14：45～16：45	共同研究発表 1 ・「高齢者を支援するロボティクス」(G7) ・「高齢者の食生活における問題点とその解決策の提案—有料老人ホーム入居者の食と健康に関する調査—」(G6) ・「認知症高齢者に対する段階に応じた意思決定支援の方法—認知症カフェを題材に—」(G1)
16：45～16：55	休憩
16：55～17：55	GLAFS キャリアセミナー ・「研究者のキャリア開発を考える」 金沢康夫 (産総研イノベーションスクール事務局、博士 (理学)) ・「研究の方法論を生かした地域貢献活動」 土見大介 (塩竈市市議会議員、博士 (医工学))
17：55～18：05	休憩
18：05～19：05	「超高齢社会における医療のあり方—生涯現役社会の構築を目指して—」 江崎禎英 (経済産業省ヘルスケア産業課長)
19：20～21：00	夕食・懇談会
21：00～22：00	ナイトセッション
 <p>超高齢社会における政策の現場について経済産業省の立場からお話しいただいたのは、同ヘルスケア産業課の江崎禎英氏</p>	
2 日目	
07：00～09：00	朝食
09：00～10：30	個別研究指導 2 (分科会方式)
10：30～10：40	休憩
10：40～12：00	個別研究指導 3 (分科会方式)
12：00～13：00	昼食・懇談会
13：00～13：30	「Living Lab の概要～安心で活力ある超高齢・長寿社会へ～」 秋山弘子 (高齢社会総合研究機構特任教授)

13:30~15:30	共同研究発表2 ・「高齢者のQoL向上のためのコミュニティ活動のファシリテーション」(G4/5) ・「弱らない・弱っても暮らし続けられる住環境のデザイン」(G3) ・「要介護高齢者における居住地選択の意思決定に関する要因の検討—被介護者・主介護者・ケアマネージャーの3者インタビューを通して—」(G2)
15:30~15:45	機構長からの総括等
	
<p>合宿2日目は前日同様、5部屋に分かれ、それぞれに内外のプログラム担当者が付き、個別研究指導に当たった</p>	

4. 国際・産学活動

国際セミナー・学会等参加状況

11/6~8 The 7th APRU Research Symposium on Ageing in the Asia-Pacific

APRU (Asia-Pacific Research University) は環太平洋地域の主要な大学間の相互交流を深め、この地域社会にとって重要な諸問題に対し、教育・研究の分野から協力・貢献することを目的に1997年に設立された地域型の国際大学コンソーシアムであり、IOG/GLAFSはPopulation Ageingの研究グループに所属している。

APRUの主要な活動の一つである大学院生会議が3日間のプログラムで北京大学にて開催された。東アジア地域の大学を中心に、APRUのメンバー大学から100名近くの学生が参加し、各人の最新研究成果を発表した。GLAFSからは3名が参加し、それぞれが口頭発表もしくはポスター発表を行った結果、優れたプレゼンテーションを行った7名に贈られるスカラシップ賞を長木美緒さんが受賞した。

〈参加したコース生〉

長木美緒 (工学系研究科建築学科 修士2年)

松本博成 (医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士1年)

張明禎 (工学系研究科機械工学専攻 博士2年)

〈コース生の感想〉

松本博成 医学系研究科健康科学・看護学専攻 博士1年

東アジア地域の研究者が多く集い、特に中国の高齢化に関する発表が多く見られた。中国では既に介護保

険の導入も試行されており、日本の介護保険制度に関する関心が高かった。一方で中国には、都市部と農村部の格差が非常に大きいこと、儒教的「孝」の文化的価値が残っていること、高齢者が絶対的に過大であることなどの特徴があり、一概に日本と同じことが出来るわけではない。日本の高齢社会研究の成果を発信すると同時に、中国において共同して研究を行っていくことの必要性が感じられた。また、中国では日本と比べても研究と政策（五カ年計画）との距離が近いような印象を受けた。発表した研究に関しては、研究の意義が分かりづらい、経済的評価の視点を含めるべき、などのコメントが寄せられた。

11/11～20 GSA Annual Scientific Meeting

第69回GSA（Gerontological Society of America）Annual Scientific Meetingに参加。秋山弘子特任教授はシンポジウムで発表、村山洋史特任講師はポスター発表、GLAFSコース生では、堀抜文香さんがグループ共同研究1について、蛭川沙也加さんがグループ共同研究6について、松本博成さんが自身の修士論文についてポスター発表を行なった。

〈コース生の感想〉

蛭川沙也加（新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻 博士2年）

第69回GSA（The Gerontological Society of America）は、“New Lens on Aging, Changing Attitudes, Expanding Possibilities”をテーマに、Gerontologyに関連する様々な分野の研究者が集い、意見交換する目的で行われました。学会には35カ国から3,500人以上もの専門家が集い、シンポジウムや口頭発表、ポスター発表などを通じて活発な議論を繰り広げていました。研究分野として、質的・量的研究手法を用いた看護学、社会学的な研究や老化現象を生物学的に明らかにした研究、高齢社会を取り巻く技術に関する研究など、幅広い観点からの発表があり、広い視野で高齢社会を捉えられるような構成でした。今回私は共同研究グループ6の成果をポスター形式で発表しました。共同研究グループ6が取り組んでいる、自立高齢者の食事時の人間関係に注目した研究は全世界でも報告が少なく先進的な研究でしたが、2時間の発表時間中には多くの専門家が興味をもって訪れてくださり、日本国内のみならず世界で共通する問題である手応えを感じました。さらに、同様の研究を認知症の高齢者を対象に行っている研究者と巡り合うこともでき、研究内容の理解を深める上で貴重な意見交換の場となりました。

高齢社会における問題解決のためには、自己の専門のみならず広い分野に通じ、多角的な視点から問題を見つめて本質を見抜く必要があると思いますが、今回の学会参加により幅広い分野の研究報告に触れることができ、多角的な視野を養う上で非常に有意義な場となりました。

産業界との共同研究

ボッシュ株式会社との共同研究

2015年度より、高齢者の支援ニーズに関する研究を開始し、本年度は2年目にあたる。様々な身体・認知状況にある高齢者において必要な支援に関するニーズ調査を行い、その知見を基に、彼らの日常行動を支援するための技術検討を行った。

新日鉄興和不動産株式会社との共同研究

「超高齢社会に対応したマンションの建て替え方式」を研究するため研究会を開催。これまで新日鉄興和不動産が関係したマンション建て替え事例のレビュー（住民インタビュー等を含む）と、いくつかの建て替え予備段階にある事例のケーススタディを行い、超高齢社会に対応したマンションの建て替えに関する課題群の整理と可能性の展望を行った。

具体的には次の通りである。

研究目的 建築的デザイン、都市的デザイン、建て替えマネジメント手法等を総合的に検討しながら、超高齢社会に対応したマンション建替手法を研究開発すること。

研究内容 事例調査等を中心として、学内の多分野の専門家・学生が連携して、超高齢社会に対応したマンション建て替え手法について検討する。

- 1) 建築的デザインとしては、高齢者への対応として、高齢者が住み易い・在宅介護等にも対応可能な・コミュニティを育む集住体の建築デザインについて検討する。
- 2) 都市的デザインとしては、建て替えを通じたまちづくりへの貢献として、地域住民交流の場、ケア施設空間、その他のコミュニティスペースの提供と建て替えのための公的助成・支援のあり方について検討する。
- 3) 建て替えマネジメント手法としては、建て替えの財務的・法的マネジメント手法、地権者間の合意形成手法、地域住民との合意形成手法について検討する。

5. シンポジウム

10/11～12 博士課程教育リーディングプログラム「フォーラム2016」

ヒルトン東京お台場にて開催された博士課程教育リーディングプログラム「フォーラム2016」に参加した。GLAFSからは2018年の春に産業界に就職を希望する学生が意見交換会に出席し、会場を訪れた産業界の人事・採用担当の方々と積極的に交流を深めた。

3/4 国内シンポジウム2017「ヘルシーエイジング社会の設計」

東京大学浅野キャンパス武田ホールで、IOG/GLAFS国内シンポジウム2017「ヘルシーエイジング社会の設計」を開催した。

午前の第1部はGLAFS学生による共同研究の成果発表。午後からの第2部では最先端研究報告として、4人の先生方に各分野の最新の動向をお話しいただいた。

第3部はゲストとしてお招きした京都大学こころの未来研究センター教授・広井良典先生による特別講演「2040年、日本は持続可能か——定常型社会への展望」で開始。その後、3名のコー

ス生が広井先生の提唱する「定常型社会」について自身の意見を発表し、それを受けた形で広井先生とパネルディスカッションを行った。

〈プログラム〉

第1部 GLAFS 共同研究成果報告 (10:00~12:15)

本年度で3年目となる共同研究の成果報告とともに、残された課題や今後の方針について意見交換を行った。

第2部 最先端研究報告 (13:30~14:50)

都市の過疎化から、テレグジスタンス、高齢者や認知症患者の自発移動支援、家族信託まで、ヘルシーエイジング社会を設計するうえで、いま何をなすべきなのか。各分野の最先端の研究についてお話を伺った。

「人口高齢化・減少化における都市空間と国土空間」

荒井良雄 (都市地理学:総合文化研究科教授)

「VRとテレグジスタンスと高齢社会」

館 暲 (システム工学・バーチャルリアリティ:東京大学名誉教授/高齢社会総合研究機構特任研究員)

「研究報告 生活支援工学」

二瓶美里 (人間・生活支援工学:新領域創成科学研究科講師)

「最先端(?)の高齢者法」

樋口範雄 (英米法・医事法:法学政治学研究科教授)

第3部 シンポジウム (15:00~17:30)

■特別講演「2040年、日本は持続可能か——定常型社会への展望」

広井良典 (京都大学こころの未来研究センター教授)

経済成長を絶対的な指標としなくとも、十分な豊かさを実現していける社会=「定常型社会」を目指すためにはどのような発想が必要か。コミュニティとまちづくり、世代間分配と社会保障、医療と死生観等、2040年に向けての展望を伺った。

■パネルディスカッション

「定常型社会」という視点から3人の学生による問題提起があった後、広井先生にご登壇いただき、意見交換がなされた。

登壇者: 麦山亮太 (人文社会系研究科社会文化研究専攻 博士1年)

駒沢行賓 (工学系研究科都市工学専攻 修士2年)

長谷田真帆 (医学系研究科社会医学専攻 4年制博士3年)

ゲスト: 広井良典 (京都大学こころの未来研究センター教授)



ゲストの広井先生と学生たちのディスカッション

2/12 高齢者クラウドシンポジウム（後援）

大手町サンケイプラザで開催された第6回高齢者クラウドシンポジウムを後援した。今回は「高齢者クラウド」の研究開発を取り巻く情勢とその社会実装について議論を展開し、柔軟な働き方を実際に社会に広げている企業や行政の方々を交え、シニアも活躍する2020年に向けたディスカッションを行った。

6. 研究会・セミナー

イブニングセミナー

学内外の最先端の研究や取り組みの成果の報告、及びそれらを共有する場として、2015年度からスタートした。全8回で、そのうち報告があったのは7回だった。

〈各回の話題提供者とテーマ〉

- 5/30 第2回 「柏市における大規模高齢者縦断追跡健康調査から見えてきた我が国のフレイル予防戦略」 飯島勝矢（高齢社会総合研究機構准教授）
「フレイルチェック体験」 高橋競（高齢社会総合研究機構特任研究員）
- 6/27 第3回 「川崎市団地の高齢者（認知症当事者含む）を追ったドキュメンタリー映画『桜の樹の下』を題材に」 田中圭（映画監督）
- 7/25 第4回 「認知症高齢者と家族介護者の睡眠に着目した在宅療養継続支援」 水流聡子（工学系研究科特任教授）
- 9/26 第5回 「『コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン』のこれから—高齢社会を共創するプラットフォームの構築に向けて—」 長島洋介（高齢社会総合研究機構協力研究員・科学技術振興機構社会技術開発センターより出向）、吉田涼子（高齢社会総合研究機構学術支援専門職員）
- 11/28 第6回 「認知症高齢者の行為に関する法律問題と解決の方向性」 米村滋人（法学政治学研究科准教授）
- 1/30 第7回 「介護する人（ケアラー）に社会的支援を」 堀越栄子（日本女子大学教授・一般社団法人日本ケアラー連盟代表理事）
- 2/27 第8回 「この4半世紀における認知症当事者と家族・介護者のコミュニケーションと生活の変容」 天田城介（中央大学教授）

若手勉強会

昨年度から始まった若手教員中心の研究交流会「ジェロントロジー研究会」は名を改め、「若手勉強会」となった。特任講師、特任助教からそれぞれ次のような報告があり、報告後には質疑応答、ディスカッションが行われた。

- 5/25 第1回 「地域活動参加と幸福感：心理社会的プロセスを探る」菅原育子特任講師
「訪問看護サービスの利用者毎に受け持ち訪問看護師が評価した連携のしやすさと目標達成度との関連」藤崎万裕特任助教



第1回発表者、菅原育子特任講師

- 7/8 第2回 「超高齢社会における住民活動の役割」後藤純特任講師
「健康推進員活動の組織づくりと地域への効果に関する研究」村山洋史特任講師
- 11/22 第3回 「老化に対するたんぱく質と遺伝子の影響」橋詰力特任助教
「ワーキングメモリ計測アプリケーションの試作と本手法のインタフェース利用時の認知負荷計測への応用」三浦貴大特任助教
「訪問看護師が捉える『法制度』の枠を超えた訪問看護の実践の手法」木全真理特任助教
- 1/17 第4回 「老化の階層構造の解明による老年症候群の予防・治療法の探索」孫輔卿特任助教
「住み慣れた家に住み続けられる住まい」西野亜希子特任助教
「統計でみる高齢期の就労と社会活動」福井康貴特任助教
- 2/28 第5回 「B型肝炎ウイルスのX蛋白を標的とした新規薬剤の探索」室山良介特任助教
「生涯学習・社会参加に関する組織再編の事例研究—長野県飯田市における地域自治組織・公民館調査」荻野亮吾特任助教
「高齢者期における労働法の役割—一定年延長と継続雇用制度」朴孝淑特任助教

3. 若手研究者による研究成果

1. 論文等

■ 菅原育子（特任講師）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 菅原育子：「高齢者の社会とのつながりと健康及び well-being への経路」, 老年社会科学, 2016;38:351-356.
2. 古谷野亘, 澤岡詩野, 菅原育子, 西村昌記：「高齢者が日常生活において交流している他者との関係—その分類と把握—」, 老年社会科学, 2016;38:345-350.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 菅原育子：「孤立せず、幸せと健康を保って老いるにはどうしたらいいか」, RMS Message (リクルートマネジメントソリューションズ機関紙), 2016;43:41-42.

【著書、編著】

1. 菅原育子：「平均寿命と健康寿命」, 柏木恵子・高橋恵子（編）『人口の心理学へ』, ちとせプレス, pp198-199, 2016.
2. 秋山弘子・菅原育子：「高齢者の暮らしを支える資源」, 東京大学高齢社会総合研究機構（編著）『東大がつくった高齢社会の教科書：長寿時代の人生設計と社会創造』, 東京大学出版会, pp139-152, 2017.

【国際会議における発表】

全て査読有

1. Sugawara, I.：“How social support and sense of community mediate between social participation and subjective well-being in different age groups: Based on a mail survey in a suburban area in Japan.” Paper presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016. 7. 26.
2. Ishioka, Y., Takayama, M., Sugawara, I., Suganuma, M., Masui, Y., Ogawa, M.: “Remembering people long ago: Social ties with invisible people and well-being among the old-old adults.” Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016. 7. 28.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 菅原育子：「幸福感と家族、友人関係：サポートの授受とコンパニオンシップに着目して」, ラウンドテーブル「後期高齢期・超高齢期における幸福感と社会関係およびコミュニティ感覚との関連」にて話題提供者として発表, 日本発達心理学会第27回大会, 北海道大学, 2016. 4. 29.
査読有

2. 萱原育子：「高齢者の社会関係と社会的役割：高齢期をいかに社会と関わって生きるか」, 奨励賞受賞記念講演, 日本老年社会科学第58回大会, 松山大学, 2016. 6. 11.
3. 萱原育子：「地域参加の Subjective Well-being への効果：年齢比較を通して地域参加の意味を考える」, ワークショップ「超高齢社会における社会心理学の役割 (2)」にて話題提供者として発表, 日本社会心理学会第57回大会, 関西学院大学, 2016. 9. 17. [査読有](#)

■ 村山洋史 (特任講師)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 谷口優, 藤原佳典, 篠崎智大, 天野秀紀, 西真理子, 村山洋史, 野藤悠, 清野諭, 成田美紀, 松尾恵理, 横山友里, 新開省二：「Mini-Mental State Examination により評価した認知機能低下と将来の要介護発生との関連」, 日本老年医学会雑誌, 2015;52 (1): 86-93.
2. 谷口優, 清野諭, 藤原佳典, 野藤悠, 西真理子, 村山洋史, 天野秀紀, 松尾恵理, 新開省二：「地域在住高齢者における身体機能・骨格筋量・サルコペニアと認知機能との横断的・縦断的な関連性」, 日本老年医学会雑誌, 2015;52 (3): 269-277.
3. 川畑輝子, 武見ゆかり, 村山洋史, 西真理子, 清水由美子, 成田美紀, 金美芝, 新開省二：「地域在住高齢者に対する虚弱予防教室による虚弱及び食習慣の改善効果」, 日本公衆衛生雑誌, 2015;64 (4): 169-181.
4. Murayama H, Liang J, Bennett JM, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S: "Socioeconomic status and the trajectory of body mass index among older Japanese: a nationwide cohort study of 1987-2006." *Journal of Gerontology: Psychological Sciences & Social Sciences*, 2016; 71 (2): 378-388.
5. Taguchi A, Murayama H, Murashima S: "Association between municipal health promotion volunteers' health literacy and their level of outreach activities in Japan." *PLoS ONE* 2016;11 (10): e0164612.
6. Yokoyama Y, Nishi M, Murayama H, Amano H, Taniguchi Y, Nofuji Y, Narita M, Matsuo E, Seino S, Kawano Y, Shinkai S: "Association of dietary variety with body composition and physical function in community-dwelling elderly Japanese." *Journal of Nutrition, Health and Aging* 2016;20 (7): 691-696.
7. Taniguchi Y, Fujiwara Y, Murayama H, Yokota I, Matsuo E, Seino S, Nofuji Y, Nishi M, Matsuyama Y, Shinkai S: "Prospective study of trajectories of physical performance and mortality among community-dwelling older Japanese." *Journal of Gerontology: A Biological Sciences and Medical Sciences*, 2016;71 (11): 1492-1499.
8. Nofuji Y, Shinkai S, Taniguchi Y, Amano H, Nishi M, Murayama H, Fujiwara Y, Suzuki T: "Associations of walking speed, grip strength, and standing balance with total and cause-specific mortality in a general population of Japanese elders." *Journal of the Ameri-*

- can Medical Directors Association*, 2016;17 (2): 184. e1-7.
9. Shinkai S, Yoshida H, Taniguchi Y, Murayama H, Nishi M, Amano H, Nofuji Y, Seino S, Fujiwara Y: "Public health approach to preventing frailty in the community and its effect on healthy aging in Japan." *Geriatrics & Gerontology International* 2016;16 (Suppl 1): 87-97.
 10. 西真理子, 吉田裕人, 藤原佳典, 深谷太郎, 天野秀紀, 熊谷修, 渡辺修一郎, 村山洋史, 谷口優, 野藤悠, 干川なつみ, 土屋由美子, 新開省二: 「高齢者向けの集団健診が余命および健康余命に及ぼす影響—草津町介護予防事業 10 年間の効果評価の試み—」, *厚生*の指標, 2016;63 (2): 2-11.
 11. Murayama H, Shinkai S, Nishi M, Taniguchi Y, Amano H, Seino S, Yokoyama Y, Yoshida H, Fujiwara Y, Ito H: "Albumin, hemoglobin, and the trajectory of cognitive function in community-dwelling older Japanese: a 13-year longitudinal study." *Journal of Prevention of Alzheimer's Disease*. (in press)
 12. Murayama H, Spencer MS, Sinco BR, Palmisano G, Kieffer EC: "Does racial/ethnic identity influence the effectiveness of a community health worker intervention for African American and Latino adults with type 2 diabetes?" *Health Education & Behavior*. (in press)
 13. Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Fukaya T, Shinkai S: "Changes in health behaviors and the trajectory of body mass index among older Japanese: a 19-year longitudinal study." *Geriatrics & Gerontology International*. (in press)
 14. Murayama H, Shaw BA: "Heterogeneity in trajectories of body mass index and their associations with mortality in old age: a literature review." *Journal of Obesity & Metabolic Syndrome*. (in press)
 15. Yokoyama Y, Nishi M, Murayama H, Amano H, Taniguchi Y, Nofuji Y, Narita M, Matsuo E, Seino S, Kawano Y, Shinkai S: "Dietary variety and decline in lean mass and physical performance in community-dwelling older Japanese: A 4-year follow-up study." *Journal of Nutrition, Health and Aging* (in press)
 16. Tabuchi T, Murayama H, Hoshino T, Nakayama T: "An out-of-pocket cost removal intervention on fecal occult blood test attendance." *American Journal of Preventive Medicine*. (in press)
 17. Taniguchi Y, Kitamura A, Seino S, Murayama H, Amano H, Nofuji Y, Nishi M, Yokoyama Y, Shinozaki T, Yokota I, Matsuyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S: "Gait Performance Trajectories and Incident Disabling Dementia Among Community-Dwelling Older Japanese." *Journal of the American Medical Directors Association*. (in press)
 18. Taniguchi Y, Kitamura A, Murayama H, Amano H, Shinozaki T, Yokota I, Seino S, Nofuji

Y, Nishi M, Yokoyama Y, Matsuyama Y, Fujiwara Y, Shinkai S: "Mini-Mental State Examination Score Trajectories and Incident Disabling Dementia Among Community-Dwelling Older Japanese." *Geriatrics & Gerontology International*. (in press)

19. Seino S, Nishi M, Murayama H, Narita M, Yokoyama Y, Taniguchi Y, Amano H, Kitamura A, Shinkai S: "Effects of a multifactorial intervention comprising resistance exercise, nutritional, and psychosocial programs on frailty and functional health in community-dwelling older adults: a randomized, controlled, crossover trial." *Geriatrics & Gerontology International*. (in press)

20. 田口敦子, 村山洋史, 荒川美穂子, 寺尾敦史: 「健康推進員組織の課題解決を目指した研修プログラムの効果」, 日本公衆衛生雑誌. (in press)

21. 土屋瑠見子, 吉江悟, 川越正平, 平原佐斗司, 大西弘高, 村山洋史, 西永正典, 飯島勝矢, 辻哲夫: 「在宅医療推進のための多職種連携研修プログラム開発: 都市近郊地域における短期的効果の検証」, 日本公衆衛生雑誌. (in press)

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 村山洋史: 「ソーシャルキャピタルの多面性: 地域保健活動でいかに醸成を目指すか」, 老年社会科学, 2016;37 (4): 454-462.

2. 村山洋史: 「高齢期における体格指数の加齢変化: 推移パターンが死亡率に及ぼす影響とそれを規定する社会経済的背景の検討」, *Aging & Health*, 2016;77: 38-41.

3. 村山洋史, 田口敦子, 宮尾智香子: 「健康推進員主導による健康教室の効果評価: 滋賀県彦根市での取り組み」, 公衆衛生情報, 2016;46 (6): 26-27.

4. 田口敦子, 村山洋史, 宮尾智香子, 大澤吉子, 五坪千恵子: 「健康推進員のやりがい向上プロジェクト: 彦根市の健康教室の取り組み」, 保健師ジャーナル, 2016;72 (11): 930-934.

【国際会議における発表】

1 以外, 査読有

1. Murayama H: "Trajectories of body mass index and their association with mortality among older Japanese: Do they differ from those of Western populations?" The 44th Spring Congress of the Korean Society for the Study of Obesity, Seoul, South Korea, 2016. 4. 9 (招待講演)

2. Murayama H: "Socioeconomic status and weight change: comparison between Japan and Finland." The 8th Annual Meeting of International Society of Social Capital Research, Sapporo, Japan, 2016. 5. 30-31.

3. Murayama H, Shinkai S, Nishi M, Taniguchi Y, Amano H, Seino S, Yokoyama Y, Yoshida H, Fujiwara Y, Ito H: "Albumin and hemoglobin affect the trajectory of cognitive function in community-dwelling older Japanese: Results from a 13-year longitudinal study." The 2016 Epidemiological Congress of the Americas, Miami, FL, USA, 2016. 6. 21-24.

4. Fu O, Kaito K, Suthutvoravut U, Hirukawa S, Tanaka T, Takase M, Hashidume T, Kimata M, Murayama H: “Dining style and residents’ meal satisfaction in senior care facility.” The 3rd IARU Ageing, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
5. Carandang RR, Asis E, Varfrlron KR, Marges MA, Murayama H, Ogino R, Shibamura A, Jimba M: “Senior Leaders in Action: The development of lifelong learning program for urban-dwelling seniors in the Philippines.” The 3rd IARU Ageing, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
6. Murayama H, Liang J, Shaw BA, Botosaneanu A, Kobayashi E, Akiyama H, Shinkai S: “Age and socioeconomic variations in the pattern of long-term functional decline among older Japanese.” The 68th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America, New Orleans, LA, USA, 2016. 11. 16-20.
7. Yokoyama Y, Kitamura A, Nishi M, Murayama H, Amano H, Taniguchi Y, Seino S, Shinkai S: “Dietary patterns and usual gait speed in community-dwelling elderly Japanese.” The 68th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America, New Orleans, LA, USA, 2016. 11. 16-20.
8. Hirukawa S, Takase M, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Hashidume T, Kimata M, Murayama H: “Dining style of assisted living facility residents: Are they satisfied with their dining?” The 68th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America, New Orleans, LA, USA, 2016. 11. 16-20.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

全て査読有

1. 村山洋史, 杉山美香, 稲垣宏樹, 宇良千秋, 宮前史子, 枝広あや子, 岡村毅, 本川佳子, 栗田主一: 「地域レベルのソーシャルキャピタルは認知症への不安感と関連するか? 都市部在住高齢者での検討」, 第17回日本認知症ケア学会大会, 神戸, 2016. 6. 4-5.
2. 長谷部雅美, 野中久美子, 村山洋史, 藤原佳典: 「地域包括支援センターにおける認知症者の早期把握に関連する管轄地域の特徴: 住民同士の信頼および協力関係に着目して」, 第58回日本老年社会学会大会, 松山, 2016. 6. 11-12.
3. 野中久美子, 小池高史, 南潮, 松永博子, 望月美希, 長谷部雅美, 村山洋史, 小林江里香, 藤原佳典: 「生活支援サービスを受けることを望む高齢者の特徴: 家族以外の他者から日常生活支援を受けることの意向に着目して」, 第58回日本老年社会学会大会, 松山, 2016. 6. 11-12.
4. 小池高史, 野中久美子, 南潮, 松永博子, 望月美希, 長谷部雅美, 村山洋史, 小林江里香, 藤原佳典: 「高齢者の居住移動と近隣関係: 地元居住/非地元居住に着目して」, 第58回日本老年社会学会大会, 松山, 2016. 6. 11-12.

5. 藤原佳典, 野中久美子, 南潮, 松永博子, 望月美希, 長谷部雅美, 小池高史, 村山洋史, 小林江里香:「大都市高齢就労者および求職者の心身社会的特徴:首都圏高齢者の地域包括的孤立予防研究 CAPITAL Study II より」, 第 58 回日本老年社会科学大会, 松山, 2016. 6. 11-12.
6. 成田美紀, 横山友里, 西真理子, 村山洋史, 谷口優, 清野諭, 天野秀紀, 野藤悠, 新開省二:「地域高齢者における食品摂取の多様性とサルコペニアとの関連」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 金沢, 2016. 6. 8-10.
7. 谷口優, 清野諭, 村山洋史, 野藤悠, 藤原佳典, 西真理子, 天野秀紀, 新開省二:「身体機能の加齢変化パターンと余命に関する前向き研究」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 金沢, 2016. 6. 8-10.
8. 藤原佳典, 南潮, 村山洋史, 倉岡正高, 村山幸子, 野中久美子, 岩田直子, 遠藤洋子, 小宮山恵美, 渡辺修一郎:「生活機能の劣る高齢者は地域の互助を受け入れるか?」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 金沢, 2016. 6. 8-10.
9. 南潮, 村山洋史, 倉岡正高, 村山幸子, 野中久美子, 岩田直子, 遠藤洋子, 小宮山恵美, 渡辺修一郎, 藤原佳典:「タイプ別社会的孤立リスク者と生活機能低下の関連:CAPITAL Study III~第二報」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 金沢, 2016. 6. 8-10.
10. 本川佳子, 枝広あや子, 杉山美香, 稲垣宏樹, 宇良千秋, 宮前史子, 岡村毅, 村山洋史, 平野浩彦, 栗田主一:「地域在樹高齢者におけるフレイル有病率と認知機能・生活状況・主観的健康感等に関する検討」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 金沢, 2016. 6. 8-10.
11. 杉山美香, 宇良千秋, 稲垣宏樹, 宮前史子, 村山洋史, 枝広あや子, 岡村毅, 本川佳子, 栗田主一:「自分自身の将来の認知症に関する不安感とその関連要因の検討:認知機能、身体機能、心理社会的機能を中心とした探索的研究」, 第 31 回日本老年精神医学会, 金沢, 2016. 6. 23-24.
12. 村山洋史, 田口敦子, 山崎菜穂子, 山口拓洋:「高齢期の食品摂取多様性向上を目指した健康推進員主導型プログラム:交差法による検証」, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
13. 山崎菜穂子, 田口敦子, 村山洋史, 山口拓洋:「高齢期の食品摂取多様性向上を目指した健康推進員主導型プログラム:プロセス評価」, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
14. 田口敦子, 村山洋史, 山崎菜穂子, 山口拓洋:「推進員主導型プログラム:交差法による検証」, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
15. 北村明彦, 谷口優, 横山友里, 天野秀紀, 清野諭, 西真理子, 野藤悠, 村山洋史, 岡部たづる, 干川なつみ, 藤原佳典, 新開省二:「群馬県草津町における介護予防 14 年間の成果 (1):介護保険統計からみた要介護認定率、発生率の推移」, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
16. 谷口優, 北村明彦, 横山友里, 天野秀紀, 清野諭, 西真理子, 野藤悠, 村山洋史, 岡部たづる, 干川なつみ, 藤原佳典, 新開省二:「群馬県草津町における介護予防 14 年間の成果 (2):高齢住民の機能的健康度の推移」, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.

17. 天野秀紀, 西真理子, 谷口優, 清野諭, 横山友里, 北村明彦, 藤原佳典, 吉田裕人, 渡辺直紀, 李相侖, 村山洋史, 野藤悠, 新開省二:「高齢者健診受診者における認知機能推移パターンと要介護化・死亡リスクとの関係」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
18. 成田美紀, 清野諭, 西真理子, 村山洋史, 横山友里, 谷口優, 天野秀紀, 北村明彦, 新開省二:「フレイル改善のための複合プログラム (1): プログラム介入時の短期的効果の検討」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
19. 清野諭, 成田美紀, 西真理子, 村山洋史, 横山友里, 谷口優, 天野秀紀, 北村明彦, 新開省二:「フレイル改善のための複合プログラム (2): プログラム終了後の長期的効果の検討」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
20. 安永正史, 西真理子, 深谷太郎, 野中久美子, 小池高史, 長谷部雅美, 鈴木宏幸, 村山陽, 村山洋史, 南潮, 齊藤雅茂, 小林江里香, 藤原佳典:「社会的孤立と閉じこもり傾向が死亡に及ぼす影響: 首都圏高齢者の地域包括的孤立予防研究 (CAPITAL study) 6年間の追跡」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
21. 野中久美子, 小池高史, 長谷部雅美, 村山洋史, 深谷太郎, 村山陽, 鈴木宏幸, 小林江里香, 松永博子, 藤原佳典:「『高齢者見守りキーホルダー』システム未登録者の特徴」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
22. 枝広あや子, 杉山美香, 稲垣宏樹, 村山洋史, 岡村毅, 本川佳子, 平野浩彦, 栗田主一:「主観的口腔機能評価には認知機能低下とうつ傾向が関係するか?」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
23. 白井こころ, 磯博康, 尾島俊之, 相田潤, 松山祐輔, 藤原武男, 雨宮愛理, 近藤尚己, 村山洋史, 齋藤民, 辻大志, 奥園桜子, 佐藤峻, 近藤克則:「地域在住高齢者の“幸福感”と死亡・認知症発症との関連についての検討: JAGES Project」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
24. 野中久美子, 小池高史, 長谷部雅美, 村山洋史, 深谷太郎, 小林江里香, 村山陽, 鈴木宏幸, 藤原佳典:「高齢者支援と子育て支援は連携できるか? 多世代型地域互助システムに向けて」, 第75回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
25. 本川佳子, 枝広あや子, 杉山美香, 稲垣宏樹, 宇良千秋, 宮前史子, 岡村毅, 村山洋史, 平野浩彦, 田中弥生, 栗田主一, 渡邊裕:「地域在住高齢者におけるフレイル重症度と生活状況に関する検討」, 第4回日本介護福祉・健康づくり学会, 千葉, 2016. 11. 4-5.

■ 後藤純 (特任講師)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

全て査読有

1. 木全真理, 吉江悟, 後藤純, 井堀幹夫, 飯島勝:「在宅医療・介護連携推進のためのルールの構築: 情報共有における合意形成を介した取り組み」, 日本在宅医学会雑誌, 日本在宅医学会,

2016;18 (1):11-17.

2. 後藤純, 小泉秀樹, 大方潤一郎:「Aging in Place を実現可能とするコミュニティ環境計画論に関する基礎的考察:千葉県柏市豊四季台地域を事例として」, 計画行, 日本計画行政学会, 2016;39 (3):58-68.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 後藤純, 伊藤夏樹:「活力ある超高齢社会を築く観点から考えるコンパクト化の論点 (特集 都市コンパクト化時代の住まい方)」, 『住宅』住宅, 日本住宅協会, 2017;66 (1):38-45.
2. 後藤純, 伊藤夏樹:「大槌町および釜石市における住民共助型のコミュニティ活動 (特集 東北復興に見る新しい日本のかたち)」, 『商工ジャーナル』, 商工中金経済研究所, 2017;42(3):23-25.

【著書、編著】

1. (共著) 成瀬友梨, 後藤智香子, 後藤純:「7.2 りくカフェ:被災地におけるコミュニティスペースの新しい展開」, 『「ラーニングフルエイジング」とは何か』, 森玲奈編著, ミネルヴァ書房, 2017.
2. (共著) 後藤純:「住民・NPO と行政の連携—協働のまちづくり事業制度」, 『コミュニティデザイン学』小泉秀樹編著, 東京大学出版会, 2016.

【国際会議における発表】

1. Goto J:23th Aug2016, Collaborative Planning for the aged society, Japan, China and ROK Trilateral Youth Summit 2016, Tokyo (招待講演)
2. Goto J:21th June2016, Collaborative Planning for the aged society, JST-Leibniz Work Shop -Healthy Aging, Tokyo (招待講演)

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 後藤純:「復興公営住宅にコミュニティをつくる—望みと知恵の共有」, 第5回日本公衆衛生看護学会学術集会, 2017. 1. 21. (招待講演)

■ 木全真理 (特任助教)

【学術雑誌に発表した論文、著書】

1. 木全真理, 吉江悟, 後藤純, 井堀幹夫, 飯島勝矢:「在宅医療・介護連携推進のためのルールの構築:情報共有における合意形成を介した取り組み」, 日本在宅医学会雑誌, 2016;18(1): 11-17. 査読有

【学術雑誌又は商業誌における解説、総説】

1. 木全真理:「福祉の現場から 先駆的な訪問看護の実践とニーズの体系化」, 地域ケアリング, 2016;18(2): 60-64.

【国際会議における発表】

1. Baba A, Ando E, Sakka M, Haseda M, Hwang E, Mugiyama R, Tiantian W, Yoshino T, Fujita A, Yamaguchi G, Kyuwon K, Ishimaru M, Fukui Y, Kimata M, Sugawara I: “Ap-

propriate Allocation of Long Term Care Insurance (LTCI) Services for Home Care.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 4.

2. Fu O, Kaitoh K, Suthutvoravut U, Hirukawa S, Tanaka T, Takase M, Hashidume T, Kimata M, Murayama H : “Dining style and residents’ meal satisfaction in senior care facility.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan 2016. 11. 4.
3. Hirukawa S, Takase M, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Hashidume T, Kimata M, Murayama H : “Dining Style of Assisted Living Facility Residents: Are They Satisfied With Their Dining?” The 69th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), New Orleans, LA, USA, 2016. 11. 16-20.

【国内学会，シンポジウム等における発表】

1. 木全真理 : 「先駆的な訪問看護の実践に関する特性の検討」, 第35回日本看護科学学会学術集会, 広島, 2016. 12. 5-6.

■ 三浦貴大 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

全て査読有

1. Takahiro Miura, Takashi Ohashi, Masatsugu Sakajiri, Junji Onishi, Tsukasa Ono: “Accessible Button Arrangements of Touchscreen Interfaces for Visually Impaired Users.” Journal on Technology & Persons with Disabilities, 2016;4:55-68. DOI:10.2113/180130
2. 三浦貴大, 藪謙一郎, 坂尻正次, 上田麻理, 檜山敦, 廣瀬通孝, 伊福部達 : 「身体障害者のためのバリアフリー情報の共有 : 実地アセスメントとクラウドソーシングによる入力情報の分析」, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 2016;21(2): 283-294. DOI:10.18974/tvrsj.21.2_283
3. 松尾政輝, 坂尻正次, 三浦貴大, 大西淳児, 小野東 : 「視覚障害者のアクセシビリティに配慮したアクションRPG : 全盲者向け開発環境とゲーム本体の開発」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, 2016;21(2): 303-312. DOI:10.18974/tvrsj.21.2_303
4. 三浦貴大, 藪謙一郎, 檜山敦, 稲村規子, 廣瀬通孝, 伊福部達 : 「あゆログ : 高齢者のためのスマートフォンによる歩行計測・促進システム」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, 2016;21(2): 323-333. DOI:10.18974/tvrsj.21.2_323
5. Takahiro Miura, Ken-ichiro Yabu, Kazutaka Ueda, Kenichi Tanaka, Tohru Ifukube: “Visuospatial working memory game and measured memory performances at various ages.” ITE Transactions on Media Technology and Applications (MTA), 2017;5(1):8-16. DOI:10.3169/mta.5.8
6. 三浦貴大, 藪謙一郎, 荻野亮吾, 堤可奈子, 檜山敦, 廣瀬通孝, 伊福部達 : 「ReAcTS; ボラン

ティアによる実地アセスメントを支援するバリアフリー状況収集・整理プラットフォーム」,
情報処理学会 デジタルプラクティス, 2017;8(1): 21-29.

【学術雑誌等または商業誌における解説、総説】

1. 三浦貴大, 藪謙一郎:「高齢者・身体障害者のためのアクセシビリティ状況の共有・整理を支援するバリアフリー情報共有基盤」, 地域ケアリング, 2016;18(8): 45-51.
2. 伊福部達, 檜山敦, 三浦貴大:「20年後、超高齢社会とVRは?—ポケモンGO、「三途の川」を渡る—」, 日本バーチャルリアリティ学会誌, 2016;21(3): 38-39.

【国際会議における発表】

1~11, 15 査読有

1. Takashi Ohashi, Takahiro Miura, Masatsugu Sakajiri, Junji Onishi, Tsukasa Ono:“Can visually impaired smartphone users correctly manipulate tiny screen keyboards under a screen reader condition?” Lecture Notes in Computer Science (Computers Helping People with Special Needs), Springer, 9759:157-164, Linz, Austria, 2016. 7. DOI:10.1007/978-3-319-41264-1_21
2. Masaki Matsuo, Takahiro Miura, Masatsugu Sakajiri, Junji Onishi, Tsukasa Ono:“Audible Mapper & ShadowRine: Development of Map Editor using only Sound in Accessible Game for Blind Users, and Accessible Action RPG for Visually Impaired Gamers.” Lecture Notes in Computer Science (Computers Helping People with Special Needs), Springer, 9759:537-544, Linz, Austria, 2016. 7. DOI:10.1007/978-3-319-41264-1_73
3. Junji Onishi, Tadahiro Sakai, Masatsugu Sakajiri, Akihiro Ogata, Takahiro Miura, Takuya Handa, Nobuyuki Hiruma, Toshihiro Shimizu, and Tsukasa Ono:“Experimenting with Tactile Sense and Kinesthetic Sense Assisting System for Blind Education.” Lecture Notes in Computer Science (Computers Helping People with Special Needs), Springer, 9759: 92-99, Linz, Austria, 2016. 7. DOI:10.1007/978-3-319-41267-2_13
4. Takahiro Miura, Ken-ichiro Yabu, Takeshi Noro, Tomoko Segawa, Kei Kataoka, Akihito Nishimuta, Masaya Sanmonji, Atsushi Hiyama, Michitaka Hirose:“Sharing real-world accessibility conditions using a smartphone application by a volunteer group.” Lecture Notes in Computer Science (Computers Helping People with Special Needs), Springer, 9759:265-272, Linz, Austria, 2016. 7. DOI:10.1007/978-3-319-41267-2_36
5. Takahiro Miura, Shoma Arita, Atsushi Hiyama, Masatomo Kobayashi, Toshinari Itoko, Junichiro Sawamura, Michitaka Hirose:“Work motivating factors of the communications in a crowd-powered microvolunteering site.” Lecture Notes in Computer Science (Universal Access in Human-Computer Interaction. Methods, Techniques, and Best Practices), Springer, 9737:359-370, Toronto, Canada, 2016. 7. DOI:10.1007/978-3-319-40250-5_35
6. Takahiro Miura, Ken-ichiro Yabu, Kazutaka Ueda, Tohru Ifukube:“Visuospatial working

- memory game and measured memory performances at various ages.” Proc. SMC 2016, IEEE, 4538–4542, Budapest, Hungary, 2016. 10. DOI:10.1109/SMC.2016.7844946
7. Takahiro Miura, Taichi Goto, Kazuki Kaneko, Yuka Sumikawa, Ayako Ishii, Mio Doke, Keita Suzuki, Taiyu Okatani, Akihiro Kubota, Mingzhen Zhang, Yuki Kinoshita, Hazuki Yoshinaga, Masahiro Tsuruta, Yuri Kominami, Misato Nihei, Takenobu Inoue, Minoru Kamata, Junichiro Okata: “Needs and impressions of communication robotics by seniors with slight physical and cognitive disabilities: Evaluation by system usability scale.” Proc. SMC 2016, IEEE, 4088–4092, Budapest, Hungary, 2016. 10. DOI:10.1109/SMC.2016.7844872
 8. Junji Onishi, Tadahiro Sakai, Masatsugu Sakajiri, Takahiro Miura, Tsukasa Ono: “Auto-Assisting Figure Presentation System for Inclusion Education.” Proc. SMC 2016, IEEE, 177–181, Budapest, Hungary, 2016. 10. DOI:10.1109/SMC.2016.7844238
 9. Masaki Matsuo, Takahiro Miura, Junji Onishi, Masatsugu Sakajiri: “ShadowRine: Accessible Game for Blind Users, and Accessible Action RPG for Visually Impaired Gamer.” Proc. SMC 2016, IEEE, 2826–2827, Budapest, Hungary, 2016. 10. DOI:10.1109/SMC.2016.7844667
 10. Takahiro Miura, Ken-ichiro Yabu, Hiroshi Ozawa, Kenichi Tanaka, Masamitsu Furukawa, Natsuko Mikami, Seiko Michiyoshi, Tetsuya Yamamoto, Kazutaka Ueda, Tohru Ifukube: “Visuospatial workload measurement of an interface based on the dual task of visual working memory test.” Proc. Automotive UI 2016, ACM, 9–17, Ann Arbor, MI, USA, 2016. 10. DOI:10.1145/3003715.3005460
 11. Takahiro Miura, Akira Kitagami, Yasuhiko Fujinawa, Takeshi Nagoya: “Accessibility, efficacy, and improvements of voting methodology for visually impaired persons in the case using a web-based electric ballot system.” Proc. IndiaHCI 2016, ACM, 75–83, Mumbai, India, 2016. 12. DOI:10.1145/3014362.3014370
 12. Takahiro Miura: “Sharing real-world accessibility information by seniors, people with disabilities, and volunteers.” MOST-JST Workshop on “ICT for Accessibility and Support of Older People”, Tainan, Taiwan, 2016. 4.
 13. Ren Komatsu, Nana Shinozaki, Satomi Nukina, Hisashi Moriizumi, Atsuhito Yasuhara, Ningjia Yang, Mingzhen Zhang, Kazuki Kaneko, Akihiro Kubota, Yoshiyuki Nakagawa, Ziaratnia Sayyed Ali, Hazuki Yoshinaga, Mio Doke, Taichi Goto, Chand Krishant, Ayako Ishii, Yuka Sumikawa, Yukihiro Tsuruta, Taiyu Okatani, Yuki Kinoshita, Keita Suzuki, Shoma Arita, Yuri Kominami, Rumiko Tsuchiya, Takahiro Miura, Akiko Nishino, Atsushi Hiyama, Katsuya Iijima, Toshiaki Tanaka, Junichiro Okata: “Needs assessments of support robots for seniors with mild physical and cognitive impairment.” IARU 2016, 6–6,

Tokyo, Japan, 2016. 11.

14. Kazuki Kaneko, Takayuki Hamada, Shingo Yoshida, Satomi Kikuoka, Jang Hyewon, Mio Doke, Makoto Suto, Yaka Matsuda, Yukitsugu Komazawa, Takashi Miyabe, Aya Fujiwara, Unyaporn Suthutvoravut, Rogie Royce Carandang, Masayuki Anekawa, Yoshifumi Kurata, Ryogo Ogino, Mari Kimata, Takahiro Miura, Jun Goto: "Development of programs and facilitation techniques to build a community of healthy elderly." IARU 2016, 8-8, Tokyo, Japan, 2016. 11.
15. Mari Ueda, Takahiro Miura, Ken-ichiro Yabu, Takashi Morihara, Yoshio Tsuchida: "Acou-accessibleMap: Smartphone-based collaborative tool for volunteers to create a map of acoustical accessibility conditions for visually impaired people." The Journal of the Acoustical Society of America, 140:3366, Hawaii, HA, USA, 2016. 11. DOI: 10. 1121/1.4970746

【国内学会、シンポジウム等における発表】

1. 北神あきら, 藤縄泰彦, 三浦貴大, 名見剛: 「視覚障害者における電子投票システムを用いた選挙方法の有効性と改善指針」, 第25回視覚障害リハビリテーション発表大会, 97-97, グランシップ静岡, 2016. 6.
2. 三浦貴大, 國安雄貴, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「2010年代における視覚障害者のタッチスクリーン端末の利用・ニーズ動向」, LIFE 2016, 43-46, 東北大学青葉山キャンパス, 2016. 9.
3. 三浦貴大, 藪謙一郎, 萩野亮吾, 野呂岳史, 瀬川智子, 片岡慶, 檜山敦, 廣瀬通孝, 伊福部達: 「ReAcTS: 実地アセスメント効率化のためのバリアフリー状況収集・整理システム」, LIFE 2016, 47-50, 東北大学青葉山キャンパス, 2016. 9.
4. 松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「全盲者のアクセシビリティに配慮した音だけで作図する地図エディタの評価」, LIFE 2016, 51-54, 東北大学青葉山キャンパス, 2016. 9.
5. 大西淳児, 大橋隆, 松尾政輝, 坂尻正次, 三浦貴大, 小野東: 「視覚障害者のための遠隔個別教育支援システムの試作」, LIFE 2016, 55-56, 東北大学青葉山キャンパス, 2016. 9.
6. 上田麻理, 森原崇, 土田義郎, 三浦貴大, 謙一郎: 「音環境アクセシビリティマップ作成のための実験的検討—音響福祉機器の認知度と現状評価実験—」, 日本音響学会 2016 年秋季講演論文集, 1125-1128 (2-6-5), 富山大学五福キャンパス, 2016. 9.
7. 今枝秀二郎, 田中友規, 谷口紗貴子, 金晃敏, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 飯島勝矢, 田中敏明, 大月敏雄, 西出和彦, 大方潤一郎: 「横浜市における高齢者の転倒事例に基づく地域居住を継続するための環境要因の究明」, 日本転倒予防学会誌 (日本転倒予防学会 第3回学術集会), 3(2): 89-89, ウィンクあいち (愛知県産業労働センター), 2016. 10.
8. 田中友規, 今枝秀二郎, 谷口紗貴子, 金晃敏, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎: 「都市部・都市郊外部に

住む中高齢者における住居内転倒状況と関連する内的要因・外的要因の検討」, 日本転倒予防学会誌 (日本転倒予防学会 第3回学術集会), 3(2): 74-74, ウィンクあいち (愛知県産業労働センター), 2016. 10.

9. 松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「視覚障害者のアクセシビリティに配慮した横スクロールアクションゲームの開発」, 情報処理学会 アクセシビリティ研究会, 2016-AAC-2 (12): (4 pages), 国立情報学研究所, 2016. 12.
10. 市場大亮, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「弱視者のゲームアクセシビリティにおける問題点」, 情報処理学会 アクセシビリティ研究会, 2016-AAC-2 (13): (4 pages), 国立情報学研究所, 2016. 12.
11. 三浦貴大, 大橋隆, 松尾政輝, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「視覚障害者のスマートフォン利用におけるアクセシブルなボタン配置に関する検討」, 第42回 (2016年) 感覚代行シンポジウム, 13-16, 産業技術総合研究所臨海副都心センター, 2016. 12.
12. 曾我晋平, 松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東: 「GoalBaural: ゴールボールにおける音感覚の訓練アプリケーションの開発」, ライフサポート学会 第26回フロンティア講演会, 1 page, 芝浦工業大学豊洲キャンパス, 2017. 3.

■ 荻野亮吾 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. 牧野篤, 李正連, 新藤浩伸, 荻野亮吾, 侯婷婷, 中村由香, 大山宏, 中川友理絵, 相良好美, 西川昇吾, 松田弥花, 松尾有美: 「地域社会への参加と公民館活動—飯田市の千代・東野地区におけるアンケート調査の分析から—」, 学習基盤社会研究・調査モノグラフ, 2016;12:1-101.
2. 荻野亮吾: 「社会教育とコミュニティ構築に関する比較事例研究の方法—社会関係資本論に基づくアプローチ—」, 日本の社会教育, 2016;60:187-199. 査読有
3. 三浦貴大, 藪謙一郎, 荻野亮吾, 堤可奈子, 檜山敦, 廣瀬通孝, 伊福部達: 「ReAcTS—ボランティアによる実地アセスメントを支援するバリアフリー状況収集・整理プラットフォーム—」, 情報処理学会 デジタルプラクティス, 2017;8(1):21-29.

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 荻野亮吾: 「調べる学習を通じて身につく力とは」, 図書館の学校, 2016;2016 (秋): 12.

【著書、編著】

1. (共著) 荻野亮吾: 「調べる学習で身についた力」, 公益財団法人図書館振興財団 (編), 『図書館と学校が地域をつくる』, 学文社, 2016:57-68.
2. (共著) 荻野亮吾: 「地域の様々な主体と連携・協働を進めるポイント」, 独立行政法人国立女性教育会館 (編), 『地域連携による女性活躍推進の実践—持続可能な地域づくりに活かす行政と民間のつながり—』, 悠光堂, 2017: 18-32.

【国際会議における発表】

1. Yokouchi N, Horinuki F, Okada H, Sumikawa Y, Suto M, Fukui C, Ogino R, Hyosook P, Fujisaki M, Nagata S, Higuchi N, Goto J:“Practice for supporting the decision-making of the persons with dementia: A field study of ‘Dementia café.’” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Initiative Graduate Student Conference 2016, Tokyo, Japan, 2016. 11. 4.
2. Kaneko K, Hamada T, Yoshida S, Kikuoka S, Jang H, Doke M, Suto M, Matsuda Y, Komazawa Y, Miyabe T, Fujiwara A, Suthutvoravut U, Carandang R, Anekawa M, Kurata Y, Ogino R, Kimata M, Miura T, Goto J:“Development of programs and facilitation techniques to build a community of healthy elderly.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Initiative Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 4.
3. Horinuki F, Sumikawa Y, Sugimoto M, Tsuchiya R, Ogino R, Park H, Mikoshiba N, Nagata S:“Factor of Facilitation Using Tool of Advance Directive: Evaluation from Elderly Perspective.” The 69th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), New Orleans, Louisiana, USA, 2016. 11. 16–20. 査読有

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 三浦貴大, 藪謙一郎, 荻野亮吾, 野呂岳史, 瀬川智子, 片岡慶, 檜山敦, 廣瀬通孝, 伊福部達:「ReActs: 実地アセスメント効率化のためのバリアフリー状況収集・整理システム」, Life2016 オーガナイズドセッション 13 「視聴覚・発声障害のためのバリアフリー技術」, 仙台市, 2016. 9. 4.
2. 荻野亮吾, 中村由香:「社会関係資本の構築に関する理論的検討: 市民社会組織に着目して」, 日本社会教育学会第 63 回研究大会, 弘前市, 2016. 9. 17.
3. 荻野亮吾:「『社会教育としての ESD』研究の成果と課題」, 日本社会教育学会第 63 回研究大会 ラウンドテーブル「SDGs (持続可能な開発目標) と社会教育」, 弘前市, 2016. 9. 18.
4. 荻野亮吾:「調べる学習で身についた力: 受賞者調査の分析より」, 第 18 回図書館総合展「図書館と学校が地域をつくる: 確かな学力形成と豊かな人生に向けて」, 横浜市, 2016. 11. 8.

■ 孫輔卿 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

1. Nanao-Hamai M, Son BK, Hashizume T, Ogawa S, Akishita M:“Protective effects of estrogen against vascular calcification via estrogen receptor α -dependent growth arrest-specific gene 6 transactivation.” Biochem Biophys Res Commun. 480: 429~435, 2016. 査読有

【学術雑誌等又は商業誌における解説、総説】

1. 孫輔卿, 秋下雅弘:「CKD 病理生理、血管石灰化」, 診断と治療の ABC, 94–102, 2016.

【国際会議における発表】

1. Son BK, Ogawa S, Akishita M:“Effects of testosterone deficiency on development of ab-

- dominal aortic aneurysm.” The 10th Asian-Pacific Society of Atherosclerosis and Vascular Disease, Tokyo, Japan, 2016. 7. 14–16.
2. Nanao M, Son BK, Hashizume T, Ogawa S, Akishita M: “Ginsenoside Rb1 inhibits inorganic phosphate-induced vascular smooth muscle cells calcification via androgen receptor.” The 10th Asian-Pacific Society of Atherosclerosis and Vascular Disease, Tokyo, Japan, 2016. 7. 14–16.
 3. Hashizume T, Son BK, Nanao M, Ogawa S, Akishita M: “Role of inflammaging in abdominal aortic aneurysm: a study using senescence-accelerated prone mice.” The 10th Asian-Pacific Society of Atherosclerosis and Vascular Disease, Tokyo, Japan, 2016. 7. 14–16.
 4. Son BK, Ogawa S, Akishita M: “Testosterone deficiency promotes development of abdominal aortic aneurysm in mice.” International and Interdisciplinary Symposium, Tokyo, Japan, 2016. 7. 11–13.
 5. Hashizume T, Son BK, Nanao M, Ogawa S, Akishita M: “Inflammaging accelerates abdominal aortic aneurysm formation and progression.” International and Interdisciplinary Symposium, Tokyo, Japan, 2016. 7. 11–13.
 6. Nanao M, Son BK, Hashizume T, Ogawa S, Akishita M: “Inhibitory effects of Ginsenoside Rb1 on vascular calcification through androgen receptor.” International and Interdisciplinary Symposium, Tokyo, Japan, 2016. 7. 11–13.
 7. Imaeda S, Tanaka T, Taniguchi S, Uchiyama E, Matsumoto H, Kim KM, Choki M, Takada R, Morita K, Unyaporn S, Nishino A, Son BK: “Actual conditions of falls in elderly Japanese living in single-family house: A qualitative study.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 孫輔卿: 「テストステロンの抗血管老化作用」, 第16回日本抗加齢医学会, 横浜, 2016. 6. 10–12.
2. 孫輔卿: 「血管石灰化における性差と性ホルモンの作用機序」, 脳心血管抗加齢研究会, 東京, 2016. 12. 17–18.
3. 孫輔卿, 橋詰剛, 小川純人, 秋下雅弘: “Testosterone deficiency proceeds abdominal aortic aneurysm through exuberant inflammation.” 第48回日本動脈硬化学会, 東京, 2016. 7. 14–15.
4. 七尾道子, 孫輔卿, 橋詰剛, 小川純人, 秋下雅弘: 「Ginsenoside Rb1 は血管平滑筋細胞の石灰化をアンドロゲン受容体を介して抑制する」, 第48回日本動脈硬化学会, 東京, 2016. 7. 14–15.
5. 橋詰剛, 孫輔卿, 七尾道子, 小川純人, 秋下雅弘: 「腹部大動脈瘤の形成・進行促進に対する inflammaging の関与—老化促進モデルマウスを用いた検討—」, 第48回日本動脈硬化学会, 東京, 2016. 7. 14–15.
6. 今枝秀二郎, 田中友規, 谷口紗貴子, 金晃敏, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 飯島勝矢, 田中敏明, 大月敏雄, 西出和彦, 大方潤一郎: 「横浜市における高齢者

の転倒事例に基づく地域居住を継続するための環境要因の究明 Environmental factors that the elderly could dwell their residence after fall-related fracture: a qualitative study in Yokohama city」, 第3回日本転倒予防学会, 名古屋, 2016. 10. 2.

7. 田中友規, 今枝秀二郎, 谷口紗貴子, 金晃敏, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎:「都市部・都市郊外部に住む高齢者における転倒状況と関連する内的要因・外的要因の横断的検討 Internal and external factors associated with falls and fall-related fractures in community dwelling elderly population: a cross-sectional study」, 第3回日本転倒予防学会, 名古屋, 2016. 10. 2.

■ 室山良介 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

全て査読有

1. Nakagawa R, Muroyama R, Saeki C, Goto K, Kaise Y, Koike K, Nakano M, Matsubara Y, Takano K, Ito S, Saruta M, Kato N, Zeniya M: “miR-425 regulates inflammatory cytokine production in CD4+ T cells via N-Ras upregulation in primary biliary cholangitis.” Journal of hepatology, 2017 (in press).
2. Goto K, Annan DA, Morita T, Li W, Muroyama R, Matsubara Y, Ito S, Nakagawa R, Tanoue Y, Jinushi M, Kato N: “Novel chemoimmunotherapeutic strategy for hepatocellular carcinoma based on a genome-wide association study.” Scientific reports, 2016;6: 38407.

【国際会議における発表】

全て査読有

1. Morimoto S, Muroyama R, Tanaka Y, Ito S, Nakagawa R, Goto K, Arai J, Kaise Y, Lim LA, Matsubara Y, Kato N: “Chemical compounds that bind to HBx inhibit HBV DNA replication.” 26th Conference of the Asian Pacific Association for the Study of the Liver, Shanghai, China. 2016. 2. 18.
2. Muroyama R, Goto K, Matsubara Y, Nakagawa R, Arai J, Morimoto S, Kaise Y, Ito S, Kato N: “Not wild HBx but fusion HBx translated from HBV integrant dysregulates ER stress response and may contribute to hepatocarcinogenesis.” 2016 International Meeting on Molecular Biology of Hepatitis B Virus, Seoul, Korea, 2016. 9. 23.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 室山良介, 後藤覚, 加藤直也: 「HBV-DNA 組込み由来の Fusion HBx による肝発癌メカニズムとそれに基づく肝発癌抑止戦略」, 第102回日本消化器病学会総会, 東京, 2016. 4. 21. 査読有

■ 福井康貴（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 福井康貴：「入職経路の個人内効果—非正規雇用から正規雇用への転職のパネルデータ分析」, ソシオロジ, 2017;61(3):23-39.
2. 福井康貴：「非正規雇用労働者の入職経路と転職結果—正規転換、賃金、仕事満足度」, 壮年非正規雇用労働者の仕事と生活に関する研究—正社員転換を中心として—（労働政策研究報告書）, 2017;188:61-77.
3. 福井康貴：「勤続年数分布の規定要因の検討—分位点回帰分析によるアプローチ」, 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター編『2016年度参加者公募型二次分析研究会 現代日本の格差と不平等に関するデータの二次分析研究成果報告書, 2017; 219-246.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 福井康貴：「非正規雇用と入職経路—正規雇用への転職のパネルデータ分析」, 第89回日本社会学会大会, 福岡, 2016.

■ 朴孝淑（特任助教）

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文】

1. 池田悠, 金炳学, 朴孝淑, 盧尚憲, 中島弘雅：「再建型倒産手続下における整理解雇の有効性—韓国大法院2判決の紹介と日本法への示唆」, 法律時報, 2016;88(2): 56-78.
2. 朴孝淑：「일본 판례를 중심으로 본 취업규칙 불이익변경 문제（日本の判例を中心にみた就業規則の不利益変更問題）」, 労働法律, 2016;298(3): 64-67.
3. 朴孝淑：「改正高年法上の継続雇用（再雇用）制度をめぐる諸問題について」, 『働き方改革と雇用における参入・展開・退出の法的課題』, 労働問題リサーチセンター, 2016;97-121.
4. 朴孝淑：「日韓の集団的変更法理における合意原則と合理的変更法理」, 日本労働法学会誌, 2016;128:150-163. 査読有

■ 西野亜希子（特任助教）

【著書、編著】

1. 西野亜希子：「住まい手自身も気づくことが難しいニーズを具現化するために 住まい手のちからを引き出す住宅（1章解説）」「「できる」ことをあきらめない、自立生活継続のための住宅改修（1章事例1）」, 日本建築学会編『利用者本位の建築デザイン 事例でわかる住宅・地域施設・病院・学校』, 彰国社, pp8-11, 12-17, 2017. 2
2. (共著) 大月敏雄, 西野亜希子：「第6章個人編 高齢者の住まい」, 東京大学高齢社会総合研究機構（編著）, 『東大がつくった高齢社会の教科書 長寿時代の人生設計と社会創造』東京大学出版会, pp92-114, 2017. 3

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 金晃敏, 西野亜希子, 大月敏雄, 西出和彦:「利用者と事業者間の位置関係からみた訪問・通所介護の日常生活圏域に関する研究その2 サービスの種別から見るサービス利用圏・提供圏の特徴」, 日本建築学会学術講演梗概集, 九州, 2016. 8.
2. 李潤貞, 西野亜希子, 大月敏雄, 西出和彦:「集合住宅団地内の公共空間における住民の居場所形成について ベンチ設置実験からみたベンチの働き方」, 日本建築学会学術講演梗概集, 九州, 2016. 8.
3. 田中友規, 今枝秀二郎, 谷口紗貴子, キムギョンミン, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 飯島勝矢, 田中敏明, 大月敏雄, 西出和彦, 大方潤一郎:「都市部・都市郊外部に住む中高齢者における住居内転倒状況と関連する内的要因・外的要因の検討」, 転倒予防学会, 名古屋, 2016. 10
4. 今枝秀二郎, 田中友規, 谷口紗貴子, キムギョンミン, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 飯島勝矢, 田中敏明, 大月敏雄, 西出和彦, 大方潤一郎:「横浜市における高齢者の転倒事故に基づく地域居住を毛尾続するための環境要因の究明」, 転倒予防学会, 名古屋, 2016. 10

■ 橋詰力 (特任助教)

【学術雑誌等 (紀要・論文集等を含む) に発表した論文】

全て査読有

1. Kuan YC, Hashidume T, Shibata T, Uchida K, Shimizu M, Inoue J, Sato R:“Heat Shock Protein 90 Modulates Lipid Homeostasis by Regulating the Stability and Function of Sterol Regulatory Element-binding Protein (SREBP) and SREBP Cleavage-activating Protein.” J. Biol. Chem., 2017;290, 24021–24035.
2. Inoue J, Ihara Y, Tsukamoto D, Yasumoto K, Hashidume T, Kamimura K, Hirano S, Shimizu M, Kominami R, Sato R:“BCL11B gene heterozygosity causes weight loss accompanied by increased energy consumption, but not defective adipogenesis, in mice.” Biosci Biotechnol Biochem., 2017;81, 922–930.
3. Hashidume T, Kato A, Tanaka T, Miyoshi S, Itoh N, Nakata R, Inoue H, Oikawa A, Nakai Y, Shimizu M, Inoue J, Sato R:“Single ingestion of soy β -conglycinin induces increased postprandial circulating FGF21 levels exerting beneficial health effects.” Sci Rep., 2016;6, 28183.
4. Inoue J, Ihara Y, Tsukamoto D, Yasumoto K, Hashidume T, Kamimura K, Nakai Y, Hirano S, Shimizu M, Kominami R, Sato R:“Identification of BCL11B as a regulator of adipogenesis.” Sci Rep., 2016;6, 32750.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

1. 井上順, 井原悠介, 塚本大介, 安本啓甫, 橋詰力, 中井雄治, 清水誠, 佐藤隆一郎:「抑制性転写因子 BCL11B による脂肪細胞分化および脂肪蓄積制御の解析」, 農芸化学会 2017 年度 (平成 29 年度) 大会, 京都, 2017. 3. 18-20.
2. 眞鍋瑞歩, 橋詰力, 清水誠, 井上順, 佐藤隆一郎:「アミノ酸トランスポーター LAT3, 4 の発現制御機構」, 農芸化学会 2017 年度 (平成 29 年度) 大会, 京都, 2017. 3. 18-20.
3. 橋詰力, 加藤あすか, 三吉翔子, 清水誠, 井上順, 佐藤隆一郎:「大豆タンパク質 β -コングリシニンによる FGF21 を介した抗肥満・脂質異常症改善効果」, 第 37 回日本肥満学会, 東京, 2016. 10. 7-8. 査読有
4. 橋詰力, 三吉翔子, 伊藤信行, 中田理恵子, 井上裕康, 及川彰, 中井雄治, 清水誠, 井上順, 佐藤隆一郎:「大豆タンパク質 β -コングリシニンによる ATF4-FGF21 を介した抗肥満・脂質代謝改善効果」, 日本アミノ酸学会 10 周年記念大会, 東京, 2016. 9. 11-13.

■ 藤崎 (阪井) 万裕

【学術雑誌等 (紀要・論文集等も含む) に発表した論文】

全て査読有

1. 阪井万裕, 成瀬昂, 永田智子:「訪問看護師における職種間連携のしやすさに関連する職場環境要因の明確化」, 保健医療福祉連携, 2016;9(2): 157-165.
2. Mahiro Sakai, Takashi Naruse, Satoko Nagata:“Relational coordination among home healthcare professions and goal attainment in nursing care.” Japan Journal of Nursing Sciences, 2016;13(3): 402-410.
3. Mahiro Sakai, Takashi Naruse, Satoko Nagata:“Relational coordination between professionals predicts satisfaction with home visit nursing care.” Clinical Nursing Studies, 2016;4(1): 1-5.
4. Natsuki Yamamoto, Takashi Naruse, Mahiro Sakai, Satoko Nagata:“The Relationship between Maternal Mindfulness and Anxiety One Month after Childbirth in Japan.” Japan Journal of Nursing Science, DOI:10. 1111/jjns. 12157, 2016.
5. Takashi Naruse, Mahiro Fujisaki-Sakai, Satoko Nagata:“Home visiting nurse service duration and factors related to institution admission.” Home Health Care Management & Practice, 2017;29(1): 46-52.
6. Takashi Naruse, Natsuki Yamamoto, Takashi Sugimoto, Mahiro Fujisaki-Sakai, Satoko Nagata:“Association between nurses’ relational coordination with physicians and clients’ place of death in home visiting nursing facilities.” International Journal of Palliative Nursing, 2017. (in printing)

【学術雑誌等または商業誌における解説、総説】

1. 山本なつ紀, 藤崎万裕:「The 4th International Global Network of Public Health Nursing conference (GNPHN 2016) 参加報告」, 一般社団法人日本公衆衛生看護学会 HP. <http://plaza.umin.ac.jp/~JAPHN/?p=1537>.

【国際会議における発表】

全て査読有

1. Mahiro Fujisaki-Sakai, Takashi Naruse, Satoko Nagata:“Classification of nursing goals for caring clients using home-visit nursing services.” ICCHNR (International Collaboration for Community Health Nursing Research) Symposium 2016, University of Kent, Canterbury, UK, 2016. 9. 15-16.
2. Kyo Takahashi, Tomoki Tanaka, Unyaporn Suthutvoravut, Yasuyo Yoshizawa, Mahiro Fujisaki, Masahiro Akishita, Katsuya Iijima:“Is frailty associated with constipation among community-dwelling older adults?” 2nd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Imaike gas building, Nagoya, Japan, 2016. 11. 4-5.
3. Tomoki Tanaka, Kyo Takahashi, Unyaporn Suthutvoravut, Yasuyo Yoshizawa, Mahiro Fujisaki, Masahiro Akishita, Katsuya Iijima:“Predictive validity of the Kihon Checklist for onset of frailty in Japanese community-dwelling older adults.” 2nd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Nagoya, Japan, 2016. 11. 4-5
4. Nobutada Yokouchi, Fumika Horinuki, Hiroko Okada, Yuka Sumikawa, Makoto Suto, Chie Fukui, Ryogo Ogino, Hyosook Park, Mahiro Fujisaki, Satoko Nagata, Norio Higuchi, Jun Goto:“Practice for supporting the decision-making of the persons with dementia: A field study of ‘Dementia café.’” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 4-5

【国内学会、シンポジウム等における発表】

1. 藤崎 (阪井) 万裕:「訪問看護サービスの利用者毎に受け持ち訪問看護師が評価した, 連携のしやすさと利用者へのケアにおける目標達成度との関連」, 第2回日本混合研究法学会年次大会, 東邦大学, 2016. 8. 27-28.
2. 藤崎万裕:「科学コミュニケーターの現在地 ～科学コミュニケーターの養成のその後は?～」, JASC2015-16 年度第4回定例会, 筑波大学茗荷谷校舎, 2016. 8. 28.
3. 藤崎万裕, 高橋競, 田中友規, Unyaporn Suthutvoravut, 吉澤裕世, 飯島勝矢:「市民フレイル予防サポーターにおける人材育成・指導活動への参加意向と関連要因」, 第3回日本フレイル・サルコペニア研究会研究発表会, 名古屋市, 2016. 11. 6.

4. 吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 藤崎万裕, Suthutvoravut Unyaporn, 飯島勝矢:「生活圏域別におけるフレイル出現および社会資源との関連」, 第3回日本フレイル・サルコペニア研究会研究発表会, 名古屋市, 2016. 11. 6.
5. 永田智子, 蔭山正子, 成瀬昂, 藤崎万裕:「大学院保健師教育における地域診断教育の内容と振り返り」, 第5回日本公衆衛生看護学会学術集会, 宮城県, 2017. 1. 21-22.
6. 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut Unyaporn, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 秋下雅弘, 飯島勝矢:「身体計測を用いたサルコペニア新規発症リスクの簡易評価—千葉県柏市在住高齢者におけるコホート研究より—」, 第32回日本静脈経腸栄養学会学術集会, 岡山市, 2017. 2. 23-24.

2. 受賞歴

■ 菅原育子 (特任講師)

- 「2016年度日本老年社会科学会 奨励賞」

■ 村山洋史 (特任講師)

- 「第23回日本老年医学会優秀論文賞」(谷口優, 清野諭, 藤原佳典, 野藤悠, 西真理子, 村山洋史, 天野秀紀, 松尾恵理, 新開省二:「地域在住高齢者における身体機能・骨格筋量・サルコペニアと認知機能との横断的・縦断的な関連性」)
- 「第75回日本公衆衛生学会総会示説賞」(村山洋史, 田口敦子, 山崎菜穂子, 山口拓洋:「高齢期の食品摂取多様性向上を目指した健康推進員主導型プログラム:交差法による検証」)
- 「第75回日本公衆衛生学会総会示説賞」(山崎菜穂子, 田口敦子, 村山洋史, 山口拓洋:「高齢期の食品摂取多様性向上を目指した健康推進員主導型プログラム:プロセス評価」)

■ 三浦貴大 (特任助教)

- 「情報処理学会 アクセシビリティ研究会 学生奨励賞」(松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東:「視覚障害者のアクセシビリティに配慮した横スクロールアクションゲームの開発」)
- 「ライフサポート学会フロンティア講演会 奨励賞」(曾我晋平, 松尾政輝, 三浦貴大, 坂尻正次, 大西淳児, 小野東:「GoalBaural: ゴールボールにおける音感覚の訓練アプリケーションの開発」)

■ 西野亜希子（特任助教）

- 「2016年日本建築学会奨励賞」（西野亜希子：「退院患者の在宅復帰に求められる住宅改修に関する研究 ある回復期リハビリテーション病院退院患者の事例を通して」）

■ 橋詰力（特任助教）

- 「日本アミノ酸学会10周年記念大会（JSAAS2016）優秀ポスター賞」（橋詰力，三吉翔子，伊藤信行，中田理恵子，井上裕康，及川彰，中井雄治，清水誠，井上順，佐藤隆一郎：「大豆タンパク質 β -コングリシニンによるATF4-FGF21を介した抗肥満・脂質代謝改善効果」）

3. コース生による研究成果

【学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書】

- ・ Doke M, Matsuwaki T, Yamanouchi K, Nishihara M: “Lack of estrogen receptor α in astrocytes of progranulin-deficient mice.” *Journal of Reproduction and Development*, 2016; 62(6): 547–551. [査読有](#)
- ・ Goto T, Nakagami G, Takehara K, Nakamura T, Kawashima M, Tsunemi Y, Sanada H: “Examination of the accuracy of visual inspection for screening tinea pedis and tinea unguium in aged care facility residents.” *Journal of Wound Care*. (In press) [査読有](#)
- ・ Goto T, Tamai N, Nakagami G, Kitamura, Naito A, Hirokawa M, Shimokawa C, Takahashi K, Umemoto J, Sanada H: “Can wound exudate from venous leg ulcers measure wound pain status?: A Pilot Study.” *PLoS One*, 2016;11(12): e0167478. [査読有](#)
- ・ Guo S, Nakagawa Y, Barhoumi A, Wang W, Zhan C, Tong R, Santamaria C, Kohane DS: “Extended release of native drug conjugated in polyketal microparticles.” *Journal of the American Chemical Society*, 2016;138(19): 6127–6130. [査読有](#)
- ・ Ishimaru M, Ono S, Suzuki S, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H: “Artificial nutrition dependence after cetuximab vs. cisplatin combined with radiotherapy for advanced head and neck cancer: A propensity score matched analysis.” *Head Neck*, 2017;39(2): 320–325. [査読有](#)
- ・ Kachi Y, Abe A, Ando E, Kawada T: “Socioeconomic disparities in psychological distress in a nationally representative sample of Japanese adolescents: A time trend study.” *Australian & New Zealand Journal of Psychiatry*, 2017;51(3): 278–286. [査読有](#)

- Kaitoh K, Toyama H, Hashimoto Y, Fujii S: “Design and synthesis of 1, 3, 5-triazine derivatives as novel inverse agonists of nuclear retinoic acid receptor-related orphan receptor- γ .” *Heterocycles*, 2017;95(1): 547. [査読有](#)
- Kanazawa T, Nakagami G, Goto T, Noguchi H, Oe M, Miyagaki T, Hayashi A, Sasaki S, Sanada H: “Use of smartphone attached mobile thermography assessing subclinical inflammation: a pilot study.” *Journal of Wound Care*, 2016;25(4): 177–180, 182. [査読有](#)
- Kaneko G, Shirakami H, Hirano Y, Oba M, Yoshinaga H, Khieokhajonkhet A, Nagasaka R, Kondo H, Ushio H: “Diversity of Lipid Distribution in Fish Skeletal Muscle.” *Zoological Science*, 2016;33(2): 170–178. [査読有](#)
- Kimura T, Yoshie S, Tsuchiya R, Kawagoe S, Hirahara S, Iijima K, Akahoshi T, Tsuji T: “Catheter replacement structure in home medical care settings and regional characteristics in Tokyo and three adjoining prefectures.” *Geriatrics & Gerontology International*, 2017;17(4): 628–636. [査読有](#)
- Morita K, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H: “Association between Nurse Staffing and In-Hospital Bone Fractures: A Retrospective Cohort Study.” *Health Service Research*, 2016;doi:10.1111/1475-6773.12529. [査読有](#)
- Nakajima K, Cui Z, Li C, Meister J, Cui Y, Fu O, Smith AS, Jain S, Lowell BB, Krashes MJ, Wess J: “Gs-coupled GPCR signalling in AgRP neurons triggers sustained increase in food intake.” *Nature communications*, 2016;7:10268. [査読有](#)
- Oichi T, Chikuda H, Ohya J, Ohtomo R, Morita K, Matsui H, Fushimi K, Tanaka S, Yasunaga H: “Mortality and morbidity after spinal surgery in patients with parkinson’s disease: a retrospective matched-pair cohort study.” *The Spine Journal*, 2017;17(4): 531–537. [査読有](#)
- Ono S, Ishimaru M, Yamana H, Morita K, Ono Y, Matsui H, Yasunaga H: “Enhanced Oral Care and Health Outcomes Among Nursing Facility Residents: Analysis Using the National Long-Term Care Database in Japan.” *Journal of the American Medical Directors Association*, 2017;18(3): 277. e271–277. e275. [査読有](#)
- Suzuki K, Yokoyama M, Kionshita Y, Mochizuki T, Yamada T, Sakurai S, Narumi T, Tanikawa T, Hirose M: “Gender-impression modification enhances the effect of mediated social touch between persons of the same gender.” *Augmented Human Research*, 2016;1(1): 2.
- Takanashi S, Sakka M, Sato I, Watanabe S, Tanaka S, Ooshio A, Saito N, Kamibeppu K: “Factor influencing mother-child communication about fathers with neurobehavioural sequelae after brain injury.” *Brain Injury*, 2017;31(3): 312–318.
- Taniguchi S, Hanafusa M, Tsubone H, Takimoto H, Yamanaka D, Kuwahara M, Ito K:

- “Age-dependency of the serum oxidative level in the senescence-accelerated mouse prone 8.” The journal of veterinary medical science, 2016;78(8): 1369-71. [査読有](#)
- [Uchiyama E](#), Takano W, Nakamura Y: “Multi-class grasping classifiers using EEG data and a common spatial filter.” Advanced Robotics, 2017;1-14. [査読有](#)
 - Yagi M, Yasunaga H, Matsui H, [Morita K](#), Fushimi K, Fujimoto M, Koyama T, Fujitani J: “Impact of Rehabilitation on Outcomes in Patients With Ischemic Stroke: A Nationwide Retrospective Cohort Study in Japan.” Stroke, 2017;48(3): 740-746. [査読有](#)
 - [Yamaguchi G](#), Kume T, Mimura H: “A Fundamental Study of Local Electrochemical Nano-processing.” International Journal of Electrical Machining, 2017 (in press). [査読有](#)
 - [Yang N](#), An Q, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H: “Muscle Synergy Structure Using Sifferent Strategies in Human Standing up Motion.” Advanced Robotics, 2017;31(1-2): 40-54. [査読有](#)
 - [Goto T](#), Nakagami G, Tamai N, Kitamura A, Naito A, Hirokawa M, Shimokawa C, Sanada H: “Nerve growth factor in exudate from venous leg ulcers is associated with inflammation along with temperature increase assessed by infrared thermography.” 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌, 2016;20(3): 310-318. [査読有](#)
 - [有田祥馬](#), 檜山敦, 廣瀬通孝: 「高齢者層の多い社会貢献型クラウドソーシングにおける動機付けに関する分析」, VR学会論文誌, 2016;21(2): 251-261. [査読有](#)
 - [岡田宏子](#), 奥原剛: 「乳がん患者のナラティブが受け手の健康行動に与える影響の検討—ディベックスジャパンのインタビューデータを用いて—」, 保健医療社会学論集, 2016;27(1): 12-17. [査読有](#)
 - [小南友里](#), 潮秀樹: 「脂肪酸の味受容メカニズム」 山野善正監修『油脂のおいしさと科学—メカニズムから構造・状態、調理・加工まで』 エヌ・ティー・エス, 2016;3-14.
 - 金宝藍, 山口香苗, [須藤誠](#), 堀本暁洋, 入江優子, 松尾有美, 詹瞻, 松本奈々子: 「2015年社会教育研究の動向」, 社会教育学研究, 2016;52(2): 60-73.
 - 高橋美保, 石黒香苗, 植竹智香, [馬場絢子](#), 島津明人: 「ワークライフバランスとは何か—育児と仕事に携わる人が望むもの—」, 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 2017. (in press)
 - [田中友規](#), 飯島勝矢, 秋下雅弘: 「社会的フレイルという超高齢社会の切り札」, DM Ensemble, 2016;5(3): 9-12.
 - [田中友規](#), 高橋競, 秋下雅弘, 飯島勝矢: 「フレイル予防のための社会参加: 社会的フレイルのインパクト」, Geriatric Medicine, 2017;55(2): 159-163
 - [田中友規](#): 「第38回欧州臨床栄養代謝学会 (ESPEN2016) 参加記」, 日本静脈経腸栄養学会雑誌, 2017;32(1): 1-3.
 - [長谷田真帆](#), 近藤尚己: 「健康格差対策の進め方—医療機関でどう行動するべきか」, 治療,

2017;99(1): 23-37.

- ・ 濱田貴之, 樋野公宏, 浅見泰司:「高齢者の居場所としてのイトインコンビニの利用に関する研究 川崎市登戸での利用実態調査と供給側へのヒアリング調査を通じて」, 日本都市計画学会都市計画報告集, 2016;15:56-61.
- ・ 藤田晃大, 真鍋陸太郎, 村山顕人, 大方潤一郎:「地域サービス機能から見た近年の日本の都市計画論の歴史的な位置づけ」, 日本都市計画学会都市計画報告集, 2016;15:81-86.
- ・ 藤田晃大, 樋野公宏:「よこはまウォーキングポイント事業参加者の地理的分布」, 日本都市計画学会都市計画報告集, 2016;15:93-96.
- ・ 堀抜文香, 山本則子, 野口麻衣子, 山花令子, 高井ゆかり:「終末期ケアにおける血液がん患者への情報提供の実態解明と情報ニーズの検討: 遺族へのインタビュー調査」, 医療の広場, 2016;56(8): 14-17.
- ・ 松田弥花:「スウェーデンの Socialpedagogik 概念にみる教育・福祉・コミュニティの関係性に関する考察」, 社会教育学研究, 2016;52(1): 23-32. 査読有
- ・ 松本博成, 今枝秀二郎, 須藤誠, 内山瑛美子, 「閉じこもり高齢者へのアプローチ: GLAFS 学生はいかなる超高齢社会をつくりたいか」, エルダー, 2016;38(5): 18-19.
- ・ 麦山亮太:「企業間移動がその後の賃金に与える持続的影響——無業経由の有無と男女の違いに着目して」, 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブセンター編『2015年度課題公募型二次分析研究会 パネルデータを活用した就労・家族・意識の関連性についての研究 研究成果報告書』, 2016;41-57.
- ・ 麦山亮太:「結婚は職業キャリアにいかなる影響を与えるのか? ——無業・管理職への移動に関する男女比較分析」, 家族社会学研究, 2016;28(2): 122-135. 査読有
- ・ 森田光治良, 康永秀生, 山名隼人, 野田龍也, 今村知明:「Technology index を用いた病院機能の総合評価」, 病院, 2016;75(7): 527-533. 査読有
- ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章:「都市農業における新規就農者の経営者能力の獲得プロセス——新規参入者と自営就農者の比較研究——」, 日本経済研究, 2016;88(3): 269-274.
- ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章:「都市農業への新規参入者の農地借入に対する支援体制の評価」, 地域学研究, 2017;46(4): 413-426.
- ・ 吉永葉月, 潮秀樹, 佐藤秀一:「魚類の脂質含量を短期間の資料投与で調節する技術——養殖魚の脂の乗りを約1週間でコントロール——」, 月刊アクアネット, 2016;11:54-57.

【国際会議における発表】

- ・ Matsuda Y:“The differences between social pedagogues and Socionoms in Sweden.” The 45th Congress of the Nordic Educational Research Association (NERA), Copenhagen, Denmark, 2017. 3. 23-25.
- ・ Ishii A, Igarashi A, Morita K, Yasunaga H, Takemura Y, Yamamoto-Mitani N:“Status of the number of nursing aids in acute care wards of Japan: A secondary analysis of na-

tional reporting data.” East Asian Forum of Nursing Scholars, Hong Kong, China, 2017. 3. 9–10.

- Kodama Y, Fukahori H, Yamamoto-Mitani N, Ishii A, Tse M: “The relationship between pain prevalence or pain management and gender among Japanese university students.” East Asian Forum of Nursing Scholars, Hong Kong, China, 2017. 3. 9–10.
- Kaneko K, Kishita Y, Umeda Y: “In Pursuit of Personalization Design.” The 24th CIRP Conference on Life Cycle Engineering, Kamakura, Kanagawa, Japan, 2017. 3. 8–10.
- Arita S, Hiyama A, Hirose M: “GBER: A Social Matching App which utilizes Time, Place, and Skills of Workers and Jobs.” The 20th ACM Conference on Computer-Supported cooperative Work and Social Computing (CSCW 2017), Portland, OR, USA, 2017. 2. 25–3. 1.
- Carandang RR, Asis E, Vardeleon KR, Marges MA, Murayama H, Ogino R, Shibamura A, Jimba M: “Project ENGAGE: An action research towards improving the quality of life of seniors living in slums in the Philippines” The 1st International Conference on HealthCare, SDGs and Social Business 2017, Tokyo, Japan, 2017. 2. 21.
- Awashima Y, Komatsu R, Fujii H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H: “Visualization of Obstacles on Bird’s-eye View Using Depth Sensor for Remote Controlled Robot.” Proceedings of the International Workshop on Advanced Image Technology 2017 (IWAIT2017), Penang, Malaysia, 2017. 1. 8–10.
- Sun W, Iwataki S, Komatsu R, Fujii H, Yamashita A, Asama Hajime: “Simultaneous Televisualization of Construction Machine and Environment Using Body Mounted Cameras.” Proceedings of the 2016 IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics (ROBIO2016), Qingdao, China, 2016. 12. 3–7.
- Kameda K, Wakatsuki M, Kuroyanagi K, Iwase F, Shima T, Kondo T, Asai Y, Onodera M, Takase M, Kamezaki N: “Change of population structure, growth and mortality rate of green turtle (*Chelonia mydas*) after the sea turtle fishery decline in Yameyama Islands, Ryukyu Archipelago.” Japan Sea Turtle Symposium 2016, Kochi, Japan, 2016. 12. 10.
- Hirukawa S, Takase M, Tanaka T, Ono S, Sugimoto M, Hashidume T, Kimata M, Murayama H: “Dining style of assisted living facility residents: Are they satisfied with their dining?” The 69th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America (GSA), New Orleans, LA, USA, 2016. 11. 16–20.
- Horinuki F, Sumikawa Y, Sugimoto M, Tsuchiya R, Ogino R, Park H, Mikoshiba N, Nagata S: “Factor of Facilitation for Using Tool of Advance Directive: Evaluation from Elderly Perspective.” The 69th Annual Scientific Meeting of the Gerontological Society of

America (GSA), New Orleans, LA, USA, 2016. 11. 16–20.

- Yamamoto-Mitani N, Takai Y, Saito Y, Igarashi A, Ishii A, Jojima H, Futami A, Nakano H: “Case Conference as a Tool for Elder Abuse Prevention: A Facility-University Joint Project.” The 69th Annual Scientific Meeting of Geological Society of America (GSA), New Orleans, LA, USA, 2016. 11. 16–20.
- Yamaguchi G, Kume T, Mimura H: “Fundamental Study on Local Nano-processing by Potential Control in Acidic Solutions.” The 16th International Conference on Precision Engineering, Hamamatsu, Shizuoka, Japan, 2016. 11. 14–16.
- Ito K, Taniguchi S, Hanafusa M, Tsubone H, Yamanaka D, Kuwahara M: “Vanillin protects the hippocampal neuronal function from age-related deterioration.” 46th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, San Diego, CA, USA, 2016. 11. 12–16.
- Taniguchi S, Takimoto H, Hanafusa M, Tsubone H, Yamanaka D, Kuwahara M, Ito K: “Acetyl-L-carnitine improves age-dependent impairment of LTP of the senescence-accelerated mouse prone 8.” 46th Annual Meeting of the Society for Neuroscience, San Diego, CA, USA, 2016. 11. 12–16.
- Choki M, Nishino A, Nishide K: “Requirements for Rebuilding an Apartment Complex While Maintaining the Living Environment for the Local Elderly.” The 7th APRU Ageing in the Asia-Pacific Research Symposium, Beijing, China, 2016. 11. 6–8.
- Zhang M: “Focus Control Simulation Study of None-invasive High-Intensity Focused Ultrasound Cancer Treatment.” The 7th APRU Research Symposium on Ageing in the Asia-Pacific, Beijing, China, 2016. 11. 6–8.
- Takahashi K, Tanaka T, Suthutvoravut U, Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K: “Is frailty associated with constipation among community-dwelling older adults?” 2nd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia. Nagoya, Japan, 2016. 11. 4–5.
- Tanaka T, Takahashi K, Suthutvoravut U, Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K: “Predictive validity of the Kihon Checklist for onset of frailty in Japanese community-dwelling older adults.” 2nd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia, Nagoya, Japan, 2016. 11. 4–5.
- Tanaka T, Takahashi K, Hirano H, Kikutani T, Ohara Y, Furuya H, Tetsuo T, Akishita M, Iijima K: “Oral frailty as the risk factor of sarcopenia, frailty and all-cause mortality: From KASHIWA Japanese community-dwelling elderly cohort study.” 2nd Asian Conference for Frailty and Sarcopenia. Nagoya, Japan, 2016. 11. 4–5.
- Suthutvoravut U, Tanaka T, Takahashi K, Yoshizawa Y, Fujisaki M, Akishita M, Iijima K: “Impact of Slow Eating Speed by self-report on frailty in Japanese community-dwelling elderly: from KASHIWA longitudinal cohort study.” 2nd Asian Conference for Frail-

ty and Sarcopenia, Nagoya, Japan, 2016. 11. 4–5.

- Baba A, Fujita A, Ando E, Sakka M, Haseda M, Hwang E, Mugiyama R, Wang T, Yoshino T, Yamaguchi G, Kyuwon K, Ishimaru M, Fukui Y, Kimata M, Sugawara I: “Appropriate Allocation of Long Term Care Insurance (LTCI) Services for Home Care.-Inquiries about the combination of services and related factors.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Carandang RR, Asis E, Vardeleon KR, Marges MA, Murayama H, Ogino R, Shibanuma A, Jimba M: “Senior Leaders in Action: The development of life-long learning program for urban-dwelling seniors in the Philippines.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Fu O, Kaito K, Suthutvoravut U, Hirukawa S, Tanaka T, Takase M, Hashidume T, Kimata M, Murayama H: “Dining style and resident’s meal satisfaction in senior care facility.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Fujiwara A: “Dietary fiber intake and the sources in the current Japanese diet.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Fukui C, Sakka M, Sato I, Kamibeppu K: “Factors associated to family conflict for family caregivers of people with dementia in long-term care facilities.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Goto T, Nakagami G, Minematsu T, Shinoda M, Sanada H: “Identifying a wound pain biomarker for non-communicative patients: applicability test of a pain evaluation method for rat wound model.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Hirukawa S: “Vaccine Strategy for the Elderly.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Horinuki F, Yamamoto-Mitani N: “Improving healthcare professionals’ communication for supporting cancer patient.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Imaeda S: “Mechanism of Falls in the Elderly Related with Architectural Factors: A Qualitative Study.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Imaeda S, Tanaka T, Taniguchi S, Uchiyama E, Matsumoto H, Kim K, Choki M, Takada R, Morita K, Suthutvoravut U, Nishino A, Son B: “Actual Conditions of Falls in Elderly Japanese Living in Single-Family House: A Qualitative Study.” The 3rd IARU Aging,

Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.

- Ishii A, Yamamoto-Mitani N:“Effects of nursing aid use on patients’ fall and nurses’ overtime hours in Japanese acute care wards: A nationwide survey.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
- Ishimaru M, Ono S, Matsui H, Yasunaga H:“Association between perioperative oral care and postoperative complications: a high-dimensional propensity score matched analysis.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
- Kaneko K:“Proposal of the Representation Scheme of Personal Situation for Personalization Design.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-4.
- Kaneko K, Hamada T, Yoshida S, Kikuoka S, Hyewon J, Doke M, Suto M, Matsuda Y, Komazawa Y, Miyabe T, Fujiwara A, Suthutvoravut U, Carandang RR, Anekawa M, Kurata Y, Ogino R, Kimata M, Miura T, Goto J:“Development of Programs and Facilitation Techniques to Build a Community of Healthy Elderly.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
- Kim K:“Geographical Factors in Siting Providers and Users of Home-visit and Day-care Services:Focusing on Service Area of the Facility Type.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
- Komatsu R, Shinozaki N, Nukina S, Moriizumi H, Yasuhara A, Yang N, Zhang M, Kaneko K, Kubota A, Nakagawa Y, Ali ZS, Yoshinaga H, Doke M, Goto T, Krishant C, Ishii A, Sumikawa Y, Tsuruta Y, Okatani T, Kinoshita Y, Suzuki K, Arita S, Kominami Y, Tsuchiya R, Miura T, Nishino A, Hiyama A, Iijima K, Tanaka T, Okata J:“Needs Assessments of Support Robots for Seniors with Mild Physical and Cognitive Impairment.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
- Komatsu R:“Free Viewpoint Image Generation for Robot Teleoperation in Indoor Environments Using Body Mounted Cameras and a Laser Rangefinder.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
- Kubota A:“Age and socioeconomic variations in the pattern of long-term functional decline among older Japanese.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo Japan, 2016. 11. 3-5.
- Moriizumi H, Takanori N, Mutsuhiro T:“Functional analysis of feedback-phosphorylation of MKK4 by MAPKs.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.

- Morita K, Ono S, Yasunaga H: “Association between dementia and reduction in discharge to home in nursing home residents: A retrospective cohort study using a nationwide elderly care insurance claim database in Japan.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Mugiyama R: “Cumulative Disadvantage Process in Japan: Does Employment and Marital History Affect Income and Wealth Inequality among Elderly People?” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Nakagawa Y: “Development of Smart Hydrogel Materials Applicable for 3D Tissue Construction via Bioprinting.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Sakka M: “The difference of demographic and psychological characteristics between working and non-working caregiver for an elderly person with dementia.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Satomi N, Tutor: Noriko. Y: “Self-management interventions to prevent exacerbations of Chronic Obstructive Pulmonary Disease and improve patients’ quality of life: the role of home-care nursing in community-based care (Research Thesis).” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Shinozaki N: “Dietary phosphorus intakes estimated by two 24-hour urine collections and by 4-day dietary records and their associated factors in Japanese adults.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Suto M: “Rethinking the Role of Social Education and Lifelong Learning in Aged Society.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Takase M: “Deciphering phytosterol metabolism of fish: aspiring cost effective aquaculture and functional food for healthy society.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Taniguchi S, Ito K: “The analysis of the hippocampal synaptic function of the senescence-accelerated mouse prone 8.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Uchiyama E, Takano W, Nakamura Y: “Developing frailty evaluation system to prevent falls in daily lives from human motion: Preliminary examinations.” The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3–5.
- Yasuhara A, Yamayoshi S, Ito M, Uraki R, Nakatsu S, Oishi K, Soni P, Takenaga T,

- Kawakami C, Takashita E, Sasaki T, Ikuta K, Yamada S, Kawaoka Y: "Characterization of the antigenic properties of influenza A (H1N1) pdm09 virus." The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
- Yokouchi N, Horinuki F, Okada H, Sumikawa Y, Suto M, Fukui C, Ogino R, Park H, Fujisaki M, Nagata S, Higuchi N, Goto J: "Practice for supporting the decision-making of the persons with dementia: A field study of "Dementia cafe"." The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
 - Yoshinaga H: "Studies on fish lipid metabolism with future perspective of developing novel technology for controlling fish meat texture." The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
 - Zhang M: "Simulation study of Focus-related issues for HIFU cancer treatment." The 3rd IARU Aging, Longevity and Health Graduate Student Conference, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3-5.
 - Mugiyama R: "The Effects of Non-employment at Labor Market Entry upon Subsequent Employment Instability in Japan." 2016 UT-SNU Joint Sociological Forum, Tokyo, Japan, 2016. 11. 3.
 - Sumikawa Y, Kawakami A, Teramoto C, Iizaka S, Kageyama M, Naruse T, Nagata S: "Can the Minnesota Intervention Wheel explain public health nursing practices in Japan?" APHA 2016, Denver, CO, USA, 2016. 10. 29-11. 2.
 - Nakagawa Y, Ohta S, Ito T: "Totally Synthetic Hydrogels Cross-linked with Metallic Ions." The 22nd Symposium of Young Asian Biological Engineers' Community (YABEC2016), Miyazaki, Japan, 2016. 10. 27-29.
 - Miura T, Goto T, Kaneko K, Sumikawa Y, Ishii A, Doke M, Suzuki K, Okatani T, Kubota A: "Need and impressions of communication robots for seniors with slight physical and cognitive disabilities: Evaluation using system usability scale." IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics 2016 (SMC 2016), Budapest, Hungary, 2016. 10. 9-12.
 - Miki K, Nakamura S, Sado K, Iwashima F, Takagawa H, Masamune K: "Parameter Evaluation of a Bone Marrow Harvesting Device for Minimally Invasive Bone Marrow Transplantation." 28 th International Conference of the international Society for Medical Innovation and Technology (iSMIT), Rotterdam, Netherlands, 2016. 10. 5-8.
 - Iijima K, Tanaka T, Takahashi K, Akishita M: "Comprehensively preventive approach against multi-dimensional frailty in the elderly: Impact of social engagement." The 12th Congress of the European Union Geriatric Medicine Society (EUGMS). Lisbon, Portugal, 2016. 10. 5-7.

- Goto T, Nakagami G, Minematsu T, Shinoda M, Sanada H: “Establishment of a mechanical sensitivity measurement method for full-thickness cutaneous wounds made in the dorsal area in rats: a pilot study.” The 16th World Congress on Pain, Kanagawa, Japan, 2016. 9. 26–30.
- Goto T, Nakagami G, Kanazawa T, Minematsu T, Sanada H: “Effects of acylated homoserine lactone family members on late stage full thickness cutaneous wounds in diabetic model rat.” 5th Congress of WUWHS, Florence, Italy, 2016. 9. 25–29.
- Minematsu T, Nakagami G, Kitamura A, Goto T, Sanada H: “Evaluation of skin-barrier function by skin blotting.” 5th Congress of WUWHS. Florence, Italy, 2016. 9. 25–29.
- Horinuki F, Sumikawa Y, Sugimoto M, Tsuchiya R, Ogino R, Park H, Mikoshiba N, Nagata S: “Factor of Facilitation Using Tool of Advance Directive: Evaluation from Elderly Perspective.” GSA 2016, Denver, CO, USA, 2016. 9. 25–28.
- Tanaka T, Takahashi K, Akishita M, Iijima K: “AA structural model of preventing sarcopenia among community-dwelling older adults in Japan: Kashiwa study.” 38th European Society for Clinical Nutrition and Metabolism (ESPEN) Congress, Copenhagen, Denmark, 2016. 9. 17–20.
- Ando E, Nomura T, Aida J, Hikichi H, Inoue K, Hosaka Y, Tabata T, Kondo K, Kawachi I: “Association of dog ownership with cognitive decline among community-dwelling older residents in Japan: longitudinal analysis.” The 48th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference, Tokyo, Japan, 2016. 9. 16–19.
- Yasuhara A, Yamayoshi S, Ito M, Uraki R, Nakatsu S, Oishi K, Soni P, Takenaga T, Kawakami C, Takashita E, Sasaki T, Ikuta K, Yamada S, Kawaoka Y: “Characterization of the antigenic properties of influenza A (H1N1) pdm09 virus.” The Options IX for the Control of Influenza, Chicago, IL, USA, 2016. 8. 24–28.
- Carandang RR, Takada K, Matsunaga S: “Studies on bioactive compounds isolated from marine-derived Streptomyces A232.” Symposium of Natural Products Chemistry, Manila, Philippines, 2016. 8.
- Baba A, Takahashi M: “Examining Mental Strain of Group Home Care Providers in Working with People with Mental Disorders.” 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan, 2016. 7. 24–29.
- Honda C, Yamamoto N, Tsuchiya R, Kawakami A, Nagata S: “Home safety practices and its association with children’s daily routines: A cross-sectional study.” The 3rd Korea-Japan Joint Conference on Community Health Nursing, Busan, Korea, 2016. 7. 1–3.
- Yamana H, Kodan M, Morita K, Matsui H, Fushimi K, Imamura T, Yasunaga H: “Quality indicator reporting and improvement in quality of care of stroke patients.” The 2016

Academy Health Annual Research Meeting, Boston, MA, USA, 2016. 6. 26–28.

- Horinuki F, Noguchi-Watanabe M, Takai Y, Yamahana R, Yamamoto-Mitani N, Ohno N, Okada S, Mori S: “The experience of patients with hematological malignancy in communicating with healthcare professionals.” Annual Meeting on Supportive Care in Cancer, Adelaide, Australia, 2016. 6. 23–25.
- Arita S, Hiyama A, Hirose M: “Senior-Oriented On-Demand Economy: Locality, Matching, and Scheduling are the Keys to Success.” 10th International Conference on Universal Access in Human-Computer Interaction, Toronto, Canada, 2016. 6. 17–22.
- Kinoshita Y, Yokoyama M, Suzuki K, Mochizuki T, Yamada T, Sakurai S, Narumi T, Tanikawa T, Hirose M: “Transcendent telepresence: tele-communication better than face to face interaction.” 4th International Conference on Distributed, Ambient, and Pervasive Interactions, Toronto, Canada, 2016. 6. 17–22.
- Miura T, Arita S, Hiyama A, Kobayashi M, Itoko T, Sawamura J, Hirose M: “Work Motivating Factors of the Communications in a Crowd-Powered Micro-volunteering Site.” 10th International Conference on Universal Access in Human-Computer Interaction, Toronto, Canada, 2016. 6. 17–22.
- Fu O, Narukawa M, Misaka T, Nakajima K: “Effects of AgRP neuron-derived neuropeptides on high-fat/high-sugar diet selection in mice.” 17th International Symposium on Olfaction and Taste, Tokyo, Japan, 2016. 6. 5–9.
- Nakagawa Y, Amano Y, Ohta S, Ito T: “Ionically cross-linked star block copolymer gel with high biocompatibility.” 10th World Biomaterials Congress (WBC2016), Montréal, Canada, 2016. 5. 17–22.
- Yang N, An Q, Yamakawa H, Tamura Y, Yamashita A, Asama H: “Muscle Synergy Analysis in Human Standing-up Motion Using Different Strategies.” Proceedings of the International Symposium on Embodied-Brain Systems Science (EmboSS 2016), Tokyo, Japan, 2016. 5. 8–9.
- Yasuhara A, Yamayoshi S, Ito M, Uraki R, Nakatsu S, Oishi K, Soni P, Takenaga T, Kawakami C, Takashita E, Sasaki T, Ikuta K, Yamada S, Kawaoka Y: “Characterization of the antigenic properties of influenza A (H1N1) pdm09 virus.” 6th NSV-J, Okinawa, Japan, 2016. 1. 16–18.

【国内学会・シンポジウム等における発表】

- 小南友里, 潮秀樹: 「大気暴露下におけるマアジ *Trachurus japonicus* 骨格筋組織の遺伝子発現動態」, 平成 29 年度日本水産学会春季大会, 東京, 2017. 3. 26–30.
- 中溝量子, 小南友里, 三根健太郎, 中谷操子, 岡田茂, 松岡洋子, 植木暢彦, 万建栄, 渡部終五, 潮秀樹: 「ギス肉の加熱ゲル形成と戻りについてⅣ」, 平成 29 年度日本水産学会春季大会,

東京, 2017. 3. 26-30.

- ・ 蛭川沙也加, 三室仁美:「The effect of anaerobic cultures of Helicobacter pylori on immune system and prophylactic vaccine」, 第 90 回日本細菌学会総会, 仙台, 2017. 3. 19-21.
- ・ 小南友里, 林達也, 時弘哲治, 潮秀樹:「大気暴露時のマアジ Trachurus japonicus 骨格筋におけるタンパク質分解動態」, 2017 年度日本農芸化学学会大会, 京都, 2017. 3. 17-20.
- ・ 中溝量子, 小南友里, 三根健太郎, 中谷操子, 岡田茂, 松岡洋子, 植木暢彦, 万建栄, 渡部終五, 潮秀樹:「ギス肉加熱ゲルにおける戻りとミオシン重鎖の分解動態について」, 2017 年度日本農芸化学学会大会, 京都, 2017. 3. 17-20.
- ・ 傅欧, 岩井優, 三坂巧, 中島健一郎:「AgRP 神経回路の活動が味覚感受性に与える影響の解析」, 日本農芸化学学会 2017 年度大会, 京都, 2017. 3. 17-20.
- ・ 吉永葉月, 潮秀樹, 高橋伸一郎, 芳賀穰, 佐藤秀一:「リジン欠乏資料を用いた魚類筋肉における n-3 系脂肪酸の効率的な蓄積技術 (Accumulation of n-3 fatty acids in fish muscle by lysine-deficient diet feeding)」, 日本農芸化学学会 2017 年度大会, 京都, 2017. 3. 17-20.
- ・ 麦山亮太:「地位へのマッチングからみる賃金格差の生成過程——正規雇用／非正規雇用を事例として」, 第 63 回数理社会学会大会, 吹田, 2017. 3. 14-15.
- ・ 山口豪太, 久米健大, 三村秀和:「銅電析による高精度電鍍法の開発」, 2017 年度精密工学会春季大会学術講演会, 横浜, 2017. 3. 13-15.
- ・ 森田光治良, 山名隼人, 松居宏樹, 伏見清秀, 康永秀生:「ICU で人工呼吸管理を必要とする患者における 30 日死亡と認定・専門看護師の関連」, 第 44 回日本集中治療医学会学術集会, 札幌, 2017. 3. 9-11.
- ・ 麦山亮太:「無業経験を通じた格差の生成——所得・賃金への持続的効果に着目して」, 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター 2016 年度二次分析研究会課題公募型研究「就労・家族・意識の変化に関するパネルデータ分析」成果報告会, 東京, 2017. 3.
- ・ 高瀬麻以, 阿部浩子, 上坂英二, 工藤正美, 丸山道夫:「西東京市田無病院、回復期リハビリテーション病棟入院患者の摂取タンパク質量と FIM 運動の関連」, 第 32 回日本静脈経腸栄養学会, 岡山, 2017. 2. 23-24.
- ・ 田中友規, 高橋競, Suthutvoravut U, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 秋下雅弘, 飯島勝矢:「身体計測を用いたサルコペニア新規発症リスクの簡易評価——千葉県柏市在住高齢者におけるコホート研究より——」, 第 32 回日本静脈経腸栄養学会学術集会, 名古屋, 2017. 2. 23-24.
- ・ 福井千絵, 目麻里子, 近藤和子, 上別府圭子:「看取りに焦点を当てた在宅医療の勉強会における一般市民および医療・福祉関係者への影響」, 第 24 回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会, 久留米, 2017. 2. 4-5.
- ・ 麦山亮太:「地位へのマッチングからみる賃金格差の生成過程——企業規模と雇用形態に着目して」, 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター 2016 年度二

次分析研究会参加者公募型研究「現代日本の不平等構造に関する二次分析」成果報告会，東京，2017. 2.

- ・ 安藤絵美子，可知悠子，奥原剛，雑賀智也，川上憲人：「なぜ非正規雇用労働者の健診未受診率は高いのか？：平成 25 年国民生活基礎調査より」，第 27 回日本疫学会総会，甲府，2017. 1. 25-27.
- ・ 齋藤順子，近藤尚己，斉藤雅茂，谷友香子，長谷田真帆，田淵貴大，近藤克則：「高齢者における要介護状態の変化パターンと閉じこもりとの関連：JAGES コホート研究」，第 27 回日本疫学会総会，甲府，2017. 1. 25-27.
- ・ 山口豪太，久米健大，三村秀和：「回転楕円ミラーの作製のための高精度電鍍法の開発」，第 30 回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム，神戸，2017. 1. 7-9.
- ・ 粟島靖之，小松廉，藤井浩光，田村雄介，山下淳，浅間一：「ロボット遠隔操作のための 3 次元測域センサを用いた俯瞰映像上での障害物提示」，第 17 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会講演論文集（SI2016），札幌，2016. 12. 15-17.
- ・ 小松廉，藤井浩光，田村雄介，山下淳，浅間一：「複数台のカメラとレーザ測域センサによる人工物の幾何情報を考慮した任意視点映像生成」，第 17 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会講演論文集（SI2016），札幌，2016. 12. 15-17.
- ・ Goto T，Nakagami G，Minematsu T，Shinoda M，Sanada H：“Effects of morphine hydrochloride and λ -carrageenan on full-thickness cutaneous wound healing in rats.” The 46th Annual Meeting of Japanese Society for Wound Healing, Tokyo, 2016. 12. 9-10.
- ・ 藤田晃大，樋野公宏：「よこはまウォーキングポイント事業参加者の地理的分布」，第 51 回日本都市計画学会都市計画報告会，東京，2016. 11. 12-13.
- ・ 五十嵐歩，松本博成，青木伸吾，油山敬子，安井英人，鈴木美穂，村田聡，佐瀬満雄，濱田貴之，山本則子：「高齢者支援におけるコンビニエンスストアとの協働モデルの構築：地域包括ケアにおける age-friendly community を目指した community-based participatory research」，日本情報処理学会 第 6 回高齢社会デザイン研究会，東京，2016. 11. 12.
- ・ 張明禛，東隆，沖田浩平，高木周，松本洋一郎：「HIFU phase control simulation based on patient medical image with temperature dependency of sound speed during heating」，15th JSTU, Tokyo, 2016. 11. 12.
- ・ 藤崎万裕，高橋競，田中友規，Suthutvoravut U，吉澤裕世，飯島勝矢：「市民フレイル予防サポーターにおける人材育成・指導活動への参加意向と関連要因」，第 3 回日本フレイルサルコペニア研究会，名古屋，2016. 11. 6.
- ・ 吉澤裕世，田中友規，高橋競，藤崎万裕，Suthutvoravut U，飯島勝矢：「活圏域別におけるフレイル出現および社会資源との関連」，第 3 回日本フレイルサルコペニア研究会，名古屋，2016. 11. 6.
- ・ 石丸美穂，大野幸子，松居宏樹，康永秀生，小池創一：「診療科別歯科医師の地域偏在一医

- 師・歯科医師・薬剤師調査データを用いた分析」, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
- ・ 長谷田真帆, 近藤尚己, 高木大資, 近藤克則:「データ活用と部署間連携に関する自治体職員支援の効果検証: JAGES 自治体担当者調査より」, 第 75 回日本公衆衛生学会総会, 大阪, 2016. 10. 26-28.
 - ・ 前田史雄, 廣畑吉崇, 有井潤, 加藤哲久, 川口寧:「HSV-1 UL34 is required for proper targeting of viral and cellular regulators for viral de-envelopment at the nuclear membrane」, 第 64 回日本ウイルス学会学術集会, 札幌, 2016. 10. 23-25.
 - ・ Yasuhara A, Yamayoshi S, Ito M, Uraki R, Nakatsu S, Oishi K, Soni P, Takenaga T, Kawakami C, Takashita E, Sasaki T, Ikuta K, Yamada S, Kawaoka Yoshihiro:“Characterization of the antigenic properties of influenza A (H1N1) pdm09 virus.” 第 64 回日本ウイルス学会学術集会, Sapporo, 2016. 10. 23-25.
 - ・ 金子和樹, 木下裕介, 梅田靖:「時間変化に伴う製品・サービスの個人化についての一考察」, 日本機械学会 第 26 回設計工学・システム部門講演会, 横浜, 2016. 10. 8-10.
 - ・ Moriizumi H, Takanori N, Mutsuhiro T:“Functional analysis of feedback-phosphorylation of MKK4 by MAPKs.” The 75th Annual Meeting of the Japanese Cancer Association, Yokohama, Japan, 2016. 10. 6-8.
 - ・ 田中友規, 今枝秀二郎, 谷口紗貴子, 金晃敏, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 大月敏雄, 西出和彦, 田中敏明, 飯島勝矢, 大方潤一郎:「都市部・都市郊外部に住む中高齢者における住居内転倒状況と関連する内的要因・外的要因の検討」, 第 3 回日本転倒予防学会学術集会, 名古屋, 2016. 10. 2.
 - ・ 今枝秀二郎, 田中友規, 谷口紗貴子, 金晃敏, 松本博成, 内山瑛美子, 西野亜希子, 孫輔卿, 三浦貴大, 飯島勝矢, 田中敏明, 大月敏雄, 西出和彦, 大方潤一郎:「横浜市における高齢者の転倒事例報告と地域居住を継続可能とする環境要因について」, 第 3 回日本転倒予防学会学術集会, 名古屋, 2016. 10. 2.
 - ・ 角川由香:「『時々入院、ほぼ在宅』に向けて～急性期病院に入院した高齢者に対する退院支援を通しての一考察～」, 第 23 回多文化間精神医学会学術総会, 宇都宮, 2016. 10. 1-10. 2
 - ・ 王天天:「転換期中国都市における郊外の形成と住民ライフコース—北京市回龍観住宅団地の事例—」, 日本地理学会 2016 年秋季学術大会, 仙台, 2016. 9. 30-10. 2.
 - ・ 松田弥花:「スウェーデンにおける Socialpedagogik の歴史的 개념に関する研究—1900~1930 年代を中心に—」, 日本社会教育学会第 63 回研究大会, 弘前, 2016. 9. 16-18.
 - ・ 吉田真悟, 八木洋憲, 木南章:「都市農業経営における経営管理能力と経営戦略が経営成果に与える影響—東京都と横浜市の新規参入者および自営就農者に対する比較分析」, 平成 28 年度日本農業経営学会研究大会, 京都, 2016. 9. 15-18.
 - ・ 有田祥馬, 檜山敦, 廣瀬通孝:「GBER: 元気高齢者の地域活動をサポートするウェブプラットフォーム

- フォーム」, 第 21 回日本バーチャルリアリティ学会大会, つくば, 2016. 9. 14-16.
- ・ 木下由貴, 横山正典, 鈴木啓太, 望月崇由, 山田智広, 櫻井翔, 鳴海拓志, 谷川智洋, 廣瀬通孝:「テレプレゼンスアバターにおける眼球の凹凸による視線の印象向上効果の検証」, 第 21 回日本バーチャルリアリティ学会大会, つくば, 2016. 9. 14-16.
 - ・ 鈴木啓太, 横山正典, 吉田成朗, 木下由貴, 望月崇由, 山田智広, 櫻井翔, 鳴海拓志, 谷川智洋, 廣瀬通孝:「同調的な表情変形技術を用いたコミュニケーション拡張に関する提案」, 第 21 回日本バーチャルリアリティ学会大会, つくば, 2016. 9. 14-16.
 - ・ 道家未央, 松脇貴志, 山内啓太郎, 西原真杉:「プログラニューリンによるアストロサイト特異的なエストロゲン受容体の発現調節」, 相模原, 第 109 回日本繁殖生物学会大会, 2016. 9. 11-15.
 - ・ 麦山亮太:「職業経歴が結婚への移行に与える影響」, 第 26 回日本家族社会学会大会, 東京, 2016. 9. 10-11.
 - ・ 岡田宏子, 奥原剛, 石川ひろの, 木内貴弘:「乳がん患者のナラティブが受け手の健康行動に与える影響の検討—ディベックスジャパンのインタビューデータを用いて—」, 第 8 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会, 東京, 2016. 9. 10.
 - ・ 谷口紗貴子, 桑原正貴, 伊藤公一:「N-Acetyl-D-Mannosamine の長期投与が海馬シナプス長期増強に及ぼす影響」, 第 11 回遺伝子栄養学研究会学術集会, 北広島, 2016. 9. 9.
 - ・ 小南友里, 潮秀樹:「大気暴露によって生じるマアジ *Trachurus japonicus* 骨格筋におけるタンパク質リン酸化動態の変化」, 平成 28 年度日本水産学会秋季大会, 奈良, 2016. 9. 8-11.
 - ・ 中溝量子, 小南友里, 三根健太郎, 中谷操子, 岡田茂, 松岡洋子, 植木暢彦, 万建栄, 渡部終五, 潮秀樹:「ギス肉の加熱ゲル形成と戻りについてⅢ」, 平成 28 年度日本水産学会秋季大会, 奈良, 2016. 9. 8-11.
 - ・ 内山瑛美子, 高野渉, 中村仁彦:「脳波情報から抽出した特徴量からの K-means 法を用いた把持パターンのクラスタリング」, 第 34 回日本ロボット学会学術講演会, 山形, 2016. 9. 7-9.
 - ・ 藤原綾, 政安静子, 佐々木敏:「現代の日本人成人における食物繊維の摂取量と摂取源」, 第 63 回日本栄養改善学会, 青森, 2016. 9. 7-9.
 - ・ 谷口紗貴子, 山中大介, 伊藤公一, 桑原正貴:「海馬 CA1 シナプス活動に与えるバニリンの効果に関する検討」, 第 159 回日本獣医学会学術集会, 藤沢, 2016. 9. 6-8.
 - ・ 中川慶之, 太田誠一, 伊藤大知:「鉄イオンによる in situ 架橋が可能なスターブロックコポリマーゲルの開発」, 化学工学会第 48 回秋季大会, 徳島, 2016. 9. 6-8.
 - ・ 山口豪太, 久米健大, 三村秀和:「常温 Ni 電鍍におけるパルス電析条件の検討」, 2016 年度精密工学会秋季大会学術講演会, 茨城, 2016. 9. 6-8.
 - ・ 前田史雄, 廣畑吉崇, 有井潤, 加藤哲久, 川口寧:「単純ヘルペスウイルス 1 型による小胞体の形態制御」, 第 13 回ウイルス学キャンプ, 熱海, 2016. 8. 30-31.
 - ・ 福井千絵, 目麻里子, 佐藤伊織, 上別府圭子:「介護施設に入居している認知症をもつ人の家族介護者が認識する家族内の意見の相違に影響する要因:質的研究」, 日本家族看護学会第 23

回学術総会, 山形, 2016. 8. 27-28.

- ・ 麦山亮太:「入職時の失業経験が初期キャリアの不安定性に与える影響」, 第 62 回数理社会学会大会, 金沢, 2016. 8. 27-28.
- ・ 麦山亮太, 西澤和也:「新卒採用情報サイトにみる採用基準の異質性」, 第 62 回数理社会学会大会, 金沢, 2016. 8. 27-28.
- ・ 今枝秀二郎, 西出和彦:「医療におけるトリアージのまとめと分類に関する研究: 震災時の災害医療から通常の救急医療まで」, 2016 年度日本建築学会大会, 福岡, 2016. 8. 24-26.
- ・ 金晃敏, 西野亜希子, 大月敏雄, 西出和彦:「利用者と事業所間の位置関係から見た訪問・通所介護の日常生活圏域に関する研究 その 2 サービスの種別から見るサービス利用圏・提供圏の特徴」, 2016 年度日本建築学会大会, 福岡, 2016. 8. 24-26.
- ・ 松田武雄, 松田弥花:「スウェーデンにおけるヘムゴードの考察—社会教育福祉論と Social Pedagogy の視点から—」, 日本教育学会第 75 回研究大会, 札幌, 2016. 8. 23-25.
- ・ 松本佳子, 吉江悟, 土屋瑠見子, 川越正平, 平原佐斗司, 山中崇, 飯島勝矢, 辻哲夫:「在宅医療多職種連携研修会受講者の在宅医療への意識および連携活動の変化: 職種別の検討」, 第 18 回在宅医学会大会, 東京, 2016. 7. 16-17.
- ・ 高橋美保, 馬場絢子:「マインドフルネスが高齢者の Well-being に及ぼす影響—社会的接触(互助)とセルフヘルプ(自助)の検討—」, 日本コミュニティ心理学会第 19 回大会, 宇都宮, 2016. 6. 25-26.
- ・ 前田史雄, 廣畑吉崇, 有井潤, 加藤哲久, 川口寧:「HSV-1 UL34 による小胞媒介性核外輸送関連タンパク質の局在制御」, 第 31 回ヘルペスウイルス研究会, 東京, 2016. 6. 15-17.
- ・ 金澤寿樹, 峰松健夫, 仲上豪二郎, 北村言, 後藤大地, 木村奈緒, 麦田裕子, 真田弘美:「創面プロットティング法を用いた HSP90 α 検出による創部への圧力負荷同定」, 第 25 回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会, 金沢, 2016. 6. 11-12.
- ・ 内山瑛美子, 前川知行, 草島育生, 高野渉, 中村仁彦:「カトコスキー把持パターンにおける脳波情報からの特徴抽出および識別手法の性能比較」, ロボティクス・メカトロニクス講演会 2016, 横浜, 2016. 6. 8-11.
- ・ 飯島勝矢, 高橋競, 田中友規, 古賀正明, 神谷哲朗, 辻哲夫, 秋下雅弘:「市民主体の『三位一体型フレイルチェック』の取り組みに関する報告: 新たな介護予防戦略として国民運動を目指す」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2016. 6. 8-10.
- ・ 高橋競, 田中友規, Suthutvoravut U, 吉澤裕世, 藤崎万裕, 飯島勝矢:「地域在住高齢者のソーシャルキャピタル低下にロコモティブシンドロームが及ぼす影響—柏スタディより—」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2016. 6. 8-10.
- ・ 田中友規, 高橋競, 辻哲夫, 秋下雅弘, 飯島勝矢:「地域高齢者のフレイル予防に対する栄養・運動・社会参加の「三位一体」の重要性: 柏スタディ(大規模健康調査)より」, 第 58 回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2016. 6. 8-10.

- 麦山亮太：「キャリア形成プロセスにおける格差の男女比較研究——無業経験に着目して」，家族問題研究学会 2016 年度第 1 回例会，東京，2016. 5. 21.

4. コース生受賞歴

■ 小松廉

- 「SI2016 優秀講演賞」(第 17 回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会講演論文集 (SI2016))
- 「優秀賞」(先端人工知能論・Deep Learning 基礎講座 最終報告会)

■ 安藤絵美子

- 「Young Oral Presentation Award」(The 48th Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health Conference)

■ Rogie Royce Carandang

- 「Best in poster presentation」(The 1st International Conference on HealthCare, SDGs and Social Business 2017)
- 「Best in oral presentation」(Symposium of Natural Products Chemistry 2016)

■ 長木美緒

- 「Best PhD poster Presentation Award」(The 7th APRU Ageing in the Asia-Pacific Research Symposium)

■ 麦山亮太

- 「平成 28 年度 公益財団法人程ヶ谷基金 男女共同参画・少子化に関する研究活動の支援及びこれに関する顕彰事業 論文部門優秀賞」(家族社会学研究, 2016;28(2): 122-135)

4. 広報活動

1. パンフレット・ホームページ

2016年度版プログラム・パンフレット（28ページ）を作成。各研究科の研究室・事務室、プログラム教員、産学連携企業等、関係者に配布した。また、ホームページでは、学生、教員、スタッフのみならず、学外に向けても最新情報を発信し、共有化を図るように努めている。

〈GLAFS ホームページ <http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp/>〉



2. シンポジウム・ポスター等

2016年度国内シンポジウム・フライヤー



3月4日

土曜

ヘルシーエイジング社会の設計

前年度のテーマ「ヘルシーエイジング社会をめざして」を深化させ、
「ヘルシーエイジング社会の設計」をテーマに、各専門分野から最新知見または話題を提供し、
シンポジウムでは持続可能な社会をキーワードに、今後のコミュニティのあり方を具体的に検討していきます。

日時 平成29年3月4日(土)
10時00分～17時30分
(受付9時30分)

会場 東京大学浅野キャンパス
武田先端知ビル5F・武田ホール
入場無料

事前登録 Eメール glafs-event@iog.u-tokyo.ac.jp
FAX 04-7136-6677
申し込みの際、お名前・ご所属・ご連絡先(電話番号、メールアドレス)・希望時間帯(午前・午後・午前午後すべて)にご記入ください。
申込期限：平成29年2月28日(火)まで

① お問い合わせは、上記記載のEメールアドレスまたはFAXまでご連絡ください。

プログラム

午前 10:00～12:30 GLAFS 共同研究成果報告
研究テーマ 認知症の生活支援・住まいの選択・転倒しない住環境の提案・住民主体のコミュニティ活動・食事のあり様・生活支援ロボット

午後 13:30～14:50 IOG/GLAFS 最先端研究報告
荒井 良雄(都市地理学)
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻 教授
館 暁(システム工学 パーチャルリアリティ)
東京大学名誉教授 東京大学高齢社会総合研究機構 特任研究員
二瓶 美里(人間・生活支援工学)
東京大学大学院新領域創成科学研究科人間環境学専攻 講師
樋口 範雄(英米法 医事法)
東京大学大学院法政学研究所法曹養成専攻 教授

15:00～17:30 シンポジウム
・特別講演
広井 良典(京都大学こころの未来研究センター 教授)
・パネルディスカッション
登壇者：GLAFS大学院生
ゲスト：広井 良典

プログラムの詳細は、ホームページをご覧ください。
<http://www.iog.u-tokyo.ac.jp> もしくは <http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp>

主催： 東京大学高齢社会総合研究機構(IOG)
東京大学・博士課程教育リーディング・プログラム 活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム(GLAFS)



IARU
Graduate Student Conference 2016
International Symposium on Aging, Longevity and Health



Society for 2050: What Science and Technology Can Do to Build a Dynamic Aged Society

November 3, 2016

Doors Open: 13:00/ Main Event: 13:30–17:30

Venue: Fukutake Hall

Working Language: English

Share with the audience the challenges and opportunities the aged world is facing,
and gain insight about the future of the aged society.

Learn from world's top universities' practices of multi-disciplinary, multi-stakeholder,
or multi-society collaborations to tackle the issues.

Discuss the role of academia for the solution of the issues.

● Keynote Presentations by:



Sarah Harper
Title to be announced
Director, the Oxford Institute of Population
Ageing and Senior Research Fellow,
Nuffield College, University of Oxford



Michitaka Hirose
"Role of Advanced ICT for Hyper Aged Society"
Professor, Department of Mechano-Informatics,
Graduate School of Information Science and
Technology, The University of Tokyo

● Panel Discussion

"What science and technology can do to build a dynamic aged society to 2050 and beyond"

- Hiroko Akiyama (Moderator)
Professor, Institute of Gerontology, The University of Tokyo
- Lene Juel Rasmussen
Professor, Managing Director, Center for Healthy Aging,
University of Copenhagen
- Xiaoying Zheng
Professor and Director, Institute of Population Research, Peking University
- David Lindeman
Director, CITRIS Health Initiative, CITRIS at University of California, Berkeley

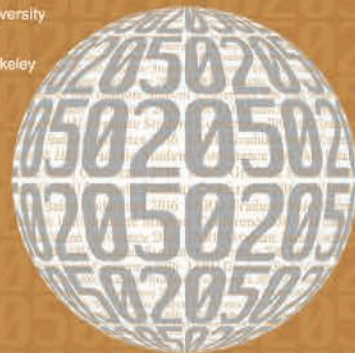
● Registration

The event is RSVP-only (seat is limited),
and is free and open to public.
To register, please contact below by October 31, 2016.

event@log.u-tokyo.ac.jp

In the subject of your email, please indicate "IARU Symposium"
and provide your name and profession.

<http://www.glafs.u-tokyo.ac.jp>



This symposium is hosted and organized by Institute of Gerontology and the Graduate Program of Gerontology (GLAFS) at The University of Tokyo.

平成28(2016)年度
 東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム
 「活力ある超高齢社会を共創するグローバル・リーダー養成プログラム」
 コース生(入学・編入)募集・募集要項

1. プログラムの概要

(1)本プログラムの教育研究上の目的

本プログラムは、修士課程から博士後期課程までの一貫した教育を行い、各専攻・専攻における教育を通じて「**高度な専門的研究能力**」を育成するとともに、本プログラム固有の教育カリキュラムを通じて、高齢社会問題に関する「**高度な専門的研究能力**」を育成し、もって、日本や世界各地の実現の現場において、**活力ある超高齢社会を実現する**の取り組みを主導する**世界レベルの博士人材**を育成することを目的としています。

(2)養成する人材像

活力ある超高齢社会を共創する能力、すなわち、高齢社会問題に関する幅広い総合的知識と、特定分野における専門的研究能力に加え、分野横断的専門家チームを率いて課題解決に向けた協働能力を備えた、博士レベルの人材。

(3)本プログラムの履修要件と学位

本プログラムを履修する学生(以下、コース生と呼ぶ)は、所属専攻の履修要件を満たすと同時に、本プログラムの提供する高齢社会総合研究に関する共通科目について20単位(講義10単位・演習10単位)以上、ただし、4年制博士課程に所属するコース生は18単位(講義10単位・演習8単位)以上を取得し、所属専攻における博士論文の審査に合格し、本プログラム固有の博士論文の審査に合格した場合、「高齢社会総合研究プログラム修了証」が授与されるとともに、所属専攻が授与する博士の学位記に「高齢社会総合研究プログラム修了」という認定が記されます。なお、原則として、博士前期課程(修士課程)において(4年制博士課程において12年次年度末までに)12単位(講義8単位・演習4単位)以上を取得する必要があります。

2. 申請資格

本コース生に応募できる者は、下記の専攻の修士課程または博士課程に2016年4月に入学予定の者および2015年10月に入学した者で、高齢社会の諸問題の解決に資する研究により博士の学位を取得しようとする者に限られます。

- 工学系研究科:**社会基盤学専攻、建築学専攻、都市工学専攻、機械工学専攻、精密工学専攻、化学システム工学専攻、先端学際工学専攻
- 人文社会科学系研究科:**社会文化研究専攻
- 教育系研究科:**総合教育科学専攻、学校教育高度化専攻
- 法学政治学系研究科:**総合法政専攻
- 総合文化科学研究科:**広域科学専攻
- 農学生命科学研究科:**生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、水圏生物学専攻、農業・資源経済学専攻、生物・環境工学専攻、応用動物科学専攻、獣医学専攻
- 医学系研究科:**社会医学専攻、生体・発達・加齢医学専攻、外科学専攻、国際保健学専攻、健康科学・看護学専攻
- 新領域創成科学研究科:**先端エネルギー工学専攻、メディカル情報生命専攻、人間健康学専攻、社会文化国際学専攻
- 情報理工学系研究科:**知能機械情報学専攻

【添付資料】

2016年度
 学生募集要項

3. 選抜方法

コース生の選抜は、申請書類(申請者情報、研究計画、参加動機と将来構想に関するエッセイ、指導教員等の意見書)、面接(注1)を総合的に判断して行います。

なお、今回の応募により選抜されたコース生のうち修士課程または医学系等の4年生博士課程に入学する者については、平成29(2017)年3月に資格試験(QE-1)を行い、2年次以降、引続き本プログラム履修が許可される学生を選抜します。3年制の博士課程(博士後期課程)に入学する者、すなわち本コースの博士後期課程への編入者については、平成29(2017)年3月に博士論文着手資格審査(QE-3)を行い、本コースの4年次への選抜が許可される学生を選抜します。

(注1) 面接は13月8日～18日の間に行予定です。面接の日時は応募者の都合に合わせて設定します。

4. 募集人員

今回の募集人員は、修士課程入学者25名・博士課程編入者10名です。

5. 申請手続

(1) 申請方法

- ア. 申請方法 申請書類を下記(ウ)宛に郵送または直接持参すること。
 イ. 受付期間 平成28(2016)年2月22日(月)から3月7日(月)17:00まで(必着)。
 ウ. 受付窓口 東京都文京区本郷7丁目3番1号・工学部8号館7階713
 東京大学高齢社会総合研究機構
 リーディングプログラム GLAFS 担当
 問、合わせ先 info@ghs.u-tokyo.ac.jp

(2) 申請書類等

- ア. 履修申請書 所定の用紙に必要事項を記入したものを。
 イ. 教員の意見書 所定の用紙に指導教員または専攻のプログラム担当教員が記載し、署名したものを。

6. 選抜結果発表及び採用手続

- (1) 選抜結果発表は、平成28(2016)年3月24日(木)13:00に高齢社会総合研究機構掲示板に掲示するとともに、申請者全員にメールで通知します。
 (2) 採用手続書類は、平成28(2016)年3月24日(木)13:00から、高齢社会総合研究機構で配布を開始します。採用予定者は、採用手続要領により、平成28(2016)年3月31日(木)17:00までに必要な採用手続書類(採用手続書類の提出)を行ってください。所定の期間内に採用手続を行わない場合は、採用内定を辞退したものと扱われます。

7. 奨励金の支給

QE-1に合格し博士課程進学を意思を明確に表明した博士前期課程(修士課程)2年次のコース生には月額6万円～15万円の学習奨励金、博士後期課程のコース生には月額15万円～20万円の学習奨励金を、**学業成績等**に**応じ**、支給します。なお、学習奨励金の支給を希望するコース生は、原則として、日本学術振興会特別研究員(DC1・DC2)に応募していただきます。
 なお、奨励金を支給した場合は、日本学術支援機構奨励金等の受給やアルバイトはできません。ただし、週5時間を限度として、TA・RAの業務や、医師資格等を持つコース生が臨床実習に出席することは認められます。また、奨励金を支給した場合は、滞所得として所得税の徴収申告が必要となります。年間所得に**応じ**、健康保険等の扶養家族から外れることがあるので留意してください。本プログラムを履修する場合でも、奨励金の受給を辞退することができます。また、本人の意思により奨励金の減額を申し出ることができます。
 学習奨励金の支給額については、本プログラムの予算削減等、やむをえない事情により、上記の額より減額することがあります。
 *本プログラム終了後、すなわち平成29年(2017)年3月以降の学習奨励金の支給については現時点では未定です。

8. 注意事項

- (1) 受付期間内に必要書類が完備しない申請は、受理されず。
 (2) 申請手続完了後は、どのような事情があっても、書類の変更は認めない。
 (3) 事情により、申請手続等について変更することがある。変更があった場合は、改めて通知する。
 (4) 申請に当たって知り得た氏名、住所その他の個人情報については、①履修者選抜(申請処理、選抜実施)、②採用者発表、③採用手続業務を行うために利用する。また、同個人情報は、採用者のみ①学務関係(学籍、修学等)、②学生支援関係(就職支援、就業科免除申請等)に関する業務を行うために利用する。
 (5) 申請書における記載内容について虚偽の記載をした者は、採用後においても選考コース生であることを撤回することがある。

9. 説明会

- (1) 募集に関する説明会を下記日程にて行う。
 第1回説明会 2月11日(月) 12:00～13:00(昼の部)、18:00～19:00(夜の部) 工学部8号館02号室
 第2回説明会 2月22日(月) 12:00～13:00(昼の部)、18:00～19:00(夜の部) 工学部8号館02号室

平成28(2016)年1月13日

発 行 者：東京大学 高齢社会総合研究機構

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

発 行 日：2017 年 4 月 20 日

印刷・製本：理想社

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo



Graduate Program in Gerontology: Global Leadership initiative for an Age-Friendly Society

2016 Project report

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1 工学部 8 号館 7 階

東京大学 高齢社会総合研究機構

© Institute of Gerontology, The University of Tokyo